

京都府遺跡調査概報

第 21 冊

1. 志 高 遺 跡
2. 国道 9 号バイパス関係遺跡
 - (1) 小 金 岐 4 号 墳
 - (2) 千 代 川 遺 跡 第 10 次
 - (3) 湯井地区所在古墳状隆起
3. 木津地区所在遺跡
 - (1) 第24地点(北中ノ谷古墳)
 - (2) 第 25 地点(中山古墳)
 - (3) 第26地点(中ノ平古墳)
 - (4) 第44地点(奥ヶ平遺跡)
 - (5) 第46地点(中ノ平遺跡)
 - (6) 菩 提 遺 跡
 - (7) 中 ノ 島 遺 跡

1 9 8 6

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく6年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和60年度は、33件の調査を実施しました。これらの発掘調査は、「京都府遺跡調査概報」第18冊から第20冊までにまとめて既に刊行いたしました。この第21冊に収めた概要は、昭和60年度に発掘を実施した「志高遺跡」、「国道9号バイパス関係遺跡」、「木津地区所在遺跡」に関するものです。

当調査研究センターでは、遺跡保存のためのあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努めていく所存であります。この概報を、既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」と合わせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を得、さらに炎暑の下、極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和61年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は

1. 志高遺跡 2. 国道9号バイパス関係遺跡 3. 木津地区所在遺跡
を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の報筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 志 高 遺 跡	舞鶴市字志高	昭60. 5. 30 } 昭61. 3. 20	建設省近畿地方建設局	長谷川 達 肥後 弘幸
2. 国道9号バイパス関係遺跡				
(1) 小金岐4号墳	亀岡市大井町小金岐	昭60. 6. 14 } 昭60. 8. 9	建設省近畿地方建設局	水谷 寿克 引原 茂治 森下 衛 西岸 秀文
(2) 千代川遺跡第10次	亀岡市千代川町北ノ庄	昭60. 8. 28 } 昭60. 1. 14		
(3) 湯井地区所在古墳状隆起	亀岡市大井町湯井	昭61. 2. 25 } 昭61. 3. 7		
3. 木津地区所在遺跡				
(1) 第24地点(北中ノ谷古墳)	木津大字梅谷小字北中ノ谷	昭60. 5. 8 } 昭60. 7. 14	住宅・都市整備公団	松井 忠春 小山 雅人 戸原 和人
(2) 第25地点(中山古墳)	木津町大字梅谷小字中山	昭60. 6. 4 } 昭60. 8. 8		
(3) 第26地点(中ノ平古墳)	木津町大字梅谷小字中ノ坪	昭60. 7. 26 } 昭60. 10. 9		
(4) 第44地点(奥ヶ平遺跡)	木津町大字梅谷小字奥ヶ平	昭60. 7. 11 } 昭60. 8. 10		
(5) 第46地点(中ノ平遺跡)	木津町大字梅谷小字中ノ坪	昭60. 8. 22 } 昭60. 9. 7		
(6) 菩提遺跡	木津町大字梅谷小字菩提	昭61. 1. 20 } 昭61. 3. 17		
(7) 中ノ島遺跡	木津町大字梅谷小字中ノ島	昭60. 11. 11 } 昭61. 3. 8		

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 志高遺跡昭和60年度発掘調査概要	1
2. 国道9号バイパス関係遺跡	27
(1) 小金岐4号墳	29
(2) 千代川遺跡第10次	38
(3) 湯井地区所在古墳状隆起	51
3. 木津地区所在遺跡	57
(1) 第24地点(北中ノ谷古墳)	59
(2) 第25地点(中山古墳)	59
(3) 第26地点(中ノ平古墳)	59
(4) 第44地点(奥ヶ平遺跡)	67
(5) 第46地点(中ノ平古墳)	67
(6) 菩提遺跡	72
(7) 中ノ島遺跡	75

挿図・付表目次

志高遺跡

第 1 図	志高遺跡と京都府北部の主要遺跡	1
第 2 図	志高遺跡調査位置関係図	2
第 3 図	年度別カキ安・舟戸地区調査位置図	3
第 4 図	調査地割付図	4
第 5 図	検出遺構図	5
第 6 図	南壁土層図	6
第 7 図	弥生時代検出遺構図	7
第 8 図	SH85205実測図	8
第 9 図	古墳時代検出遺構図	10
第 10 図	SH85111実測図	11
第 11 図	歴史時代検出遺構図	12
第 12 図	SB85006実測図	13
第 13 図	SB85024実測図	14
第 14 図	縄文土器拓影(1)	16
第 15 図	縄文土器拓影(2)	17
第 16 図	弥生時代出土遺物	19
第 17 図	小型仿製鏡(重圏文鏡)拓影	20
第 18 図	古墳時代出土遺物実測図	21
第 19 図	奈良時代出土遺物実測図	23

国道 9 号バイパス関係遺跡

第 20 図	調査地位置図	28
(1)小金岐 4 号墳		
第 21 図	小金岐古墳群分布図(部分)	29
第 22 図	調査地地形図	30
第 23 図	4 号墳断面図	31
第 24 図	4 号墳石室実測図(1)	33
第 25 図	4 号墳石室実測図(2)	34
第 26 図	出土遺物実測図	36

(2)千代川遺跡第10次

第 27 図	地区割り及び調査地位置図	38
第 28 図	地区割り図	39
第 29 図	トレンチ配置図	39
第 30 図	調査地土層断面図	40
第 31 図	遺構平面図	43
第 32 図	出土遺物実測図(1)	45
第 33 図	出土遺物実測図(2)	47
第 34 図	出土遺物実測図(3)	49

(3)湯井地区所在古墳状隆起

第 35 図	試掘調査地点位置図	51
第 36 図	調査地平面図	52
第 37 図	出土遺物実測図	53

木津地区所在遺跡

第 38 図	調査地位置図	58
第 39 図	第24地点(北中ノ谷古墳)地形測量図	60
第 40 図	第25地点(中山古墳)地形測量図	61
第 41 図	第26地点(中ノ平古墳)地形測量図	62
第 42 図	第24地点(北中ノ谷古墳)・第25地点(中山古墳)断面実測図	63
第 43 図	第26地点(中ノ平古墳)断面実測図	65
第 44 図	第44地点(奥ヶ平遺跡)地形測量図	68
第 45 図	第44地点(奥ヶ平遺跡)・第46地点(中ノ平遺跡)断面実測図	69
第 46 図	第46地点(中ノ平遺跡)地形測量図	71
第 47 図	菩提遺跡91bt平面実測図	72
第 48 図	菩提遺跡95bt平面実測図	73
第 49 図	菩提遺跡91・95bt断面実測図	73
第 50 図	菩提遺跡95bt遺構実測図	74
第 51 図	菩提遺跡出土遺物実測図	75
第 52 図	中ノ島遺跡調査地位置図	76
第 53 図	中ノ島遺跡29bt平面・断面実測図	77
第 54 図	中ノ島遺跡47bt平面・断面実測図	79
第 55 図	中ノ島遺跡出土遺物実測図(1)	82

第 56 図	中ノ島遺跡出土遺物実測図(2).....	83
第 57 図	中ノ島遺跡出土遺物実測図(3).....	84
第 58 図	中ノ島遺跡出土遺物実測図(4).....	86
第 59 図	中ノ島遺跡出土遺物実測図(5).....	86
第 60 図	梅谷瓦窯と興福寺.....	88

図版目次

志高遺跡

- 図版第1 (1)調査地遠景(志高城跡から) (2)調査地全景(上空から)
- 図版第2 (1)弥生時代遺構全景(上空から) (2)SH85205検出状況(北から)
- 図版第3 (1)SK85201遺物出土状況(南から)
(2)SK85206遺物出土状況(東から)
- 図版第4 (1)SD85211・石剣出土状況 (2)管玉出土状況
- 図版第5 (1)旧河道岸部(北から) (2)旧河道岸部遺物出土状況(北から)
- 図版第6 (1)古墳時代竪穴式住居跡群(東から) (2)SH85111検出状況(南から)
- 図版第7 (1)奈良時代掘立柱建物跡群(東から) (2)同上(南から)
- 図版第8 (1)SB85006検出状況(東から) (2)SB85024検出状況(東から)
- 図版第9 (1)SX85001遺物出土状況 (2)SK85044検出状況(北から)
- 図版第10 (1)縄文土器 (2)石鏃
- 図版第11 出土遺物(1)
- 図版第12 出土遺物(2)

国道9号バイパス関係遺跡

(1) 小金岐4号墳

- 図版第13 (1)調査前全景(西から) (2)4号墳全景(南北から)
- 図版第14 (1)4号墳石室全景(南西から) (2)4号墳石室床面
- 図版第15 (1)SD01(南東から) (2)SD02・SD04・SD05
- 図版第16 (1)SD02断面 (2)SX01(東から)
- 図版第17 出土遺物

(2) 千代川遺跡第10次

- 図版第18 (1)調査地全景(南から) (2)同上(北から)
- 図版第19 (1)1トレンチ全景(北から) (2)2トレンチ全景(南から)
- 図版第20 (1)3トレンチ全景(南から) (2)竪穴式住居跡(SH10099)(南から)
- 図版第21 (1)4トレンチ全景(北から) (2)井戸跡(SE10116)(北から)

(3) 湯井地区所在古墳状隆起

- 図版第22 (1)調査前全景(北東から) (2)トレンチ全景(東から)

木津地区所在遺跡

- 図版第23 (1)第24地点(北中ノ谷古墳) 試掘トレンチ調査状況
(2)第24地点(北中ノ谷古墳) 調査トレンチ全景
- 図版第24 (1)第25地点(中山古墳) 調査トレンチ全景
(2)第25地点(中山古墳) 断層断ち割り状況
- 図版第25 (1)第26地点(中ノ平古墳) 調査トレンチ全景
(2)第26地点(中ノ平古墳) 地層断ち割り状況
- 図版第26 (1)第44地点(奥ケ平遺跡) 調査トレンチ全景
(2)第44地点(奥ケ平遺跡) 東行きトレンチ
- 図版第27 (1)第46地点(中ノ平遺跡) 調査トレンチ全景
(2)第46地点(中ノ平遺跡) 遺構検出状況
- 図版第28 (1)菩提遺跡91・92bt全景 (2)菩提遺跡95bt全景
- 図版第29 (1)中ノ島遺跡29bt全景 (2)中ノ島遺跡29bt遺物出土状況
- 図版第30 (1)中ノ島遺跡47bt灰原検出状況-1 (2)中ノ島遺跡47bt灰原検出状況-2
- 図版第31 中ノ島遺跡47bt出土軒丸瓦
- 図版第32 中ノ島遺跡47bt出土軒丸瓦・軒平瓦
- 図版第33 (1)中ノ島遺跡47bt灰原出土土器 (2)中ノ島遺跡47bt床土出土陶器

1. 志高遺跡昭和60年度発掘調査概要

(第6次調査・舟戸地区)

1. はじめに

志高遺跡は舞鶴市字志高に所在し、京都府最大の河川、由良川の河口から約10km上流の左岸の自然堤防上に立地する。由良川は、京都府北桑田郡美山町に源を發し、大小100余りの支流を併合しながら、146kmを流れ、若狭湾に注ぐ。その中流域では、綾部盆地・福知山盆地の小平野を形成するものの、下流域では平野を形成しない。下流域においては、狭い谷を極めて緩やかに流れるため、しばしばおこる洪水が狭長な自然堤防を形成する。志高遺跡もそのような自然堤防の上に立地している。



第1図 志高遺跡と京都府北部の主要遺跡

1. 志高遺跡 2. 石本遺跡 3. 青野遺跡
4. 竹野遺跡 5. 扇谷遺跡 6. 途中ヶ丘遺跡

志高遺跡は、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所が行う由良川改修工事に先立ち、昭和55年度から継続調査されている。昭和55年から昭和58年度までを舞鶴市教育委員会が、昭和59年度からは当調査研究センターが主体となって調査を行っている。各年度の調査成果は以下のとおりである。なお、将来再び当遺跡が調査されることを考えて、今までの調査に各年度を一次と数えて、次数を付けることとした。以下、簡単に今までの調査を概観する。

第1次調査(昭和55年度)

舞鶴市教育委員会によって調査が行われた。上境・浅地区で遺構の有無を確認するために試掘調査を行ったが、遺構は存在しなかった。^(注1)

第2次調査(昭和56年度)

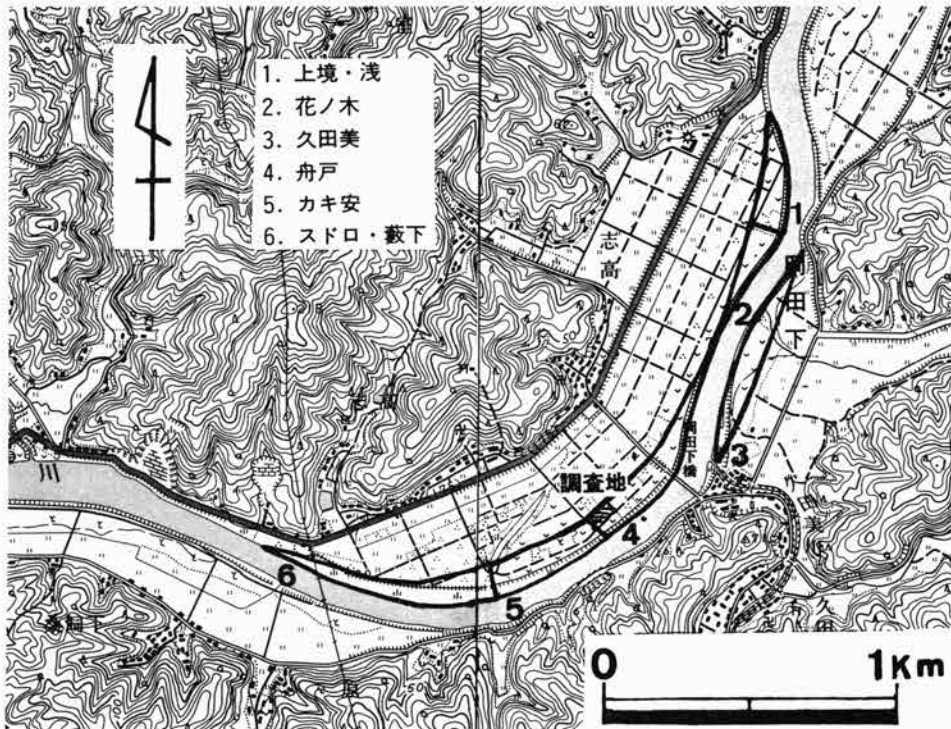
舞鶴市教育委員会によって調査が行われた。花ノ木地区で本調査を行ったほかに、久田美地区、スド口・藪下地区、カキ安地区で試掘調査を行った。花ノ木地区では、古墳時代前期の竪穴式住居跡6基、弥生時代の方形周溝墓1基、及び旧由良川と推定される旧河道を検出した。なお、この遺跡は上流の志高遺跡と1km近く離れているので、志高遺跡とは

区別して花ノ木遺跡と名付けた。久田美地区、スドロ・藪下地区では、遺構・遺物等の検出はできなかった。カキ安地区では、長池より下流側のほぼ全域で遺物包含層を確認した。^(注2)

第3次調査(昭和57年度)

舞鶴市教育委員会によって調査が行われた。前年度試掘調査を行ったカキ安地区で、本調査を行った。調査面積は、約3,650m²である。検出した遺構は、縄文時代から江戸時代の各時期にわたる。縄文時代の遺構は、土壇と溝である。また、包含層中からも遺物が出土した。遺構・遺物ともに、後期のものである。弥生時代の遺構は、前期・中期・後期末のものである。前期の遺構は、総数100余りのピット群である。竪穴式住居跡の柱穴の可能性はある。中期の遺構は円形竪穴式住居跡2基、方形周溝墓20基、土壇墓と溝である。方形周溝墓がこれだけ密集して見つかったのは、丹後地域でははじめてのことであった。後期末のものは、竪穴式住居跡1基である。古墳時代の遺構は前期の方形竪穴式住居跡8基・方形周溝墓7基と、後期の方形竪穴式住居跡4基である。奈良時代の遺構は、掘立柱建物跡15棟である。それ以外に中・近世の柱穴多数を検出した。この調査により、志高遺跡が縄文時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。^(注3)

第4次調査(昭和58年度)



第2図 志高遺跡調査位置関係図

舞鶴市教育委員会によって調査が行われた。昨年度に引き続きカキ安地区で本調査を行い、舟戸地区で試掘調査を行った。



第3図 年度別カキ安・舟戸地区調査位置図

カキ安地区での調査面積は、約1,200㎡である。検出した遺構は、弥生時代・古墳時代・奈良時代及び近世の遺構である。弥生時代の遺構は、中期の円形竪穴式住居跡2基・方形周溝墓5基以上と流路である。流路によって、中期の集落が居住空間と墓域に区切られていたことがわかった。古墳時代の遺構は、前期の方形竪穴式住居跡2基と、後期末の方形竪穴式住居跡2基である。奈良時代の遺構は5棟以上の掘立柱建物跡で、近世の遺構は井戸2基である。舟戸地区においても、縄文時代から近世までの包含層を確認した。^(注4)

第5次調査(昭和59年度)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を行った。調査地区は、前年度試掘調査を行った舟戸地区の由良川に近接する地域である。調査区を便宜上A区・B区に分けて、A区で約1,600㎡を、B区で約700㎡を調査した。A区では弥生時代から古墳時代前期にかけての旧由良川の分流と考えられる旧河道と、弥生時代から古墳時代にかけての溝、古墳時代の溝、奈良時代の焼土及び近世の集落を検出した。B区は由良川の旧川岸にあたり、遺構を検出するには至らなかった。^(注5)

以上が今までの志高遺跡の調査の簡単な概観である。

60年度の現地調査は当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・同調査員山下正・肥後弘幸が担当し、本概報は縄文時代の遺物を酒井彰子が、そのほかを肥後が執筆した。現地調査は昭和60年5月30日に着手し、昭和61年3月20日に終了した。その間、奈良時代の掘立柱建物跡群、古墳時代後期の方形竪穴式住居跡群、弥生時代の円形竪穴式住居跡群、旧由良川の分流もしくは本流と考えられる旧河道等の遺構群を検出した。また、付近で縄文時代前期の包含層を確認した。調査に際しては、舞鶴市教育委員会、舞鶴市史編さん室、京都府教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、京都府中丹教育局、京都府舞鶴地方振興局、志高地区、久田美地区の方々等のご協力を得た。地元の有志の方々には、作業員・調査補助員・整理員として、調査に参加していただいた。^(注6) また、多くの学生諸君には、授業の合間をぬって、調査補助員・整理員として、調査に協力していただいた。加えて、多くの諸先生・諸先輩の方々にも、ご指導・ご助言いただいた。^(注7) 特に、舞鶴市教育委員会吉岡博之

氏には、何度も現地・整理事務所に御足労願ひ、ひとかどならぬ御指導・御助言いただいた。記して感謝の意を表します。

2. 調査の概要

調査地は、59年度のB地区に隣接する地域である。由良川に平行して、30m×80mの大ききで掘削した。調査面積は、約2,400m²である。調査を開始したのは、5月30日である。排土その他周辺事情のため、徐々に調査地を広げていった。調査は3月20日をもって終了した。

掘削は、58年度の試掘調査に基づき、重機を用いて、地表下約1.5mの淡黄褐色粘性砂質土の面まで掘り下げた。この面から地表下約2.3mまで順次人力で掘り進めた。その間、淡黄褐色粘性砂質土の途中から切り込む掘立柱建物跡群、褐色粘性砂質土の上から切り込む掘立柱建物跡群、灰褐色粘性砂質土の上から切り込む方形竪穴式住居跡群、砂混じり黒褐色粘質土の上から切り込む円形竪穴式住居跡群と土塚等を検出した。また、旧由良川の分流もしくは本流と考えられる旧河道も検出した。加えて、調査地区外ではあるが、既に護岸工事の終わっている露頭面で地表下約4.5m付近で縄文時代前期の良好な包含層を確認した。

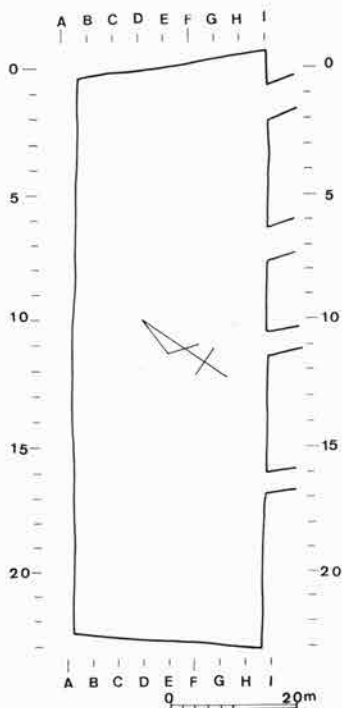
調査地区内でも、弥生時代の遺構調査後、重機ですらに3m掘り下げたが、縄文時代の包含層は検出できなかった。

調査地区内の地区割りは、57年度以来用いている地区割りを用いず、建設省の工事用杭を基本にして4m方眼で行った(第4図)。これは従来の地区割りを用いると、今回の調査区を斜交するために、調査に不便をきたすためである。

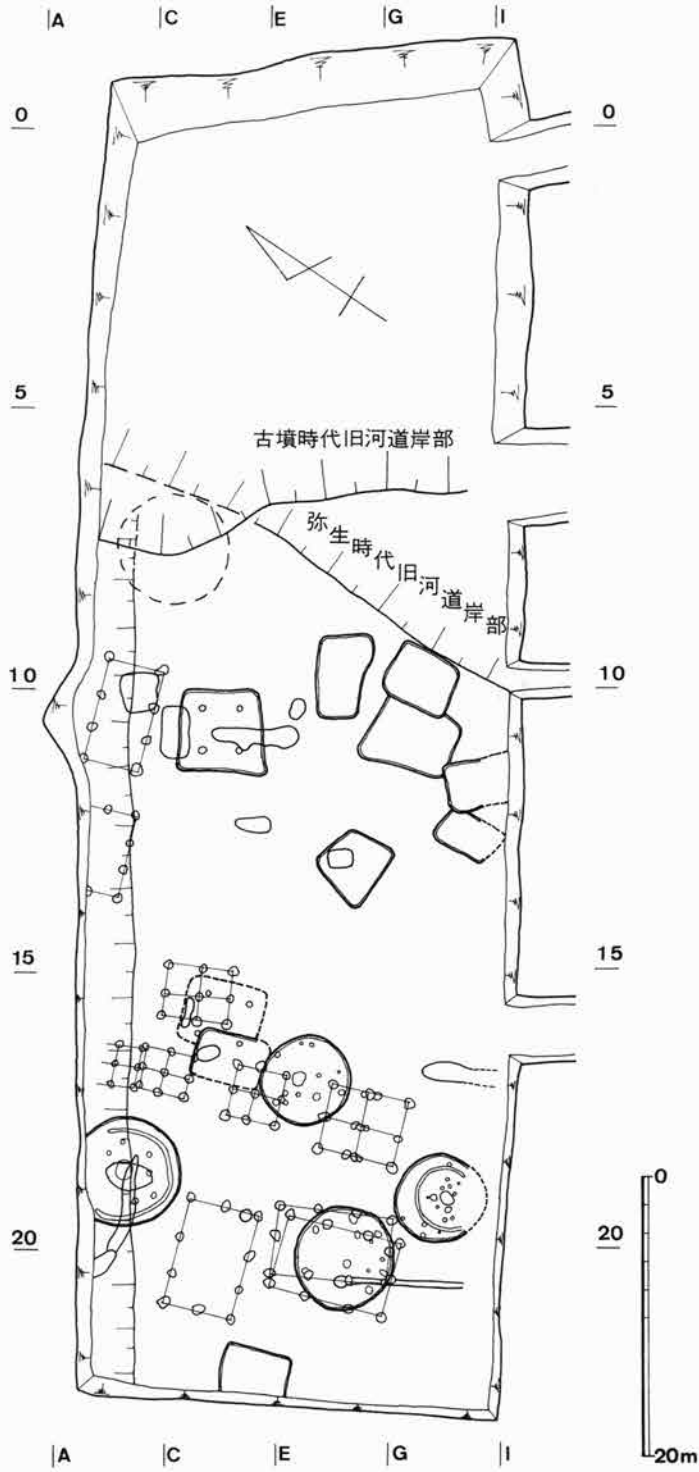
なお、便宜上、由良川の上流側を南とした。

3. 検出遺構

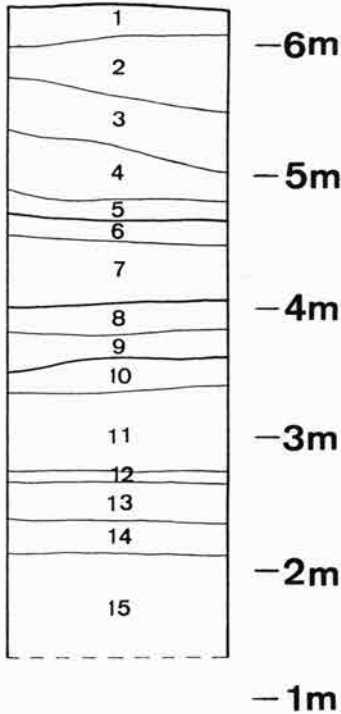
検出遺構には、85を頭に付け、次に弥生時代の遺構には2を、古墳時代には1を、歴史時代のものには0をつけた。また、竪穴式住居跡をSHで、溝をSDで、土塚をSKで、掘立柱建物跡をSBで、不明遺構をSXで示した。たとえば、SK85201は1985年度調査の弥生時代の土塚である。



第4図 調査地割付図



第5図 検出遺構図



1. 礫混り褐色砂質土
2. 褐色粘質土(近世)
3. 淡黒褐色中砂質土(中世)
4. 黄褐色細砂質土(平安時代中頃)
5. 淡黄褐色粘性砂質土(平安時代初頭)
6. 褐色粘性砂質土(古墳時代
後期-奈良時代中頃)
7. 灰褐色粘性砂質土
8. 黒褐色粘性砂質土
(S D 85211の上層)
9. 暗褐色粘性中砂質土
(S D 85211下層)
10. 褐色砂質土(やや細かい)
11. 褐色中砂質土
12. 暗褐色中砂質土
13. 黄褐色細砂質土
14. 黄褐色中砂質土
15. 黄褐色粗砂質土

第6図 南壁土層図

(1) 縄文時代

調査地区の上流約25mのところ、縄文時代前期の包含層の露頭を確認したので、調査地区内でも試掘を行った。しかし、弥生時代の包含層の下は、厚さ約2.5mにわたって無遺物の砂の堆積が見られるだけで、縄文時代前期の包含層は確認することはできなかった。

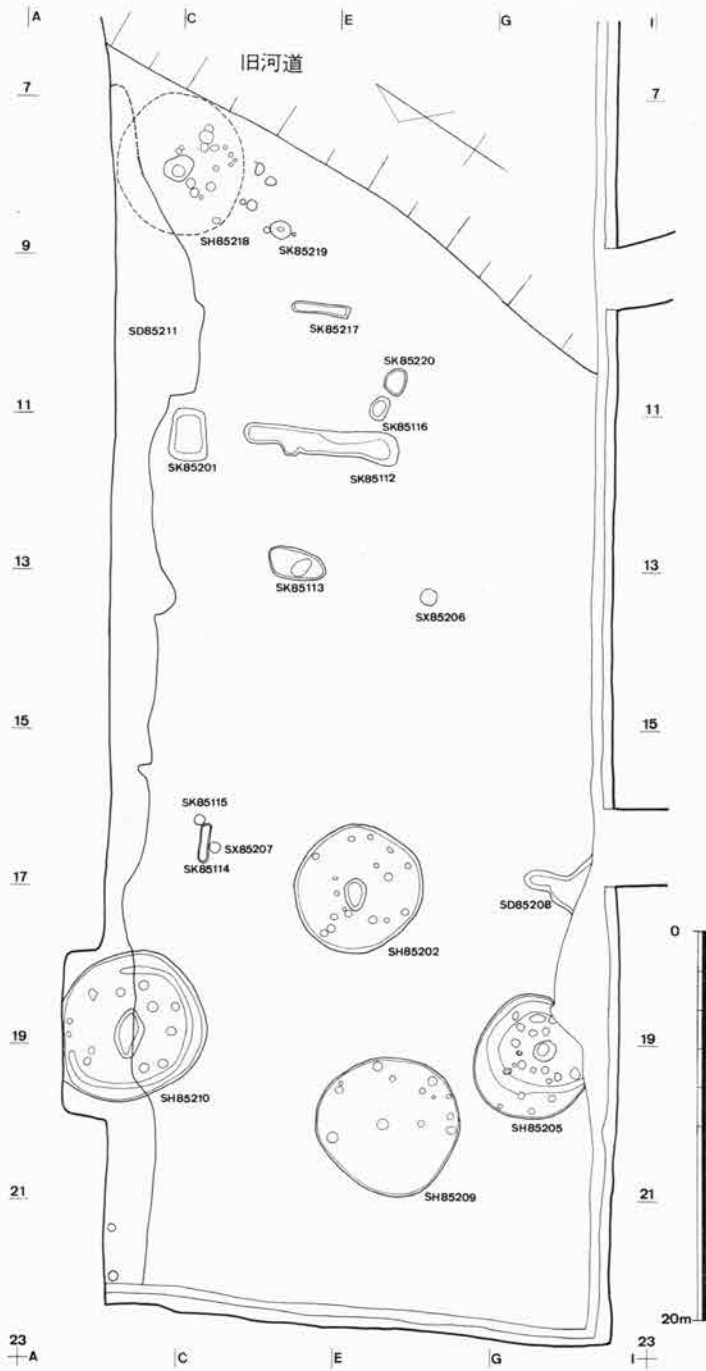
調査地区上流の露頭について、簡単に記す。縄文時代前期の包含層は、現地表面から4.6m・標高1.8mのところに存在する。包含層の厚さは、残りの良好な地点で約80cmを測る。包含層の最下層の標高は、1.0mに達し、現在の志高での由良川の水位0.5m~0.7mに極めて近くなる。包含層は、5層以上に分層でき、第1層と第5層に多くの遺物を包含している。包含層は、工事の終了した護岸から対岸に向かって約15mの幅で存在する。

(2) 弥生時代(第7図)

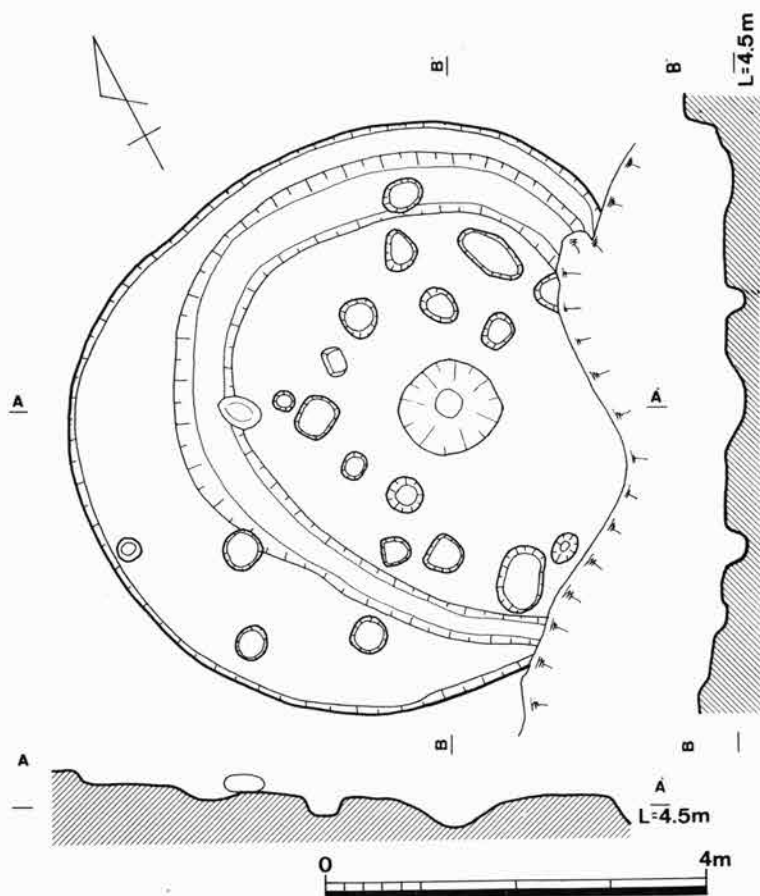
円形竪穴式住居跡5基をはじめ土壇・溝・旧河道等を検出した。

SH85202 直径約6.5mを測る円形の竪穴式住居跡である。17E区付近で検出した。竪穴の壁の残存高は約20cmである。中央に長径1.5m、深さ20cmを測る楕円形の土壇があり、炭・灰の混じる粘性砂質土が堆積していた。土壇の壁に、直接火を受けた痕跡を観察できなかった。焼土はこの土壇から1mほど北のところ検出した。柱穴と思われるものもいくつか検出した。住居跡内からは、磨製石斧・中期の弥生土器等が出土した。

SH85205(第8図) 直径約6.5mを測る円形の竪穴式住居跡である。19G区付近で検出した。竪穴の壁の残存高は約20cmである。床面は中央に向かってやや傾斜しており、中央には、SH85202同様直径約1.2mの土壇を持つ。他に柱穴と思われるものと、壁と中央土壇の間を走る浅い溝状遺構を検出した。石皿・小型磨製石斧・磨製石鏃・管玉・中期の弥生



第7図 弥生時代検出遺構図



第8図 SH85205 実測図

土器等が出土した。

SH85209 直径7.0mを測る円形の竪穴式住居跡である。20E区付近で検出した。壁の残存高は、約10cmである。他の住居跡と違い、中央には柱穴がある。壁の内側に沿って等間隔に並ぶ5個の柱穴があり、本来は等間隔で7個の柱穴を持っていたと思われる。遺物は他の住居跡に比べて少ない。

SH85210 直径約8.0mを測る円形の竪穴式住居跡である。19C区付近で検出した。SD85211によって西半分の壁を失っているが、床面は完存していた。壁の残存度は良好な所で40cmを測る。住居内の構造はSH85205と同じで、中央土壇の西約1.5mのところ焼土を確認した。人頭大の砥石・磨製石鏃・中期の弥生土器と、管玉の製作過程を復元できる資料等が出土した。

SH85218 SD85211と旧河道によって壁等が失われていたが、中央土壇と思われるものの存在・柱穴群の存在・遺物の出土状況から円形の竪穴住居跡が存在していたものと思わ

れる。磨製石鏃・管玉・中期の弥生土器等が出土した。

SD85211 調査区内の西側を調査区に平行に走る溝状遺構で、北から南へと、SH85210・SH85218を削り、旧河道へと注ぎ込んでいる。調査区内では、東肩から底にかけてを検出したのみであるが、全長60m以上、溝幅8m前後になるものと思われる。肩から底までの深さは、40～50cmである。銅剣形石剣・多量の弥生土器等が出土した。

SK85201 約2.8×1.5mの長方形を呈する深さ20～30cmの土坑である。11C区付近で検出した。土坑内には、多量の弥生土器が投棄された状態でぎっしりとつまっていた。すべて中期後半のもので、その大多数が壺形土器である。

旧河道 弥生時代中期にこの地区を流れていた河道で、岸部から多量の中期弥生土器が出土した。古墳時代前期には、流れをやや変えており、西側は古墳時代前期の流れによって肩が削られている。59年調査のSD42と同一のものと考えられる。

以上のほか多数の土坑等を検出したが、それらについては本報告に譲ることとする。

(3) 古墳時代(第9図)

方形竪穴式住居跡10基と土坑・溝等を検出した。

SD85102 長さ6m、溝幅0.8m、深さ約0.4mを測る溝状遺構である。19B区付近で検出した。小型丸底壺等前期の遺物が出土した。

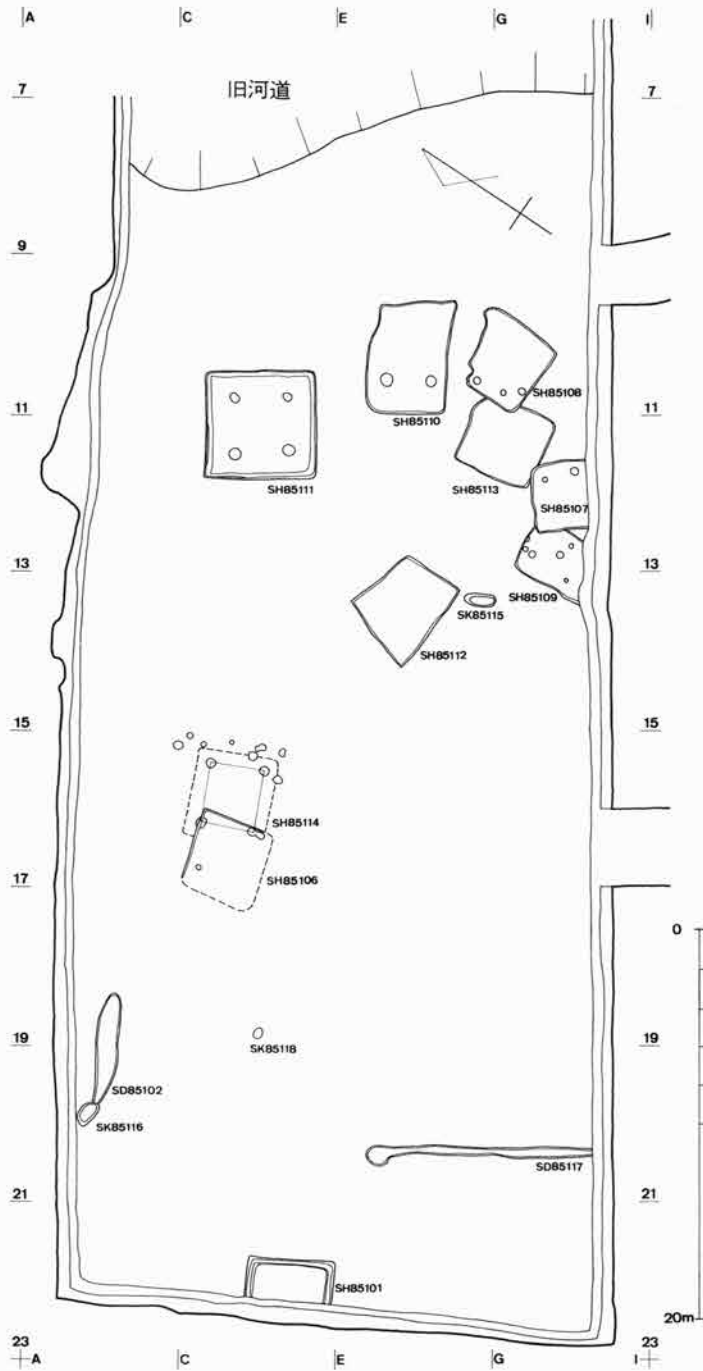
SH85101 4.5m×2.5m以上の方形竪穴式住居跡である。22D区付近で検出した。南半分は調査地区の外である。周壁溝と思われる溝を検出したが、柱穴は検出できなかった。

SH85106・SH85114 2基の方形竪穴式住居跡である。16D区付近で検出した。SH85114の上に、SH85106が重なっている。SH85106は竈の痕跡と思われる焼土と北側と西側の壁を、SH85114は竈の痕跡と思われる焼土と柱穴4個を検出した。

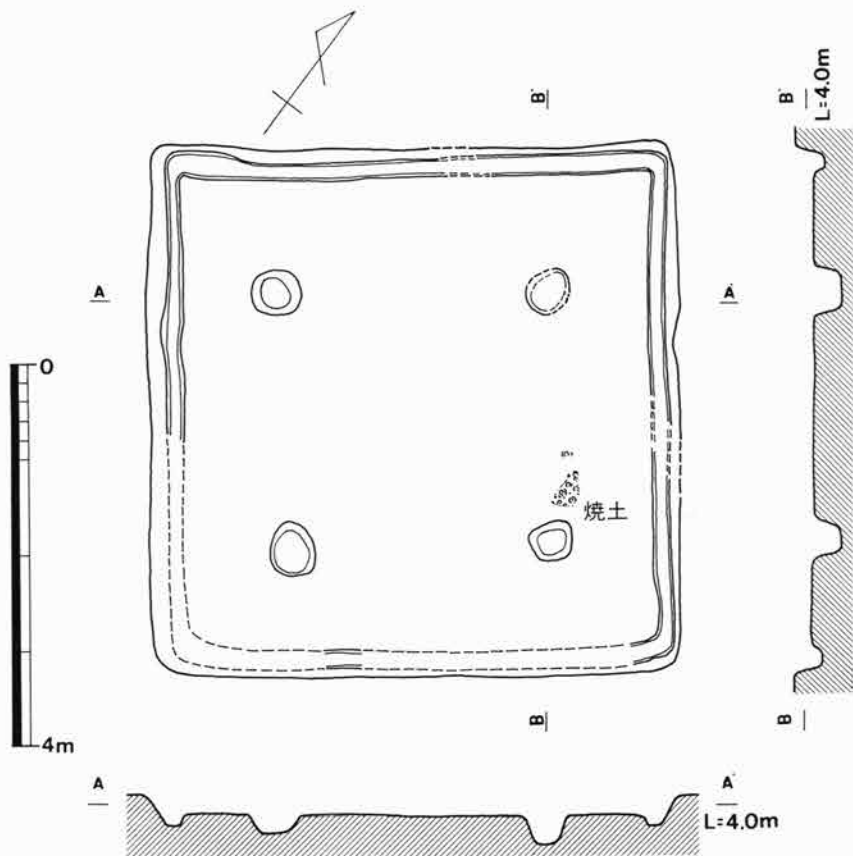
SH85111(第10図) 一辺5.6mの正方形を呈する竪穴式住居跡である。11D区付近で検出した。竈の残欠の可能性の高い焼土、4本の柱穴、周壁溝を検出した。壁の残存高は約20cmである。遺物は少なく、多くの弥生土器に混じって古墳時代後期の土器器甕が出土した。

SH85107・SH85108・SH85109・SH85110・SH85112・SH85113 12F区付近で検出した重なり合う方形竪穴式住居跡群である。いずれも床面しか残存しておらず、検出できた平面形も極めていびつである。本来は、SH85110はSH85111と同規模、他の住居跡は、一辺4m前後の住居跡であったと思われる。SH85108・SH85113には竈の痕跡と思われる焼土が残存していた。各住居跡とも時期を示す良好な資料を得ることはできなかった。

SD85117 21E区付近から21H区へさらに調査区外へ流れる溝状遺構である。古墳時代の遺構面で検出したが、時期を決定する遺物は少ない。



第9図 古墳時代検出遺構図



第10図 SH85111 実測図

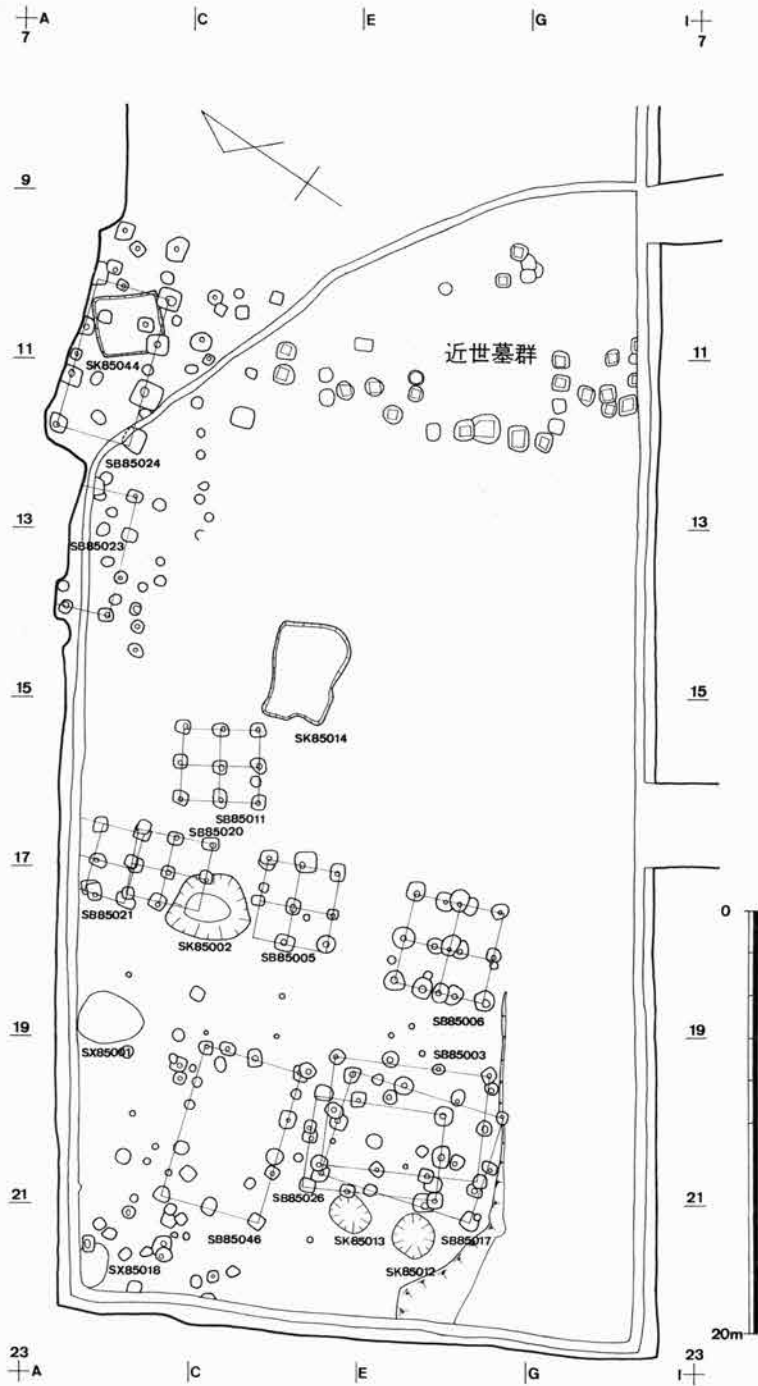
SK85116 20B区付近で検出した長径1.3m・深さ0.4mを測る楕円形を呈する土坑である。土坑内からは古墳時代後期末の土師器甕が出土した。

旧河道 8ライン以北に広がる旧河道である。弥生時代中期に既に存在したこの旧河道は、古墳時代前期初頭に流れをやや変え、その後、前期中頃にはすっかり埋まってしまう。岸部から完形に復元できる遺物が多量に出土した。岸部の埋土は5～6層に分層でき、弥生時代の包含層・砂層・古墳時代前期の包含層・砂層・包含層・砂層の順で堆積している。

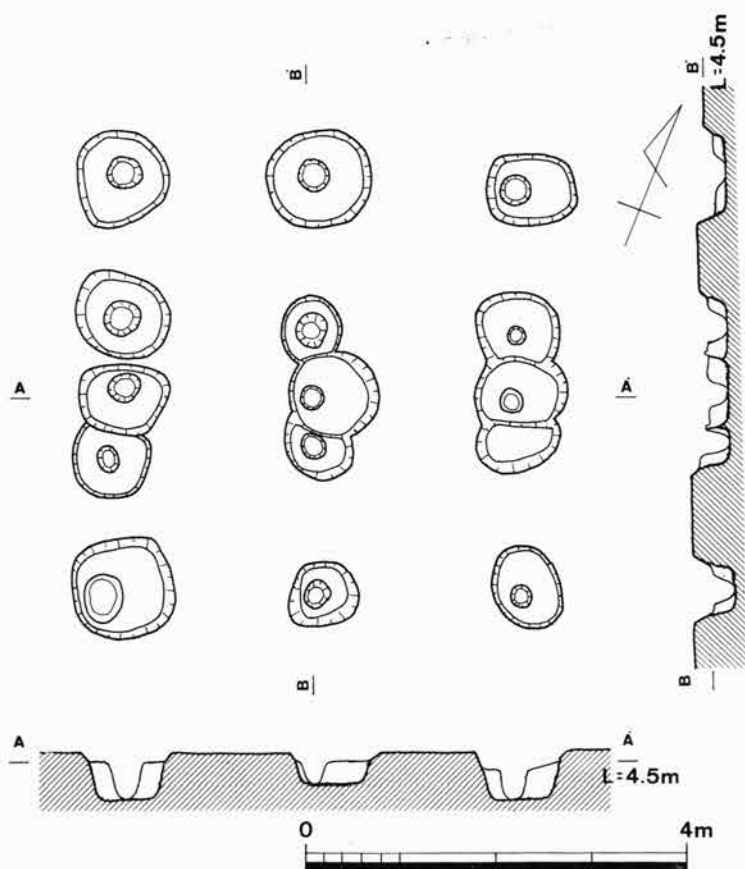
(3) 歴史時代(第11図)

奈良時代後期から平安時代初頭にかけての掘立柱建物跡群と土坑、中世のピット群、近世の土坑及び墓地を検出した。ここでは奈良時代後期から平安時代初頭にかけての遺構群のみを取り扱う。

検出した掘立柱建物は11棟であるが、これとは別にどの建物に属するものか不明のピットも多数ある。掘立柱建物跡は、2間×3間のものが4棟・総柱の倉庫のものが5棟・建



第11図 歴史時代検出遺構図



第12図 SB85006 実測図

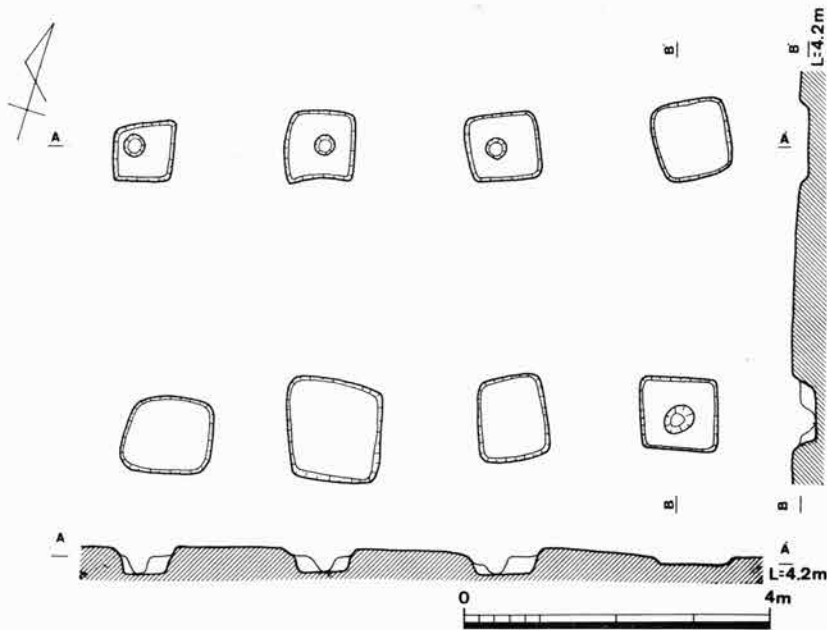
物の一部が調査区外にまでおよび建物の構造の不明なものが2棟ある。

SB85017・SB85046 褐色粘性砂質土の上から切り込む建物跡で、ほぼ同規模の2間×3間の建物跡である。建物の規模はSB85017が梁行5.2m・桁行7.5mを、SB85046が梁行5.0m・桁行7.5mを測る。柱の掘形は隅丸方形を呈し一辺50~70cmを、柱痕は径20~30cmを測る。棟方向を90度違えて、隣接して存在する。

SB85003 黄褐色粘性砂質土の上から切り込む2間×3間の建物跡である。20E区付近で検出した。桁行5.2m・梁行7.5mを測る。柱の掘形・柱痕の大きさは、SB85017と同じである。この建物は、規模・位置・切り合い関係から見て、SB85017を建て替えたものと思われる。

SB85026 20F区付近で検出した2間×3間の建物跡である。規模は桁行5.9m・梁行4.2mを測る。

SB85006(第12図) 黄褐色粘性砂質土の上もしくは上層から切り込む一辺4.5mを測る



第13図 SB85024 実測図

総柱の方形建物跡である。18F区付近で検出した。柱穴は東西方向に5個、南北方向に3個計15個検出した。2間×2間の建物に補助柱が備わっていたものと考えられる。柱の掘形は一辺50~80cmを測る。特に四隅の掘形が大きい。柱痕は径20~30cmを測る。倉庫である。

SB85005・SB85020・SB85021・SB85011 いずれも2間×2間の総柱の方形の建物跡である。SB85005が南北3.9m・東西3.6mを、SB85020が南北3.6m・東西3.3mを、SB85021が南北3.3m・東西1.8m以上を、SB85011が南北・東西ともに3.6mをそれぞれ測る。SB85011を除く3棟は、SB85006を東端にして、ほぼ一直線に並ぶ。重複関係にあるSB85020とSB85021は前者が先行するものである。この4棟はいずれも倉庫であり、SB85006と併せて倉庫群を形成する。

SB85023 2間以上×3間の建物跡である。13B区付近で検出した。建物の規模は南北6.0m・東西4.0m以上を測る。柱穴の掘形は一辺40~60cmと2間×3間の建物より小さい。

SB85024(第13図) 3間×1間以上の建物跡である。10B区付近で検出した。調査区の西壁際にあたるため、さらに西に広がり総柱の建物になるのかそれとも1間×3間の建物になるのか不明である。検出した規模は南北7.2m・東西3.6mである。柱の掘形一辺80cm~120cmとかなり大きい隅丸方形を呈する。柱痕は30cm前後である。柱間寸法・掘形の規模等から上部構造が他の建物に比べて大きいことがうかがえる。

SX85001 土師器・須恵器がまとまって出土した土器溜り状の遺構である。19B区付近で検出した。出土した遺物はいずれも杯・皿・蓋等の供膳形態のものが多い。

SK85044 一辺3m残存高約15cmを測る正方形を呈する土坑である。10B区付近・SB85024の下層で検出した。西壁中央のやや内側に須恵器の杯身・杯蓋が重なって据え置かれた状態で出土した。

これらの遺構のほか、方形を呈する土坑SK85014・焼土を含むSX85019等がある。

4. 出土遺物

各遺構・包含層から多量の遺物が出土した。その総数は整理箱約400箱分に及ぶ。内訳は縄文時代に属するものが約10箱、弥生時代に属するもの約300箱、古墳時代に属するもの約60箱、奈良時代から平安時代初頭に属するもの約30箱、中近世に属するもの約5箱である。現在整理作業中のため、ここではその一部を紹介するにとどめる。

(1) 縄文時代

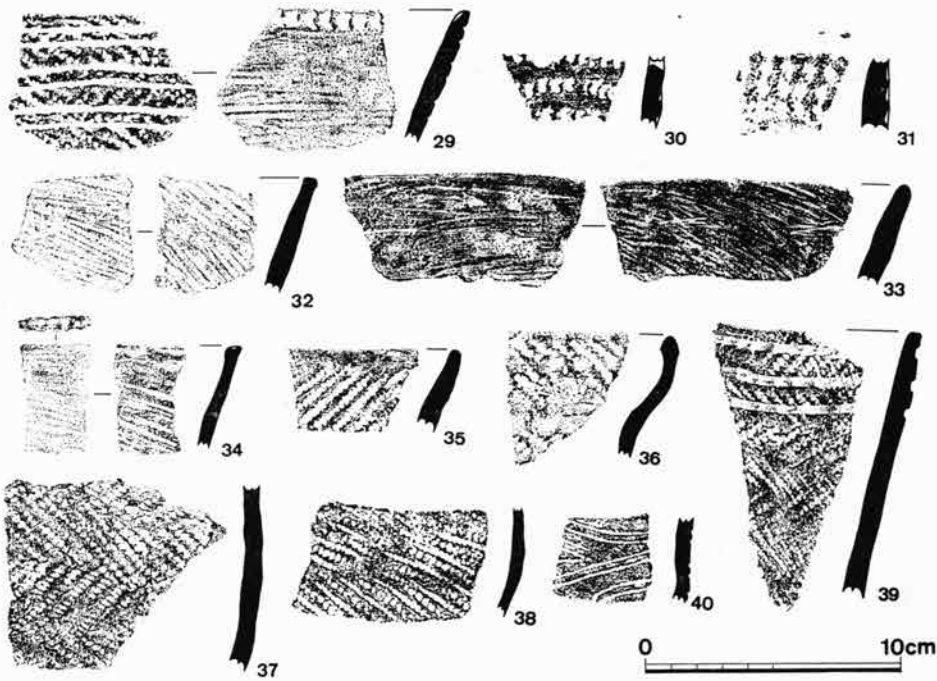
調査区外露頭面付近で表面採集を行った。多数の縄文土器片と石鏃等の石器類がある。ここでは土器についての概観を述べる。

前期縄文土器(第14図・第15図) 1～14は半截竹管状工具を刺突原体とし、爪形文を構成する土器群である。1は「3」字状の2連単位刺突文を持つ。2連間の結合が弱く、くずれが生じている。端面に2連の刺突を加え、内面に条痕調査を施す。胎土に金雲母・砂粒を含む。2～7は半截竹管状工具の内側を押圧したC字形爪形文である。2～4は条痕調整がみられないことから、北白川下層Ⅰ式には含まれないもので、Ⅱ式の爪形文であると判断した。2は口縁端面に刺突を加える。4は色調が他と異なり、黒褐色を呈す。半截竹管でひいた平行沈線の上にC字形爪形文を施文し、口縁端部には刺突をもつ。5は爪形上下の押圧が深く、口縁端面に刻みがあり、外面にRLの縄文を施す。爪形上下の押圧が深いにもかかわらず、条痕調整はみられない。6は口縁端面に刺突を加え、内面に条痕調整を施す。7は爪形上下の深さは均等で、中央部が若干深い。8～11はC字形爪形文を千鳥状に施文する連続爪形文である。8は爪形文が鎖状に施文するものと思われ、沈線を有する。9は口縁端面内側寄りに刻みをいれる。10は色調が他と異なり、黒褐色を呈し、砂粒を含む。11は内面に浅い条痕調整がみられる。12～14は突帯上に爪形文を施文する。12は口縁端面に刻みをもつ。13, 14は黒褐色の色調を呈する。

15～28は突帯文を用いる土器群である。15～17は突帯上半を半截竹管状工具で加飾する。15は口縁部内側の突帯には、その上半にのみ爪形文を施しており、外面の突帯についても同様である。15・17はRL, 16はLRの縄文を地文として突帯を貼り付ける。16は色調が赤



第14図 縄文土器拓影 (1)



第15図 縄文土器拓影 (2)

褐色を呈し、口縁内側をやや肥厚させて縄文を施文する。15は、淡い灰褐色の色調を呈し砂粒を多く含む。18~22は突帯上をΣ字状に加工した半截竹管状工具で加飾する。19はRL, 18・20・21・22はLRの縄文を地文とする。21は縄文が口縁部端部内側にも及び、縦に突帯が貼り付く。22は内面に爪の押圧を残す。23~26は突帯上を縄文で押圧したものである。24・26は口縁端面にも縄文が施される。24・26の波頂部には縦に突帯が貼り付く。24・26はRL, 23・25はLRの縄文である。27は突帯上に斜めの刻み目を持つ。地文はLRの羽状縄文である。28は突帯上に施文しない。肋骨状に突帯を配置し、口縁端面に刺突を加える。

29はLRの縄文地に半截竹管状工具で沈線を施文する。内面に条痕調整と爪形文を有する。30, 31は各種刺突文である。30は勾玉状の刺突を施し、補修孔をもつ。32~34は条痕を主文様とし、内面にも条痕調整がみられる。34は口縁端部に刺突をもち、黒褐色の色調を呈す。35~38は縄文を主文様とする。36は端部内側にも縄文がめぐる。36・38は, RL35はLRの縄文で, 37はRLの羽状縄文である。39はRLの羽状縄文地に篋状工具による浅い押し引きをし、縄文は口縁端部にも及ぶ。40は全面に赤色顔料を塗布する。色調は他の土器に比べ^(註8)白い。

(2) 弥生時代

弥生土器をはじめ各種の石器・石製品が遺構及び包含層から出土した。今回出土した遺

物の中ではこの時代に属するものが大半を占める。

①**弥生土器**(16図) 出土した弥生土器の大部分は中期後半に属するものであるが、わずかながら前期・後期のものも見られる。ここでは中期後半のものについて紹介する。

壺形土器(第16図41・42・43・44) 広口壺が大半を占めるが長頸壺・無頸壺・水差し形土器等も見られる。44は当遺跡において一般的に見られる壺形土器である。口縁端部を凹線文や擬凹線文・刻み目で飾るものもあるが、装飾的効果は乏しく、赤褐色の粗い胎土を持つ。頸部から口縁部にかけて斜め上方に直に、もしくはやや外反気味にのびる。42のように把手をもつものもある。この土器には大型品はみられない。胴の張った豊かな器体を持ち、口縁を大きく外反させ、口縁端部や内側に凹線文・円形浮文・扇形文・斜格子文等を配し、胴部上半部を櫛描文で飾るものもみられる。41のように受け口状の口縁と凹線文と指突突帯からなるものがある。43は無頸壺で口縁端部を水平に折り曲げ、体部上半に凹線文を施し、それより下を篋磨きで仕上げている。

甕形土器(16図45) 壺形土器のような器形の変化はなく、法量の違いによって分類可能である。45は大型のものである。胎土・色調とも、42・44の壺形土器と似ているものが大半を占める。また、上半部を刷毛で、下半部を粗い篋磨きで調整していることも共通している。

高杯形土器(第16図46・47・48) 高杯には杯部と脚部がともに出土したものが少なく、杯部と脚部の関係が定かではない。杯部には46・47の2つの形態がある。脚部には48の形態をとるものと凹線文を持つ柱状脚を用いるものがある。高杯のなかにはベンガラが塗られているものがある。

鉢形土器 手のひら大の小型のものと形のわからない大型のものがある。

②石器

打製石鏃 安山岩もしくは頁岩製で多くは無茎のものである。約30点出土した。

磨製石鏃 粘板岩製のもので住居跡内からその多くが出土した。石剣もしくは石庖丁の再利用品と思われるものが目に付く。

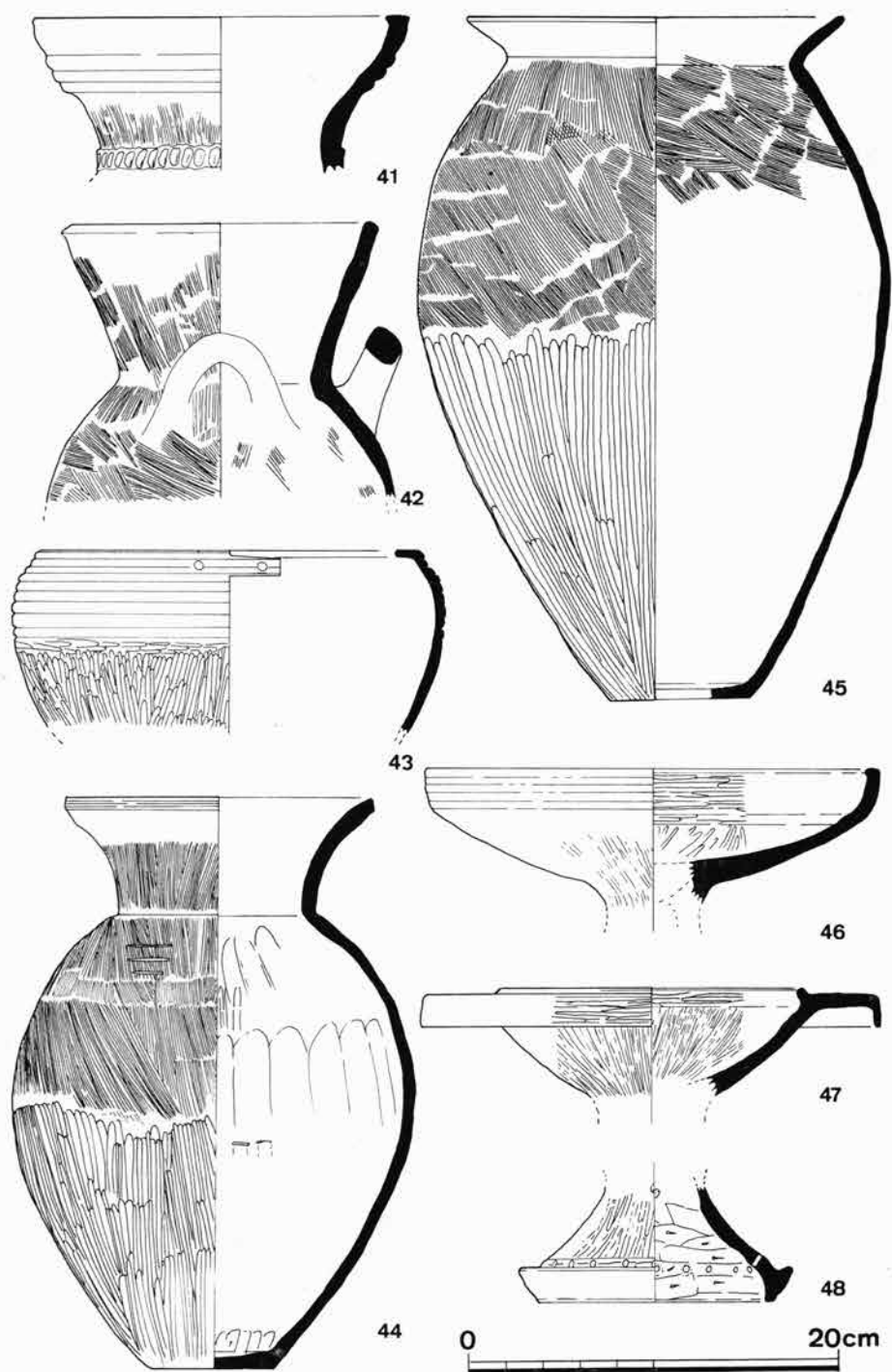
打製石斧 粘板岩の板石をもちいた土掘り具である。先端部が著しく磨耗している。

磨製石斧 一部欠損しているものを含めて、40点近く出土した。石材はおそらく玄武岩と思われる石を中心に様々なものを用いている。太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧と各種ある。

砥石 人頭大のものから親指大のものまで100点近く出土した。アプライトを多く用いる。

磨石 拳大のものも多く搗き石と兼用のものもある。

石皿 花崗岩を用いた人頭大のもので、住居跡および溝から出土した。



第16図 弥生時代出土遺物

41~44. 壺形土器 45. 甕形土器 46~48. 高杯形土器
 SD85208; 41, 44, 46~48, SK85207; 43, 旧河道岸部; 45

玉類 住居跡及びその周辺から、碧玉製の管玉およびその製作過程を復元し得る資料が出土した。管玉の完成品は直径5mm前後、長さ1~2cmを測る大型のものと、直径2~3mm、長さ5~12mmを測る小型品がある。約30出土した。

磨製石剣 銅剣形・鉄剣形の両者が出土した。銅剣形のものはその全容を把握できるので、一度先端が欠損した後に再び研磨して、利用していることがうかがえる。

(3) 古墳時代

古式土師器・須恵器・土師器・土製品・銅鏡等が出土した。

古式土師器(第18図49~56) 旧河道の岸部からまとまって出土した。旧河道岸部では幾つかの層が形成されており、土器群もその層ごとに一定の傾向を示す。下層の土器群は小型器台・小型丸底壺等の小型の器種(49~54)と、丸底の叩き甕、口縁部の内湾化の少ない布留式の甕を含む。上層の土器群は、口縁部に輪積みの痕跡を残す厚手の壺・甕と、口縁部の内湾化の進んだ布留式甕・鼓形器台を含む。土器はその多くが完形に復元し得るもので、その出土状態と考えあわせ、単に偶然に堆積したものではない。壺形土器の幾つかには意図的な底部穿孔を行っている。

須恵器(第18図57・58) 後期に属する遺物の出土量は少ない。住居跡内から小片が出土している。ほとんどが甕の破片である。57・58はSK85118から出土した杯蓋である。

土師器(第18図59) 60の甕は包含層から出土したものであるが、幾つかの住居跡内からも同様のものが出土している。口縁内側を強い横撫でによって段を付けるのを特徴とする。

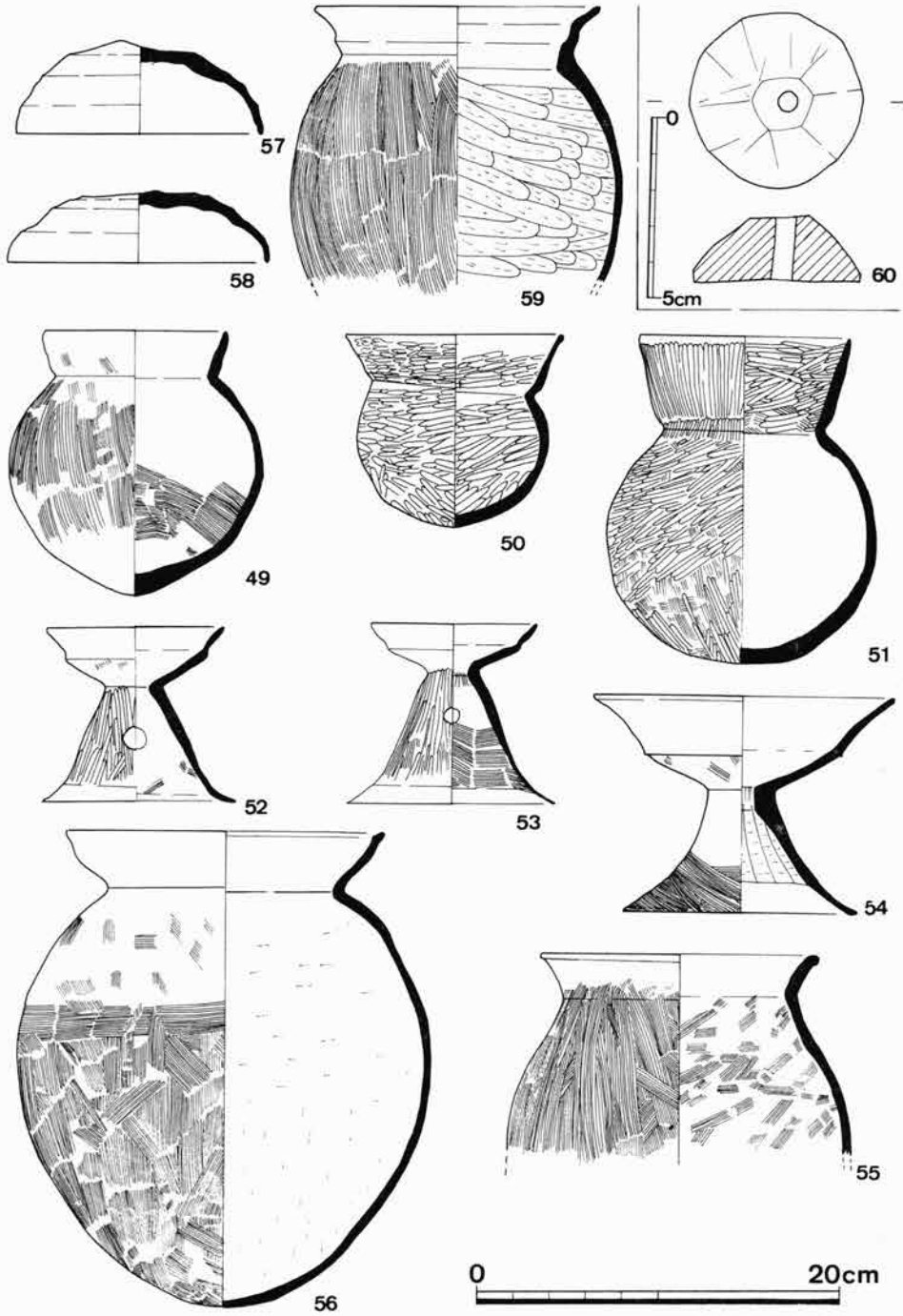
土製品(第18図60)

土師質の管玉形土製品・勾玉形土製品と須恵質の紡錘車(60)がある。

銅鏡(第17図) 面径6.0cmを測る小型の仿製鏡で古墳時代の包含層から出土した。付近では、前期の小型器台が出土している。鏡背の文様構成は、外側から幅広い平縁一櫛歯文一



第17図 小型仿製鏡(重圈文鏡)拓影



第18図 古墳時代出土遺物実測図

須恵器：57・58 須恵器紡錘車：60 土師器：59・49～56 土坑：57・58
古墳時代包含層：59・60 旧河道：49～56

二重の圈線—変形鋸歯文—圈線によって繋がれた珠文—鈕の順である。

(4) 歴史時代(第19図)

奈良時代から江戸時代の各時代にわたる遺物が出土しているが、ここでは奈良時代後半から平安時代初頭にかけての遺物について紹介する。

遺物はSX85001をはじめ各遺構および包含層から出土した。須恵器・土師器・緑釉陶器・土製品等がある。

①須恵器(第19図61~79) 蓋・杯・皿・壺・甕等があるが、壺・甕はきわめて少量で供膳形態のものが大部分を占める。

蓋(61~67) ほとんどがつまみを持つものであるが、SX85001から出土したものの中には61のように、つまみを持たないものがある。つまみには宝珠つまみのほかに、63のように輪状のつまみを持つものがある。天井部がまるみを帯びるものと扁平なものがある。

杯(68~76) 高台を持つものと、持たないものがある。高台をもたないもの(68・69)には、体部の外傾度の小さいもの(68)と大きいもの(69)がある。高台を持つもの(70~76)には、高台を持たないものと法量の等しいもの(70・71・72)と、法量の大きいもの(73・74・75)および口径が小さく器高の大きいもの(76)がある。それぞれ、高台を底部端の内側に付けるものと、底部端ぎりぎりにつけるものがある。73は体部下半に稜を持ち、稜から上部を外反させるものである。

皿(77・78) 高台を持つ皿が出土している。78は土師器にも同一器種(85)が存在する。以上の供膳形態のものほかに小型の壺(79)や大型の甕がわずかながら出土している。

②土師器(第18図80~88) 杯・皿・甕等がある。

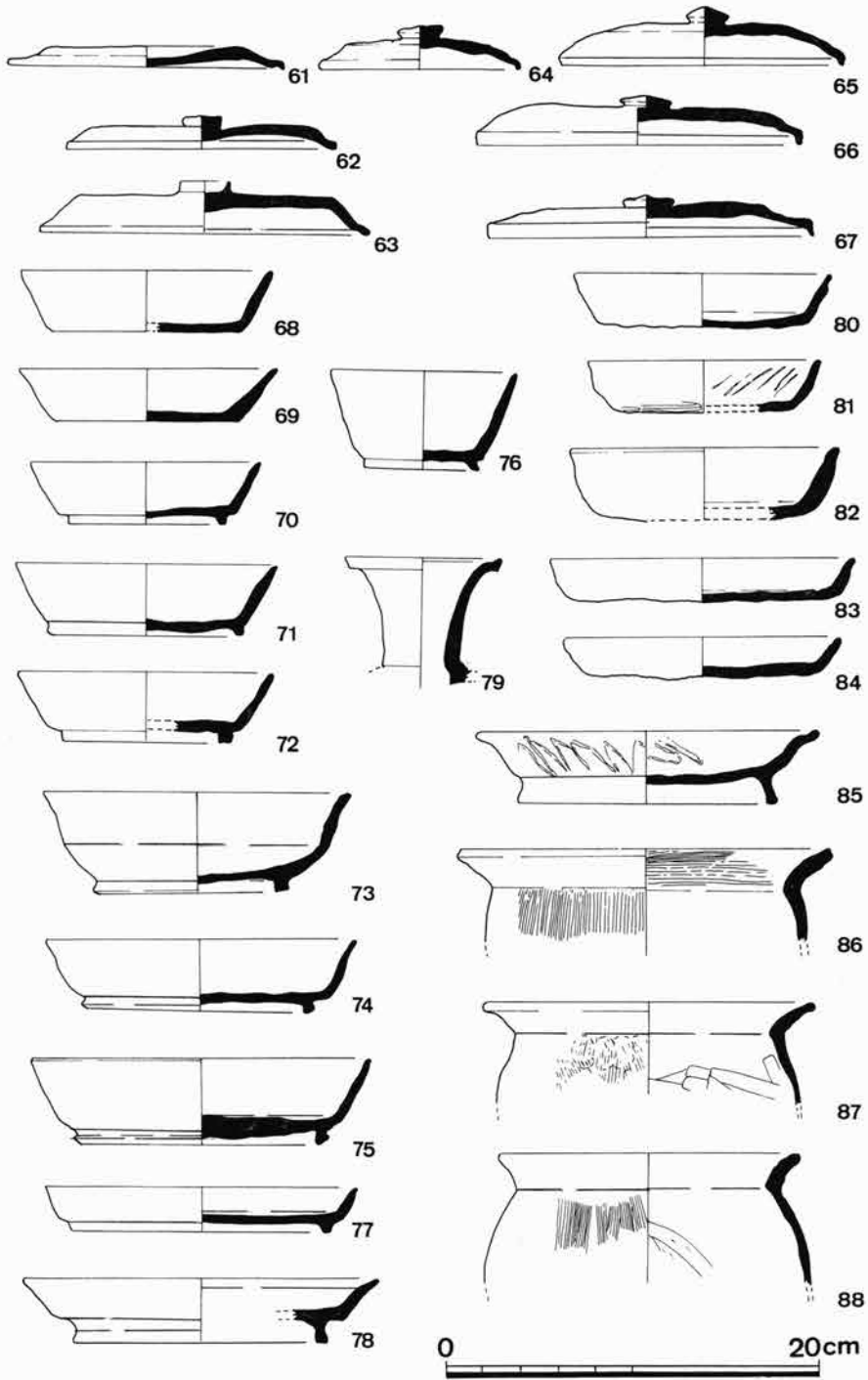
杯(80~82) いずれも高台を持たないもので、口径12~14cm・器高約3cmを測るもの(80・81)と、口径約15cm・器高約4cmを測るもの(82)がある。内面には撫で調整を行い、外面は底部と体部下半に篋削りを施し、体部上半及び口縁部に撫で調整を行っている。81は内面に暗文を施す。

皿(83~85) 高台を持つものと持たないものがある。いずれもロクロ上で成形されている。高台を持たないもの(83・84)は、口径15~17cm・器高約2.2cmを測る。SX85018からは84を含めて丹塗りの皿が2点出土した。高台を持つもの(85)は内外面に暗文を施す。

甕(86~88) SX85001から口径20cm前後を測る甕が出土している。体部外面を刷毛で調整し、体部内面は篋削りを行っている。

③緑釉陶器 椀の底部と体部の破片がピットおよび包含層から出土している。

④土製品 須恵器質の土錘が数点包含層から出土している。



第19図 奈良時代出土遺物実測図

須恵器：61～79 土師器：80～88 SX85001；61～63・68～71・73・77～83・86～88
 SX85018；64・84 SX85044；74・67 ピット；65・66 包含層；72・75・76・85

5. ま と め

以上ここまで60年度調査の概要を簡単に述べてきたが、ここで各時代ごとに簡単にまとめておきたい。

(1) 縄文時代前期の集落

由良川下流域では、各地で縄文時代の遺物が採集されており、自然堤防上に多くの遺跡が存在することが予想されている。発掘調査においても桑飼下遺跡・三河宮の下遺跡で縄文時代後期の集落跡が確認されている。前期の集落遺構は現在のところ確認されていないが、遺物は三河宮の下遺跡・八雲遺跡等で採集されている。志高遺跡では、遺物の包含状況・遺物が磨耗していないこと、断面で遺構状のものを観察したことから、前期の集落が埋まっている可能性が極めて高く、今後の調査に期待するところである。

また、今回採集した資料は、福井県鳥浜貝塚のものと共通点が指摘できる。

(2) 弥生時代中期の集落

中期の円形住居跡を5基検出したことにより、以前の調査と照らし合わせて、弥生時代中期の志高遺跡の集落構造を再確認できた。集落は現在の由良川左岸ぎりぎり付近を最高地点とした自然堤防上の西側緩斜面上に立地している。集落は大溝(SD8301)を境に北を居住空間、南を墓域とに分けられている。居住空間は北を由良川の分流によってさえぎられている。居住空間には、直径14mの大型住居を含む、7基以上の住居が存在した。

また、石剣・玉類が出土したことは、志高遺跡の性格や歴史的背景を考える上で貴重な資料である。碧玉製管玉の生産過程を復元できる資料の出土は興味深いものである。

(3) 古墳時代前期の集落

調査区内では住居跡等を検出できなかったが、旧河道岸部から多量の土器と、包含層から小型仿製鏡が出土した。旧河道出土の土器群は非常に良好な資料で、当地域での土器編年作業を進める上での貴重な資料となるであろう。小型仿製鏡は弥生時代末期から古墳時代前期初頭にかけて、近畿地方から瀬戸内海沿岸を中心に分布するものに属すると考えられる。

(4) 古墳時代後期の集落

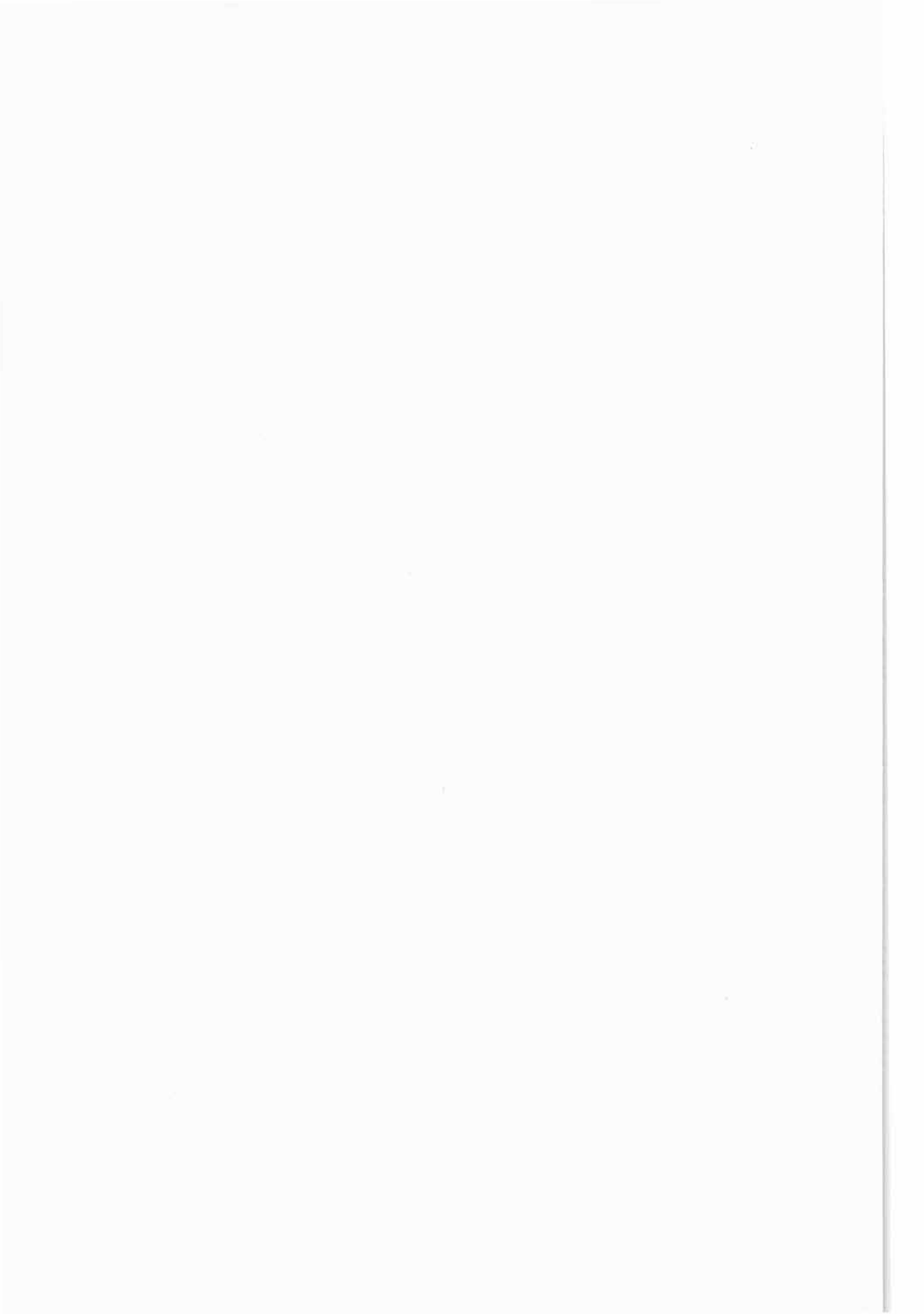
計10基の方形竪穴式住居跡を検出した。これらは幾つかの群に分けることができるものであろう。

(5) 奈良時代の集落

倉庫群を含む掘立柱建物群と土塚からなるこの集落は、建物の方位・検出遺構面・柱穴の切り合い関係・出土遺物から大きく2時期に分けて、集落の変遷をたどることができる。

建物の整然とした配置と建物の規模から、一般の集落とは異なった集落を想像させる。

- 注1 杉本嘉美『京都府舞鶴市志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会 1981
- 注2 吉岡博之『京都府舞鶴市文化財調査報告 第6集志高遺跡——昭和56年度花ノ木地区・ストロ口藪下地区および久田美地区の調査概報——』舞鶴市教育委員会 1982
- 注3 吉岡博之・西岡成郎『京都府舞鶴市文化財報告文化財調査報告 第4集志高遺跡——昭和57年度カキ安地区の調査——』舞鶴市教育委員会 1983
- 注4 吉岡博之『京都府舞鶴市文化財調査報告 第7集志高遺跡——昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要——』1984
- 注5 岩松 保「志高遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985)
- 注6 調査に参加していただいた方は次の通りである。(敬称略・順不同)
- 作業員 山崎源治・野間確也・大島昭二郎・池田 力・小谷弥太郎・末松孝之助・真下幸江・水口和子・真下朝野・真下チセノ・梅原トシ江・河崎和子・真下重子・村上千里・真下トメ子・梅原文子・今西タキ・牧 鈴子・永野久枝・井上英子・碓 弥生・永野澄慧・森野石子・今西和子・今西ひさ江・永野千代野・瓜生初枝・真下志津江・今西アヤノ・増茂なみ子・多田よし子
- 調査補助員 谷口 太・中井 靖・岡本英一・藤原成人・山田 勝・卯野秀和・藤田靖子・楠原 薫・久保田有香・辻 寛子・中村みはる・田中史生・鈴木健彦・大和田淳司・真下徳也・栗田富士子・森本尚子・鈴木良章・倉本まり子・吉田野乃・岸岡貴英・三笠寧子・木村佳太・谷口 学・真下定平
- 整理員 畑(旧姓竹原)京子・水口ます美・野田千粧・高地久美子・多田由紀子・西川(旧姓竹ノ内)秀子・審百合子・井之本知美・布川依子・関本典子・島なをみ・赤司 紫・神山久子・西川悦子・丹新千晶
- 注7 御指導・御助言いただいた方は次の通りである。(敬称略・順不同)
- 堅田 直・石野博信・原口正三・和田晴吾・片岡 肇・中谷雅治・金村允人・奥村清一郎・岡田晃治・中村孝行・崎山正人・佐藤晃一・三浦 到・後藤公一・羽瀧賢良・中島陽太郎・杉本嘉美・平良泰久・樋口隆康・中沢圭二・亀井正道・安田章人
- 注8 土器文様を手がかりに時期比定を行うと次のようになる。1は羽島下層Ⅱ式、8～11は北白川下層Ⅱa式、2～4・7は北白川下層Ⅱb式、12～14・27は北白川下層Ⅱc式、40は北白川下層Ⅱ式、18～22は北白川下層Ⅲ式、15～17は大歳山式に含まれるものではないかと思われる。ここではあまりとりあげなかったが、羽島下層Ⅱ式・北白川下層Ⅰ式と思われる土器群については、三好博喜氏の論文がある。(『由良川下流域における縄文時代前期の土器群—舞鶴市志高遺跡採集土器を中心として—』)
- 時期比定は以下の文献を参考におこなった。
- 網谷克彦「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」(『鳥浜貝塚1980年度概報』福井県教育委員会) 1981
- 網谷克彦「北白川下層式土器」(『縄文文化の研究3 縄文土器1』雄山閣出版株式会社) 1982
- 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1』福井県教育委員会 1979
- 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊) 1935
- 中村善則「播磨大歳山遺跡Ⅰ」(『神戸市立博物館 研究紀要第3号』) 1986



2. 国道9号バイパス関係遺跡

昭和60年度発掘調査概要

はじめに

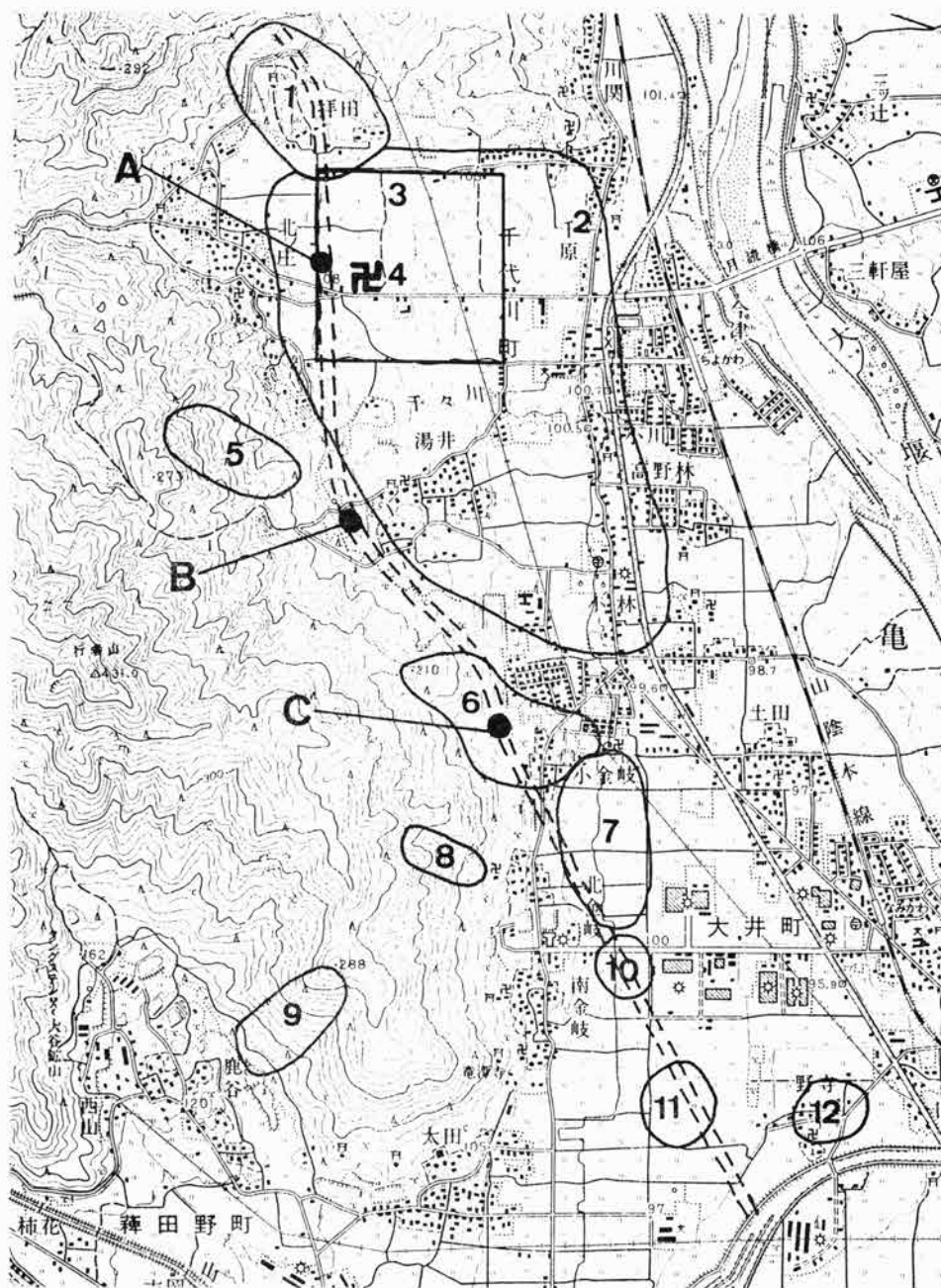
国道9号バイパス関係遺跡は、建設省近畿地方建設局の依頼による国道9号バイパス建設に伴う事前調査を行う遺跡の総称である。

調査は、昭和50年度から継続的に実施し、善願寺遺跡・曾我谷遺跡(園部町)、拜田古墳群・千代川遺跡・小金岐古墳群・北金岐遺跡・太田遺跡・条里遺構・篠窯跡群(亀岡市)など、弥生時代前期の集落跡や古墳時代の群集墳・平安時代の生産遺跡などの口丹波地域における主要な遺跡を帯状に検出している。既に調査を実施した遺跡については、京都府教育委員会・当調査研究センターの刊行している発掘調査概要に報告しているので参照されたい。

さて、今年度発掘調査を実施した遺跡は、千代川遺跡・小金岐古墳群・湯井地区所在古墳状隆起の3遺跡である。千代川遺跡(第20図A)は、弥生時代から中世にわたる集落跡として、千代川町一帯に広がる遺跡である。今回の調査は、昭和59年度に府道千代川・北ノ庄停車場線以北の試掘調査を実施した際、加工木や緑釉陶器・墨書土器等丹波国府跡に関連するとみられる遺物が多量に出土したことから全面的な発掘調査が必要となり、今年度から継続的に実施することになった。小金岐古墳群(第20図C)は、行者山の中腹から山裾にかけて約80基の古墳が群集し、バイパス予定路線内に含まれる12基の古墳を既に調査しているが、今年度は小金岐4号墳の調査を実施した。湯井地区所在古墳状隆起(第20図B)は、バイパス工事時に伐採・下草刈りを行ったところ地形の起伏が明確となり、古墳状の隆起が3か所において認められたことから、建設省京都国道工事事務所と再三にわたる協議を行い、当初計画を変更し新たに試掘・発掘調査を実施することになった。

現地調査は、昭和60年6月14日から小金岐4号墳の調査、同年8月28日から千代川遺跡、昭和61年1月21日から湯井地区古墳状隆起の調査を実施し、後述する調査成果を得て昭和61年2月21日にすべての現地調査を終了した。発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員引原茂治・森下 衛・西岸秀文が担当して行った。補助員、整理員、作業員として調査に参加していただいた方には心から感謝する次第である。
(注1)
る。なお、本書の作成にあたっては、各担当者が分担して執筆したが、文末に名を記し、文責を明らかにした。

(水谷寿克)



第20図 調査地位置図 (1/25,000)

- A. 千代川遺跡第10次調査地 B. 湯井地区古墳状隆起調査地 C. 小金岐4号墳調査地
 1. 拝田古墳群 2. 千代川遺跡 3. 丹波国府推定域 4. 桑寺廃寺跡 5. 北の庄古墳群
 6. 小金岐古墳群 7. 北金岐遺跡 8. 北金岐古墳群 9. 鹿谷古墳群 10. 南金岐遺跡
 11. 太田遺跡 12. 野寺跡(破線はバイパス予定路線)

(1) 小金岐4号墳

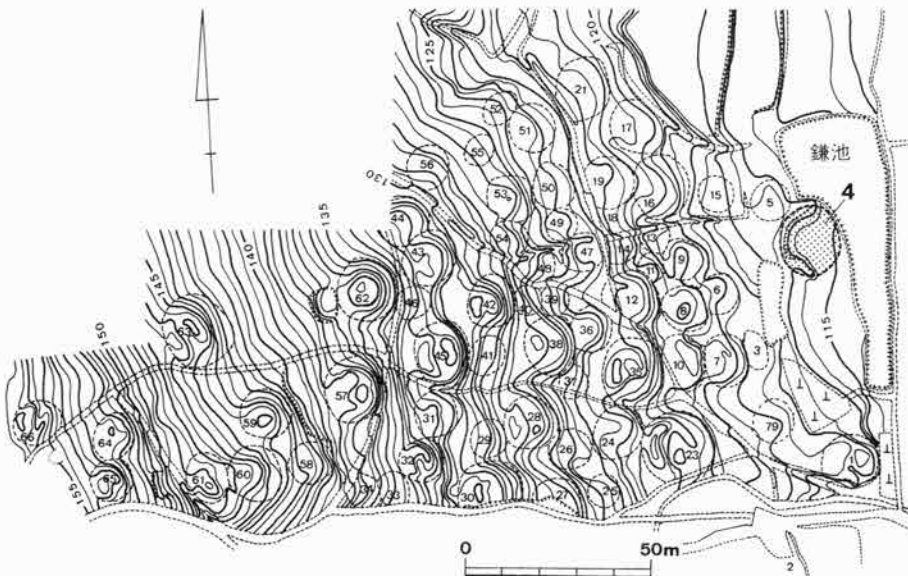
1. はじめに

小金岐古墳群(第20図C)は、亀岡盆地北西側の行者山東麓にある。行者山からの土砂の流出によって形成された緩傾斜地に、現在まで確認されている限りでは、79基の古墳が密集している。昭和50・51年度には5・6・8・9・15・17・22・70・71・73・76号墳が発掘調査された^(注2)。昭和59年度には、1・3・7号墳が調査され、79号墳が確認されている^(注3)。このような調査によって、これらの古墳は、6世紀後半から7世紀前半頃にかけて築造されたものとされている。また、ほとんどの古墳が、横穴式石室を内部主体とするものである。

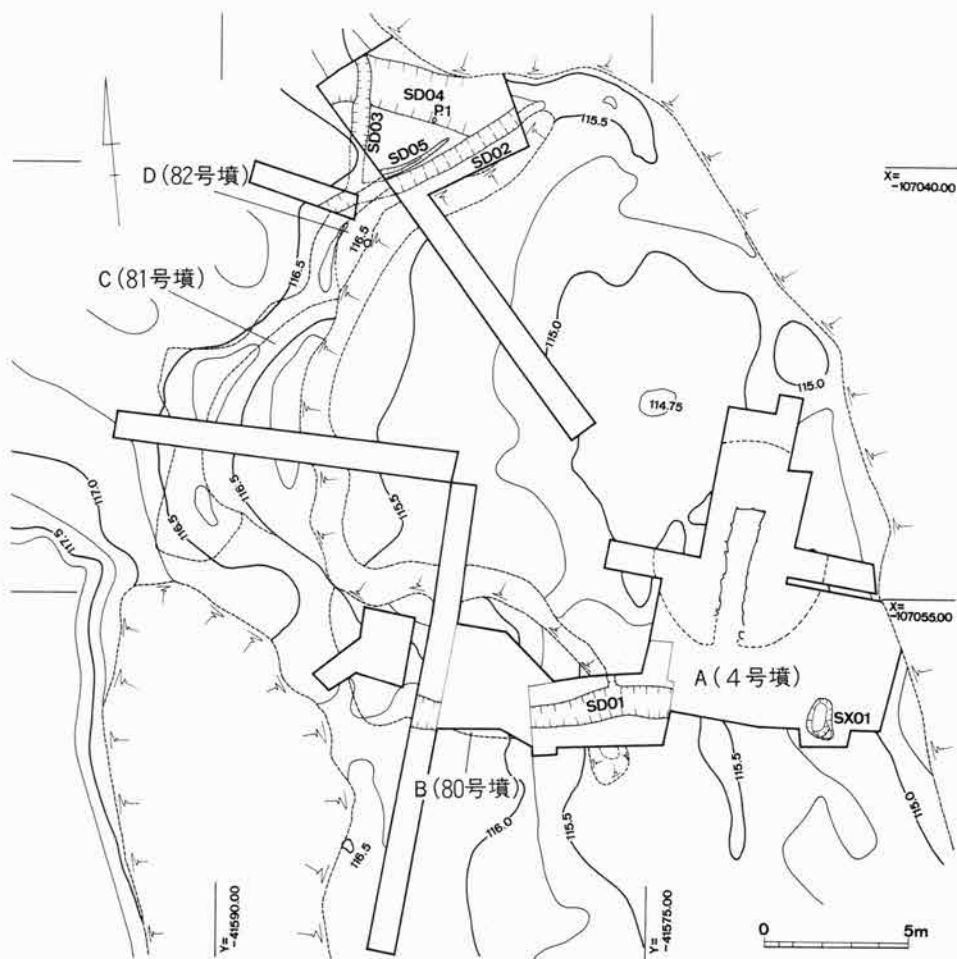
これまで調査が行われた古墳のうち、特色のあるものとして、1号墳は、墳丘・石室ともに他の古墳より規模が大きい。玄室内に棺障状遺構をもち、羨道部床下には石組みの排水溝を備える。76号墳は、玄室奥壁部に石棚をもつ。

2. 調査概要

小金岐4号墳は、古墳群の東端に位置する。調査は、昭和60年6月14日から開始した。地鎮祭を行った後、草刈りおよび伐採木の整理を行い、並行して地形測量を始めた。4号墳は、後世の土採りによって全壊状態であり、クレーター状を呈していた。なお、当初は1基の古墳とされていたが、地表観察や地形測量によって、墳丘の残痕と考えられる隆起



第21図 小金岐古墳群分布図(部分)



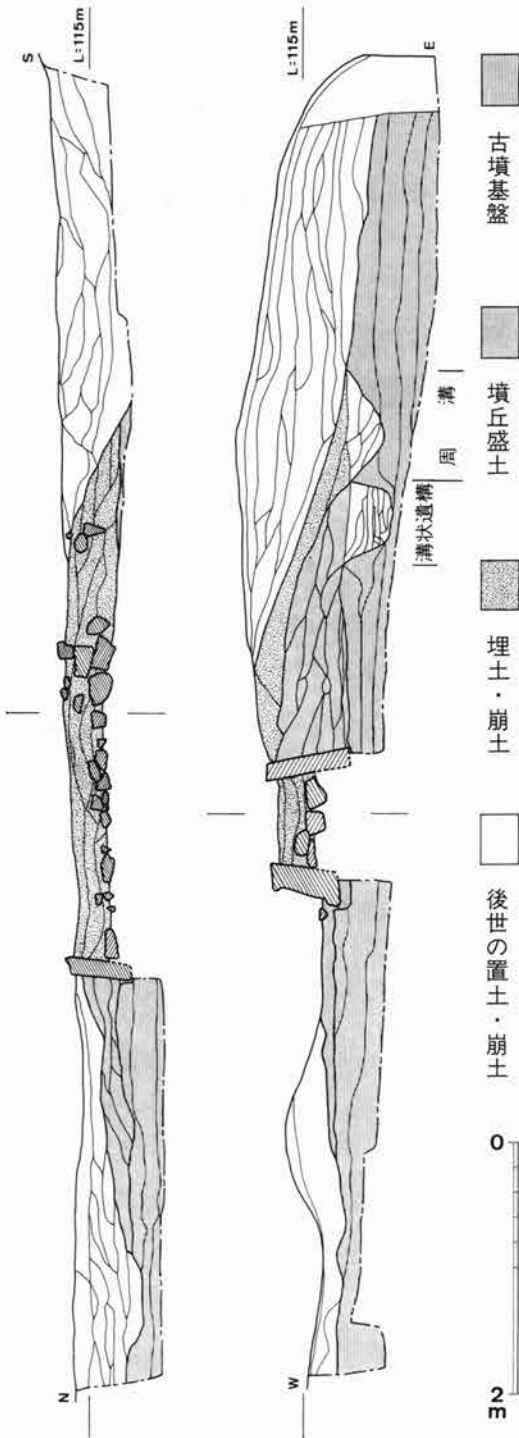
第22図 調査地地形図

部3か所と、石室の一部とみられる石列1か所を確認した。そこで、石列付近をA、隆起部をB・C・Dとし、それぞれにトレンチを設定して調査した。

その結果、Aからは、小規模な横穴式石室を検出した。石室の埋土には、弥生土器もしくは土師器とみられる土器片や土錘が少量含まれていたが、石室床面からはまったく遺物が出土しなかった。墳丘は、ほとんど削平されていたが、断面観察により、東側で周溝状の落ち込みを確認した。

B・C・Dからは、墳丘盛土状の層序を確認した。周辺から須恵器片が出土したが、埋葬主体部については、土採りなどで破壊され残存していなかった。

8月9日に機材撤去などを終わり、現地調査を完了した。また、8月29日に現地で説明会を実施した。



第23図 4号墳断面図

なお、Aは横穴式石室をもつ古墳であり、B・C・Dも古墳である可能性が高いので、Aを従来どおり4号墳とし、それ以外は、昨年確認された79号墳に続けて、Bを80号墳、Cを81号墳、Dを82号墳とする。

3. 検出遺構

(1) 4号墳

a. 墳丘(第23図)

4号墳は、調査地の東側に位置する。調査前には石室の一部が露呈しており、墳丘については、ほとんど削平された状況であった。したがって、調査前には、墳丘規模や形状は全く不明の状態であった。

層序の断面観察によると、墳丘の基盤となる層は、黒色土層である。この黒色土層上面を、西から東に向かってわずかに傾斜する平坦地に造成し、この平坦地に、石室プランに沿って、西側で約10cm、北側・東側ではわずかに掘り込んで、石室掘形を設けている。なお、東半部から、墳丘築造以前のものと思われる溝状遺構を確認している。幅約65cm・深さ約35cmで、断面は逆台形状を呈する。埋土は、黒色土と茶色砂質土の互層である。

墳丘盛土は、黒色土および黒茶色土である。東半部に比較的良好に残っている。周溝は、削平の著しい西半

部では確認できなかった。東半部で確認したところによると、幅約90cm・深さ約35cmで、断面は鈍いV字状を呈する。埋土は黒色土である。北側でも墳丘基盤層がくぼむ箇所を確認しているが、周溝と断定するには至らない。石室の羨門部東側には、列石の一部とみられる石が弧を描くように並ぶ。

周溝・列石・墳丘盛土の状況から、4号墳は、南北約7m・東西約6mの、楕円形状の円墳であったと推定できる。

b. 石室(第24・25図)

4号墳の内部主体は、横穴式石室で、主軸をN-17°15'15"-Eにとり、ほぼ南南西方向に開口する。石室の使用石材は、付近から産出する花崗岩である。後世の削平などによって大半の石材が失われたものとみられ、最下段の石材のみが残存している。石材は小さく、奥壁部にも、鏡石となるような大きな石材は使用されていない。

石室は、いわゆる無袖式である。石室の全長は4.4m、幅は、奥壁部で1m・開口部付近で0.8mである。

石室床面には、奥壁部から開口部に向って約2.4mの部分に敷石があり、この部分が玄室部にあたるものとみられ、敷石のない部分が羨道部にあると推定される。敷石の石材は、人頭大から拳大の風化した花崗岩であり、板石状のものではない。なお、敷石は、奥壁部から約1.4mの箇所までは密に敷かれているが、それ以南は、やや雑である。この敷石の敷き方の違いが何を意味するかについては、不明である。

この石室には、敷石がとぎれる箇所と、推定羨道部中央付近の2か所に、閉塞石状の石積みがある。排水溝などの施設はない。また、石室床面からは、遺物が出土しなかった。

(2) その他の古墳(第22図)

a. 80号墳

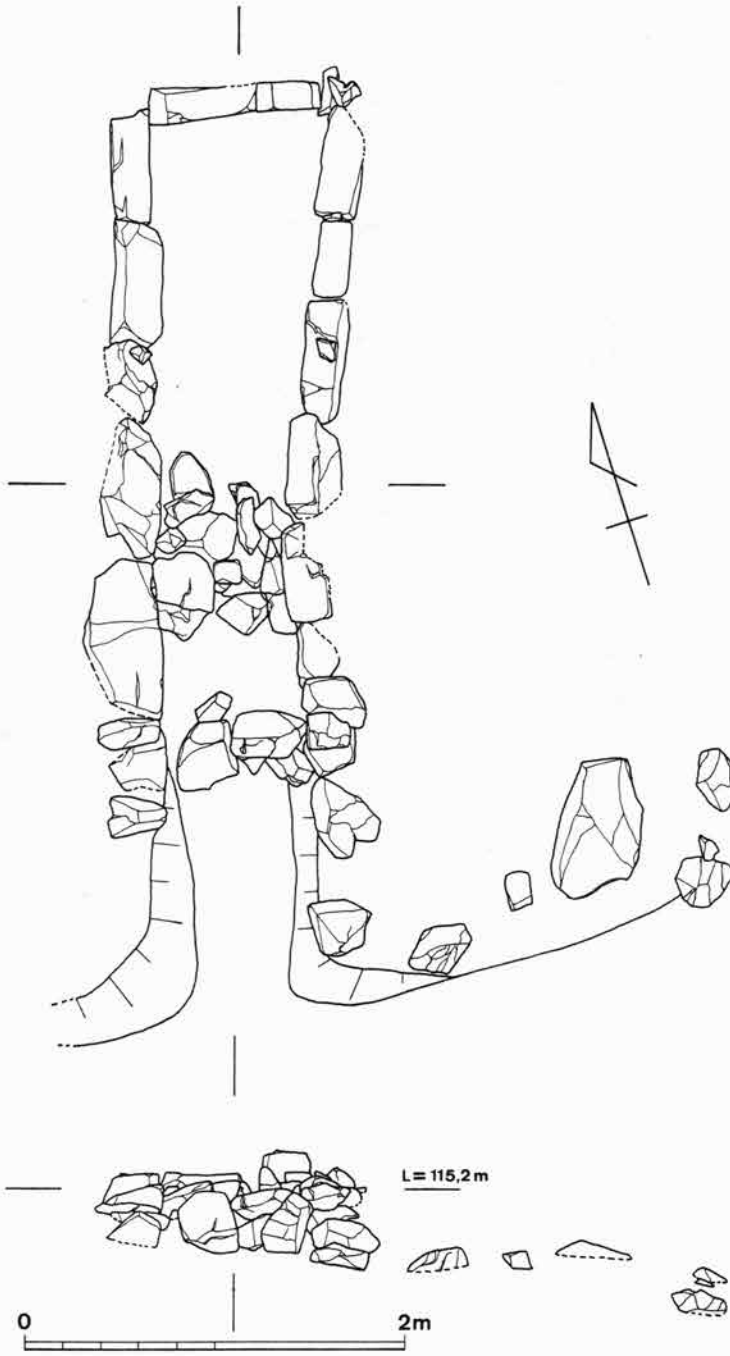
調査地の南側に位置し、墳丘の約半分を削平されている状況であった。また、残存している部分にも、近世墓の墓壇が密集して掘削されており、埋葬主体部については、その痕跡の確認も困難であった。

付近から、須恵器杯身(第26図-3)や台付長頸壺(第26図-1)が出土しており、部分的に墳丘盛土状の層序が確認できた。

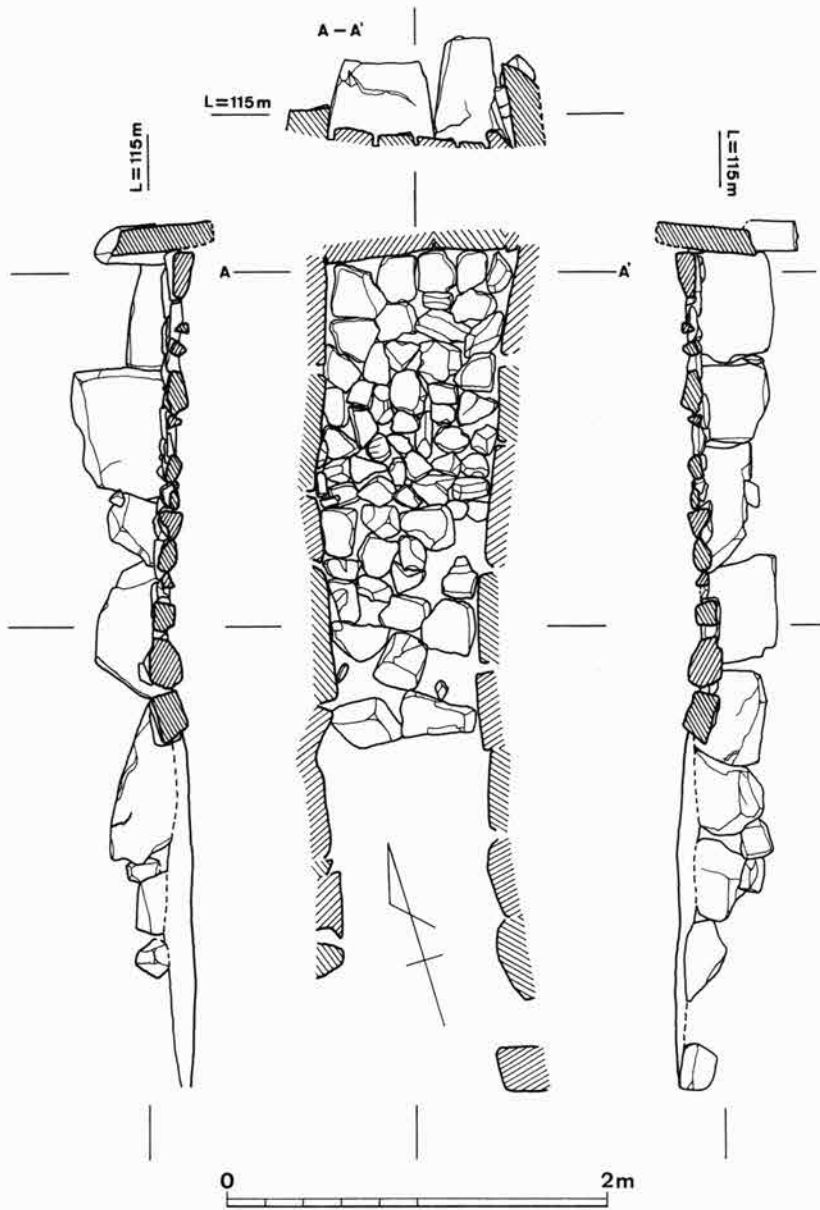
b. 81号墳

調査地の西側に位置し、墳丘のほぼ2/3を削平されている状況であった。埋葬主体部は、後世の土採りによって完全に破壊された状況であった。残存している部分にも近世墓の墓壇が掘削されている。

付近から、須恵器杯蓋(第26図-2)が出土し、墳丘盛土状の層序を確認した。



第24図 4号墳石室実測図(1)



第25図 4号墳石室実測図(2)

c. 82号墳

調査地の北側に位置し、墳丘の北側裾部のみが残存している状況であった。古墳であることを推定させるような出土遺物はなかったが、層序観察により、墳丘盛土の裾部とみられる黒色土層を確認した。

4. その他の遺構(第22図)

a. 溝状遺構SD01

80号墳の南側で検出した。幅約1m・深さ約30cmで、断面は鈍いV字状を呈する。西から東に向って直線的にのびており、80号墳の周溝にはなり得ない。埋土上面から須恵器長頸壺(第26図-1)が出土したが、これは80号墳に伴う遺物とみられる。明確にSD01に伴うとみられる出土遺物はない。層序観察によると、80号墳の墳丘築造以前のものとみられる。

b. 溝状遺構SD02

82号墳の北西側で検出した。幅約80cm・深さ約50cmで、断面は逆台形状を呈する。南西から北東方向に直線的にのびており、82号墳の周溝とはなり得ない。明確にSD02に伴う遺物はないが、弥生土器・古式土師器とみられる土器片少量が、埋土に含まれていた。層序観察によると、82号墳の墳丘築造以前のものとみられる。

c. 溝状遺構SD03

北方向に直線的にのびる。規模・形状ともにSD02とほぼ同様であり、SD02から分岐するものとみられる。

d. 溝状遺構SD04

西から東に向ってのびる。幅約2m・深さ約20cmの浅い溝状遺構である。明確にSD04に伴う出土遺物はない。層序観察によると、SD02・SD03よりも新しいものとみられる。

e. 溝状遺構SD05

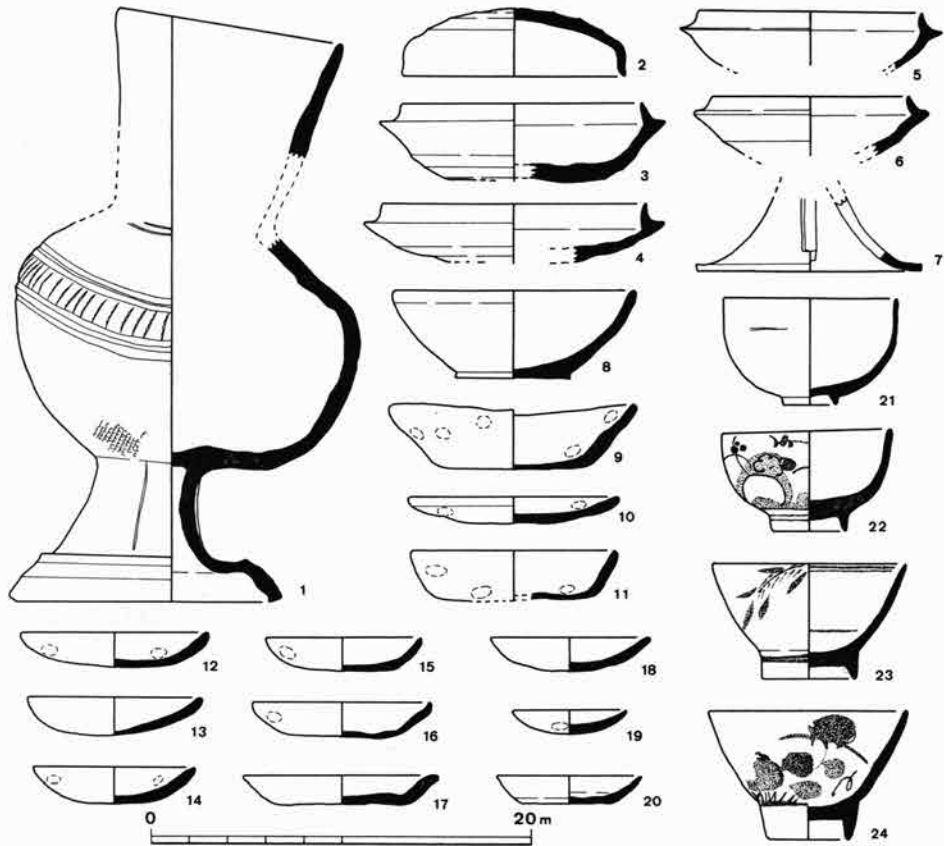
幅約15cm・深さ約5cmの2条の溝が重なっており、弧状にのびる。このSD05の北西側にピット(P.1)があり、あるいは住居跡の周壁溝かと思われる。層序観察によると、SD02よりも古い。

f. 近世墓SX01

4号墳の南東側で検出した。上面には30cm～40cm大の石を方形に敷いている。敷石下には、長方形の土壇があり、土壇内にも、上面の敷石とはほぼ同じ大きさの石が落ち込んでいる。当初の敷石が陥没した後、再度石を敷いたものであろうか。土壇内からは遺物が出土しなかったが、敷石上から出土した土師器皿から、江戸時代前期頃の墓とみられる。

5. 出土遺物(第26図)

今回の調査では、4号墳の石室内からは遺物が出土せず、その他の古墳も埋葬主体部が残存していないので、古墳に関係する出土遺物は少ない。調査地一帯には近世墓が密集しており、それに供献されたとみられる土師器皿が多数出土した。また、近世墓に副葬され



第26図 出土遺物実測図

たとみられるキセル・小柄・冥銭なども出土した。冥銭は、寛永通寶が主であり、ほかに
 洪武通寶などが含まれる。また、4号墳墳丘盛土中から、石鏃1点が出土した。

須恵器台付長頸壺(1)は、体部下半に叩きの痕跡をのこす。脚部には、四方に、ヘラに
 による透し状の沈線をもつ。須恵器杯蓋(2)は、天井部から口縁部が屈曲して内湾気味に降
 り、口縁端部は外反気味である。須恵器杯身(3)は、底部が平坦であり、器胎は厚手であ
 る。須恵器杯身(4)は、器高の低いものとみられる。須恵器杯身(5・6)は、口径が小さく
 なるものとみられる。須恵器高杯脚部(7)は、四方に長方形の透しをもつものであろう。
 須恵器碗(8)は、糸切り高台をもつもので、10世紀頃のものであろう。

土師器皿(9~20)や陶磁器(21~24)は、表土や近世墓の墓壇埋土から出土した。土師器
 皿のほとんどは、灯明皿として使用されたものとみられる。土師器皿(20)は、底部糸切り
 である。土師器皿は、いずれも江戸時代のもものとみられる。陶器碗(21)は、錆絵が描かれ
 ていたものとみられる。京焼風であるが、肥前などで焼成された京焼風陶器であるかもし

れない。17世紀後半以降のものとみられる。染付磁器碗(22)は、いわゆる「くらわんか手」であり、伊万里系のものである。17世紀後半頃のものともみられる。染付磁器碗(23・24)は、「広東茶碗」とよばれるもので、伊万里系のものである。19世紀頃のものであろう。

6. ま と め

今回の調査は、全壊状態に近い古墳の調査であり、攪乱部分も多く、結果としては、断片的な調査であった。以下、調査結果の概略を列記して小結としたい。

80・81号墳に伴うとみられる須恵器は、陶邑編年のⅡ形式4もしくは5段階に並行するものとみられ、6世紀末もしくは7世紀初頭頃のものであろう。この時期は、小金岐古墳群の古墳築造の最盛期とされており、80・81号墳も、この時期に築造されたものであろう。

4号墳は、これまで調査された小金岐古墳群の古墳の石室のうちでは、最も小規模な無袖の横穴式石室を内部主体とする古墳である。この4号墳の石室の特色は、床面の敷石にある。小金岐古墳群では、比較的規模の大きい1・17・71号墳などの石室床面に敷石がみられ、小規模な6・9号墳などの石室には敷石がない。また、1・17・71号墳などの敷石には板石が使用されているが、4号墳では、いわゆる風化礫を使用している。このように、4号墳の石室には、他の古墳の石室とは異なる要素が見いだせる。

4号墳の築造時期については、出土遺物がなく、明らかでない。石室の形状・規模からみると、京都市旭山古墳群^(注5)などに類似するものがみられる。旭山古墳群は、7世紀前半から中葉にかけての築造とみられ、「推古朝の身分秩序に包摂された個人の墓域として営まれたもの^(注6)」とされる。4号墳の石室規模から、追葬は不可能とみられ、単次葬であった可能性が高い。以上のようなこと、および、無袖の小規模な横穴式石室をもつ小金岐6号墳が7世紀前半の築造とされていることなどから、4号墳の築造時期は7世紀前半から中葉頃とみられる。なお、旭山古墳群では、墳形が、当時優位であった方墳であるが、4号墳は円墳である。このことが、「推古朝の身分秩序」のなかでの4号墳の被葬者の地位を示しているものか否かについては、今後の検討課題としたい。

このように、4号墳は、小金岐古墳群のなかでも、最も築造時期の新しいものの一つとみられ、小金岐古墳群の終焉を示すものとも考えられる。不確定な要素は多いが、口丹波地域の古墳のなかでも、特色のある古墳であり、この地域の古墳を考える上で、重要な古墳の一つといえよう。

(引原茂治)

(2) 千代川遺跡第10次

1. はじめに

千代川遺跡は(第20図A), 亀岡市千代川町に所在する, 弥生時代から中世の長期にわたる複合遺跡である。その範囲は行者山(標高431m)の北東麓に形成された扇状地のほぼ全域に及び, そこには丹波国府推定地や桑寺廃寺をも取り込んでいる。^(注7)

国道9号バイパス予定路線は, この千代川遺跡を南北に縦断すると同時に, その北半部では国府推定地の西辺部上を通過する(第27図)。既に, 本遺跡南半部の予定路線内では同遺跡第2・5次調査の2度にわたって発掘調査を実施し, 弥生時代から中世に及ぶ多くの遺構・遺物が検出されている。^(注8) 残る北半部についても, 予定路線が国府推定域の一画に相当することから多くの遺構・遺物の存在が予想され, 昭和60年度に試掘調査(第9次調査)を実施した。その結果, やはり奈良・平安時代を中心として, 弥生時代後期～中世(鎌倉時代)に及ぶ数多くの遺構・遺物を検出した。^(注9) 以上の経過から, 試掘調査の成果を踏まえつつ, 本年度以降に改めて本格的な発掘調査を進めることとなった。



第27図 地区割り及び調査地位置図

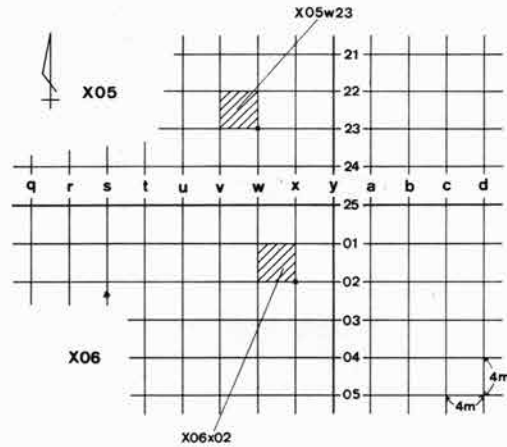
2. 調査概要

今年度の調査は、まず府道(北ノ庄・千代川停車場線)とバイパス予定路線との交点から北へ約100mを対象として実施した(第27図)。対象地内に4か所のトレンチ(第29図1～4トレンチ)を入れ(約1800m²)、昭和60年8月25日から昭和61年1月14日の間に行った。

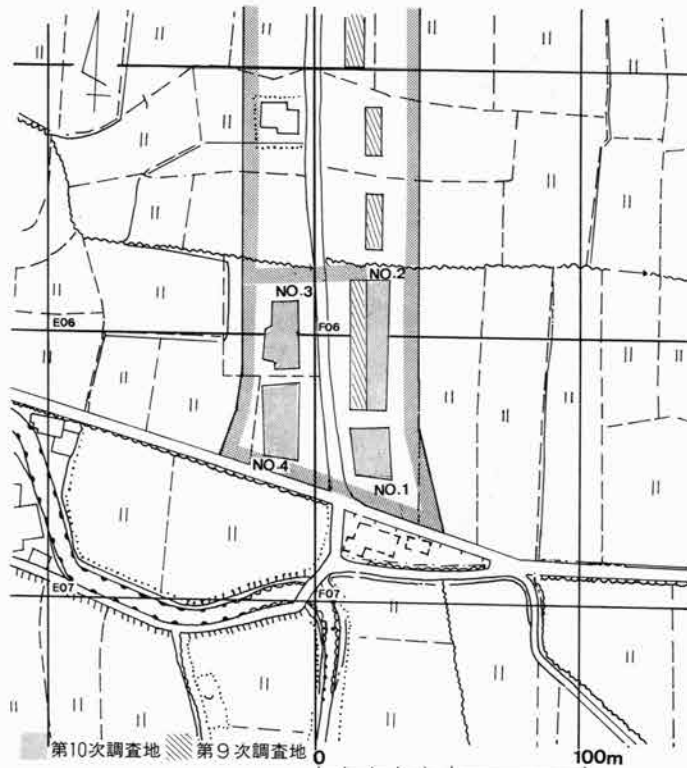
(1) 地区割り

過去、千代川遺跡で実施された発掘調査では各調査毎に異なった地区割りを設定しており、各々の調査成果を同一の地図上にまとめて記入するには非常に困難を伴った。そこで今回の調査では、およそ千代川遺跡全体を包括する範囲での地区割りを作成し、今後継続して実施する調査

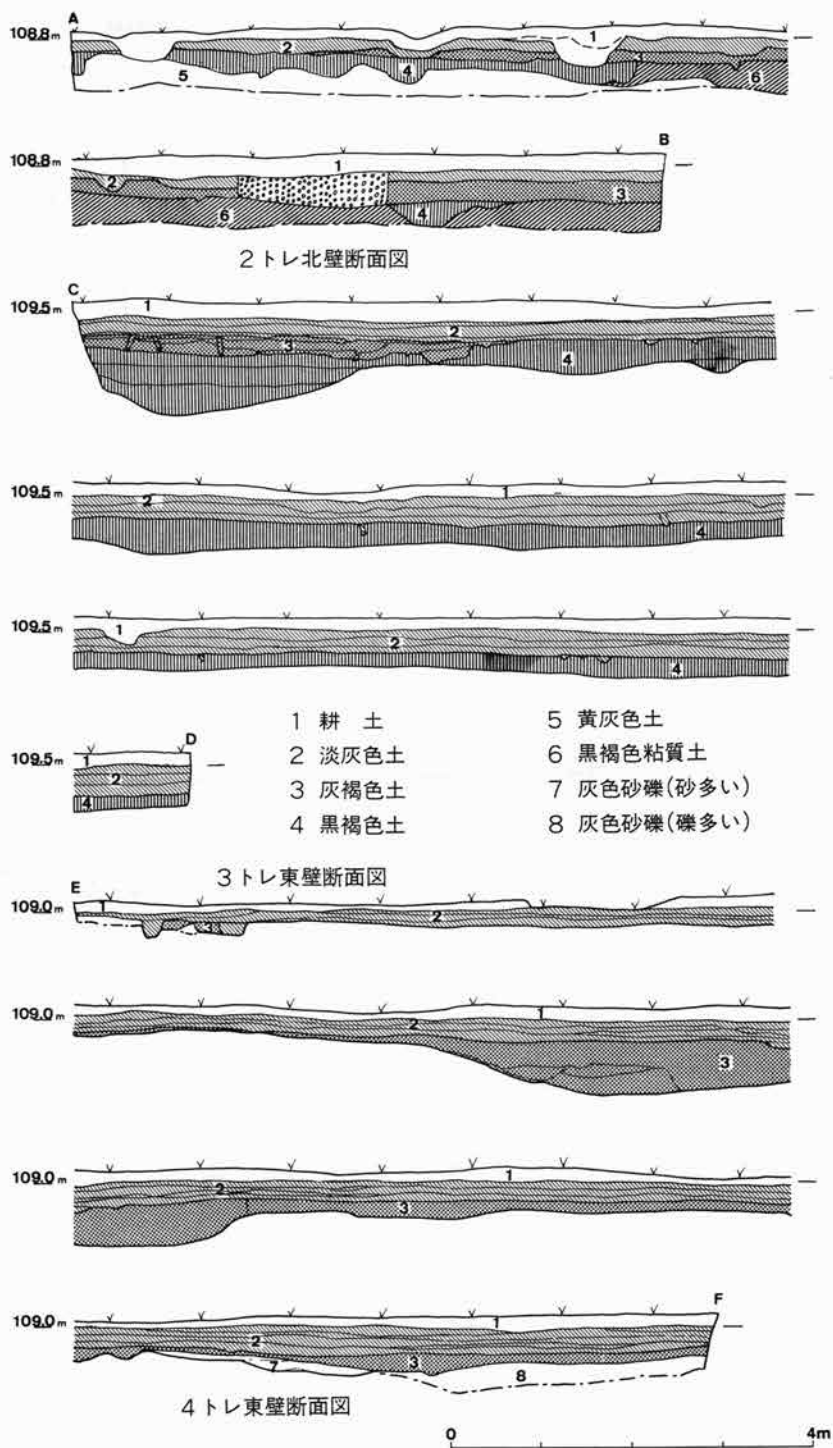
に備えた。その内容は、国土座標を利用して100m毎に大地区を設け、その中を4m毎の小地区に区切ったものである(第27図)。呼称法は、大地区の東西をアルファベット(大文字)・南北を数字で、小地区の東西をアルファベット(小文字)・南北を数字で表現した。また、各地区名はその東南隅の杭名(註10)で示すこととした(第28図)。



第28図 地区割り図



第29図 トレンチ配置図



第30図 調査地土層断面図
 (図中のA~Fは第12図のA~Fに一致する)

(2) 層 序

調査区の層序は、基本的に耕作土・淡灰色土(3層に細分しうる)・灰褐色土・黒褐色土・黄灰色土の順に堆積していた。淡灰色土は近世以降の耕作土と考えられ、灰褐色土は中世の遺物包含層、黒褐色土は弥生時代から平安時代の遺物包含層、黄灰色土は地山である。しかし、各トレンチでは土地利用が異なっていたためか、著しく削平をうけている部分やそうでない部分があり、一様にすべての土層が確認できるわけではなかった(第30図)。そのため、以下に報告する遺構は最終的に黄灰色土上面で検出したものである。

なお、1・4トレンチ南半部の黄灰色土上(遺構検出面直上)には5~10cmの厚さで灰色砂礫層の堆積が認められた。これは、当該地が幾度となく被った千々川の氾濫による堆積物であろうと考えられた。^(注11)

3. 検 出 遺 構(第31図)

検出遺構には、堅穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土壇などがある。また時期的には弥生時代から中世(鎌倉時代)にわたるものである。以下、弥生・古墳・奈良~平安・鎌倉~室町時代の時代順に主なものを概述する。なお各遺構の呼称番号は、遺構の略号と5ケタの数字で表現したが、今後継続して行う調査において検出される遺構との混乱を避けるため、上2ケタは本調査次数を示し(10次)、下3ケタが遺構の番号を示している。

弥生時代 この時期の遺構には、堅穴式住居跡(SH10099)・溝(SD10050, SD10046, SD10035, SD10079)などがある。また、出土遺物がほとんど無いため時期の比定材料を欠くが、埋土の状況などからほぼこの時期と判断したものに土壇や掘立柱建物跡(SH10163)がある。

SH10099は、南北約5.0m・東西約4.7mの隅丸方形を呈し、深さ約20~30cmが遺存する。床面には四周に壁溝が巡り、南東壁から中央部にかけて特殊な形態の区画を有する(図版第3)。SD10050は、SH10099の北方約15mにあり、幅4m以上・深さ約1.2mを測る。SD10046は、2トレンチの北端付近で検出した。幅約0.8m・深さ約0.3mを測り、断面はU字形をなす。弥生土器がまとまって出土し、なかには朱の痕跡を認めるもの(第32図2)などがあつた。SD10035は、SD10046の南側で検出した。遺存状況は極めて悪く幅約0.6m・深さ約0.2mを測る。

このほか数多くの土壇を検出した。出土遺物はほとんど無く、規模・形態も様々であるが、大まかに、平面形が円形に近く壁が垂直に立つもの(SK10045, SK10080, SK10087, SK10106など)、平面長楕円で壁は斜めに上がるもの(SK10043, SK10051, SK10053, SK10059, SK10101, SK10104)の2者に分けられるようである。また、SB10163は1間(約

2.4×2.4m)四方の掘立柱建物跡である。

古墳時代 この時期の遺構は、4トレンチで溝(SD10147)を検出したにすぎない。

SD10147は、SD10149に切られているが、北西から南東へ蛇行して流れる一部分を検出したものである。幅約2m・深さ約0.3mを測り、断面は浅いU字形をなす。埋土は灰色砂礫で、6世紀初頭～7世紀前半の遺物が出土した。

奈良～平安時代 1・4トレンチで掘立柱建物跡(SB10169, SB10170)・溝(SD10015, SD10016, SD10149)などを検出した。

SB10169は、東西2間(4.1m)×南北4間(8.3m)の規模を有する。また、SB10170は、南北3間(5.6m)×東西1間(1.4m)以上の規模を有する。SA10172は3間分(6.6m)を確認したものである。

SD10149は、4トレンチを北西から南東へ横切るもので、幅約4m・深さ約0.3mを測る。SD10016は、1トレンチを西から東へ横切るもので、幅約1.5m・深さ約0.2mを測る。両者は、いずれも暗灰色砂礫を埋土とし、8世紀～10世紀の遺物が出土した。SD10015は、1トレンチを北西から南東へ流れるもので、幅約1.5m・深さ約0.7mを測る。断面はU字形をなし、埋土は灰色砂及び暗灰色砂である。

掘立柱建物跡の主軸は、いずれも真北から西へ3～10°前後振っている。また溝も旧地形に沿って流れているようで、いずれも北西～南東方向へ延びる。この時期の遺構は、国府跡との関連で非常に注目されたが、以上のようにそれらの示す方向・配置などにはなんら企画性を認め得ず、まとまりを把握することはできなかった。特にその主軸の方向は、SB10170が、現在の水田の畦畔の示す条里制遺構とはほぼ同一の方向をなす以外、一致するものは認められなかった。また、柱穴・溝の埋土からは8～9世紀頃を中心とする遺物が出土したが、いずれも細片となったものが多く各々の前後関係などは充分検討できていない。

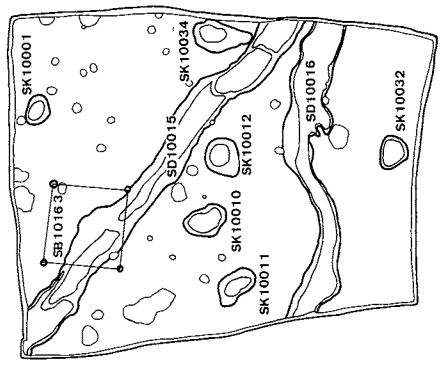
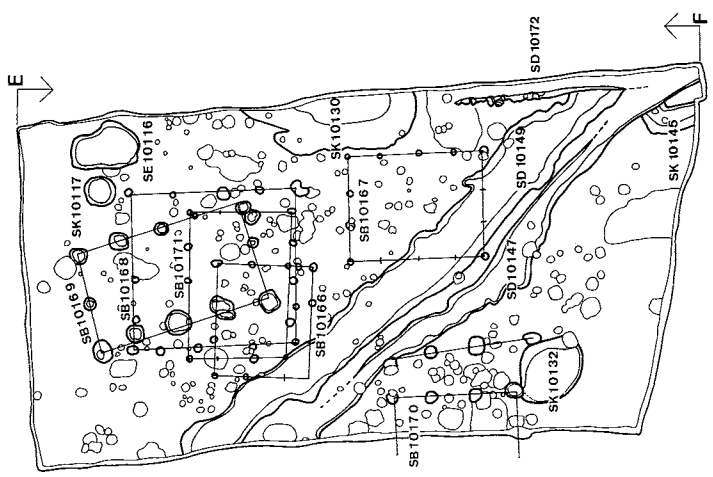
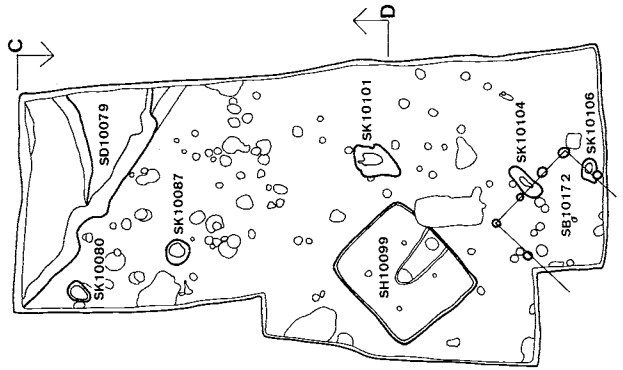
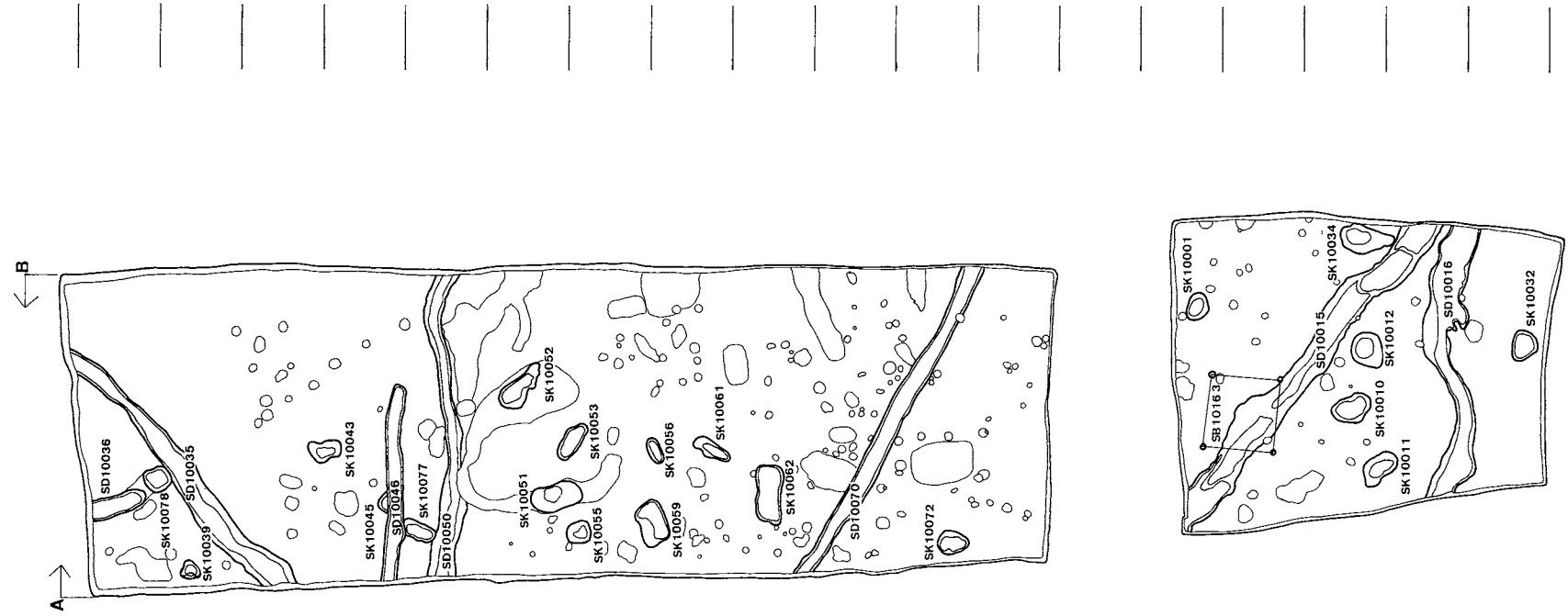
SD10149・SD10016の埋土は古墳時代後期のSD10147と同じ砂礫層で、ともに洪水で埋没した感を受ける。土層の項でも触れたように、1・4トレンチ南半部で遺構検出面の直上に認められる灰色砂礫層の堆積はこのことを示唆していると言え、少なくとも古墳時代後期・平安時代(おそらく10世紀頃)の二度にわたって千々川の氾濫を被ったと推察された。

鎌倉～室町時代 4トレンチを中心に、掘立柱建物跡(SB10166～SB10168, SB10171)・溝(SD10173)・土壇(SK10117, SK10130, SK10132)・井戸(SE10116)を検出した。

SB10168は、東西4間(6.9m)×南北4間(7.4m)の規模を有す大型の掘立柱建物跡で、北西隅及び南東隅の柱穴には根石が認められた。また、SB10167は東西3間(4.9m)×南北4間(6.1m)・SB10166は東西3間(5.1m)×南北3間(4.4m)・SB10171は東西4間(6.6m)×南北3間(4.6m)の規模をそれぞれ有している。いずれも柱穴は小型で、直径約15～

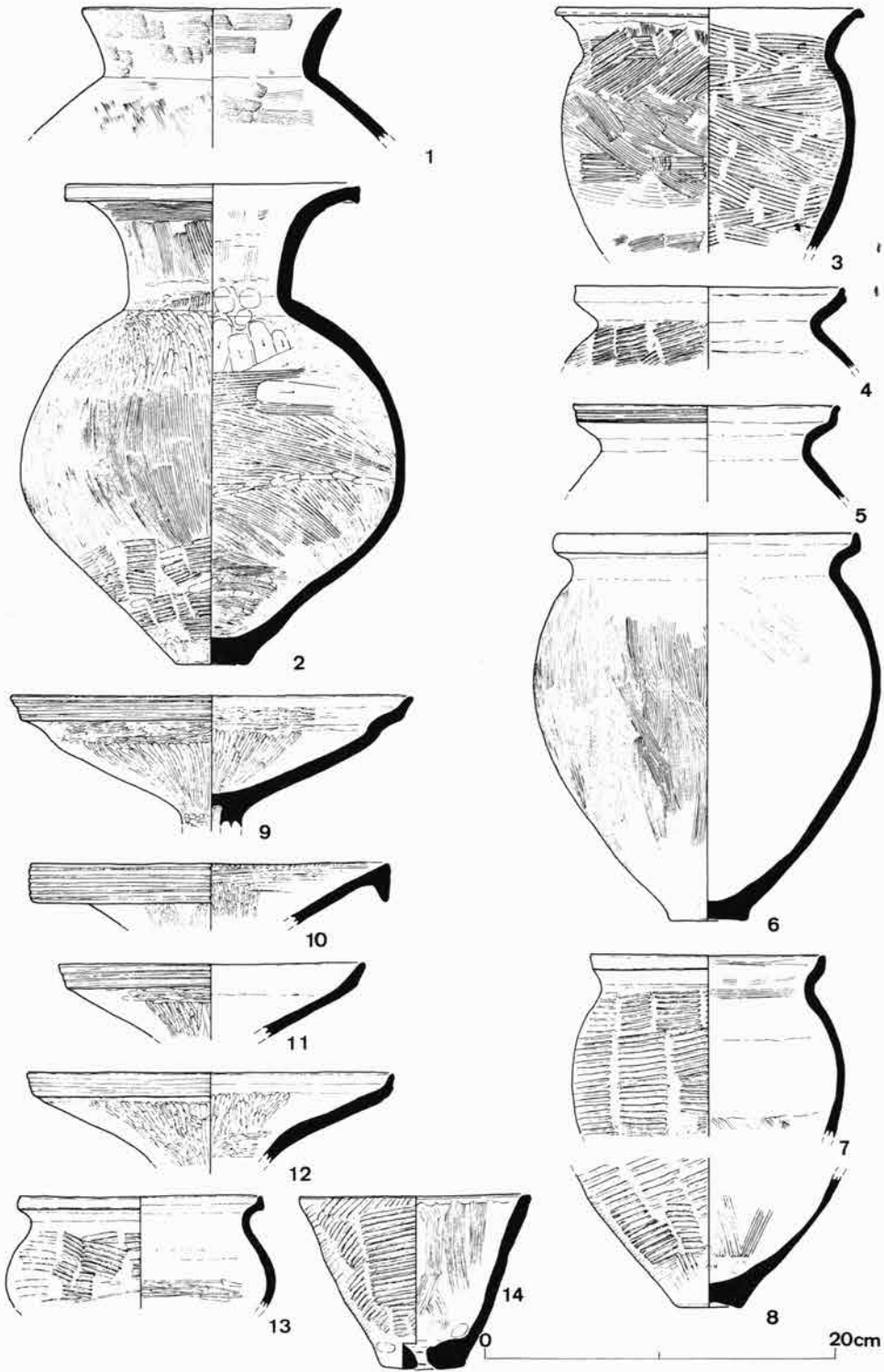
t u v w x y a b c d e f g h

20
21
22
23
24
25
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13



0 10 20m

第31图 遺構平面図



第32図 出土遺物実測図(1)

20cm・深さ約10cm前後を測る。

SD10173は、幅約0.5m・深さ約0.2mを測り、上方は既に削平を受けていたが、石組みを有していたようで、検出部西側でその最下段を構成していたと考えられる石列を確認した。SK10130は、一部を検出したにとどまる。径3m以上の円形に近い平面形を呈すと考えられ、その底部には人頭大の石材が堆積していた。井戸が破壊された痕跡と理解される。SK10132は、2.5m四方の方形に近い平面形を呈す。

SE10116は、石組みの井戸跡である。人頭大及びやや小さめの石材を直径約1.2mの円形に積み上げたもので、深さ約1.3mを測る。北側に幅約1m、深さ約0.7mの方形の張り出し部を有す。

これらは中世集落の一面を検出したものと考えられるが、そのごく一部に過ぎないようで、建物のまとまり・配置等は充分把握できていない。ただ、建物跡は幾つかの重複が認められ、出土遺物から確認される13世紀後半を中心とする時期に、幾度かの立て替えが行われつつ集落が営まれていたことが推察された。なお、それぞれの建物跡の主軸は、条里制遺構とされる周囲の水田の畦畔とほぼ同一方向を示している。

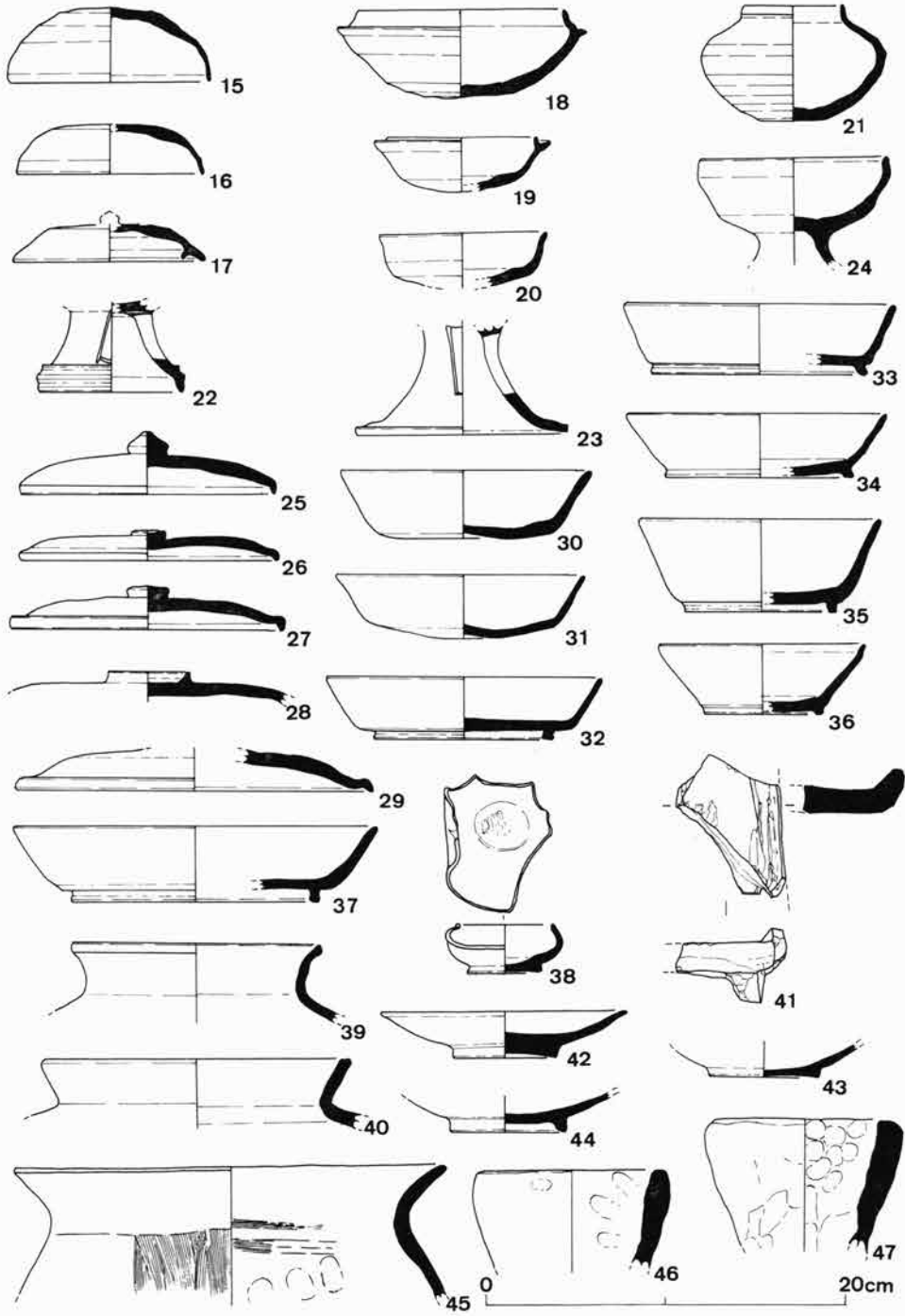
4. 出土遺物(第32～34図)

今回の調査では、整理箱に約60箱の遺物が出土した。その内訳は、弥生時代後期の土器及び石器類が整理箱約10箱、古墳時代後期の須恵器・土師器が約5箱、奈良～平安時代の須恵器・土師器類が約35箱、中世の土師器・瓦器・陶磁器などが約10箱である。またこの他に、今回図示していないが、縄文時代後期と考えられる土器片が4点、弥生時代前期の土器片が1点認められた。遺物の多くは現在整理途中のため、ここでは図化しえたものを中心にその概略を記す。

弥生時代 SH10099・SD10035出土遺物の一部を図示した(第32図)。

いずれも弥生時代後期後葉に属するものである。(1)は、短く直立する口縁部を有す壺口縁部片で、内外面とも刷毛目調整する。(2)は広口壺で、ハの字状に広がる口縁部を有す。口縁部内外面とも刷毛目調整し、体部内面は刷毛目、外面は上半にヘラ磨きの後刷毛目、中位にタタキの後刷毛目、下半に叩きを施す。

(3～8)は甕。(3)は、くの字状に折れ曲がる口縁部を有す。口縁部から体部上半にかけて刷毛目を施す。(4～7)は、複合口縁状の口縁を有すもので、(5・7)は体部上半に叩きを施す。また(6)は、体部外面に刷毛目、内面にナデを施す。(8)は底部片で外面に叩き、内面を刷毛目調整する。(9)は高杯で、二重口縁状をなす。口縁端部外面に、擬凹線を配する。(10～12)は器台。(10)は、直線的に上方へのびる口縁部から端部は垂下する。(11・



第33図 出土遺物実測図(2)

12)は上方へ屈曲して延びる口縁端部を有す。いずれも、遺存部は内外面とも篋磨きを施し、口縁端部外面には擬凹線を配する。(13・14)は鉢である。(13)は、丸味のある体部に二重口縁気味の口縁部を有す。また(14)は、直口する口縁部を有す。(13)は体部外面に叩きの後ナデ、(14)は叩きを施す。

古墳時代 SD10147から出土した古墳時代後期に属す須恵器類の一部を図示した。なお、本遺構から出土した遺物はそのほとんどを須恵器が占め、土師器は細片がごくわずかに認められるにすぎなかった(第14図)。

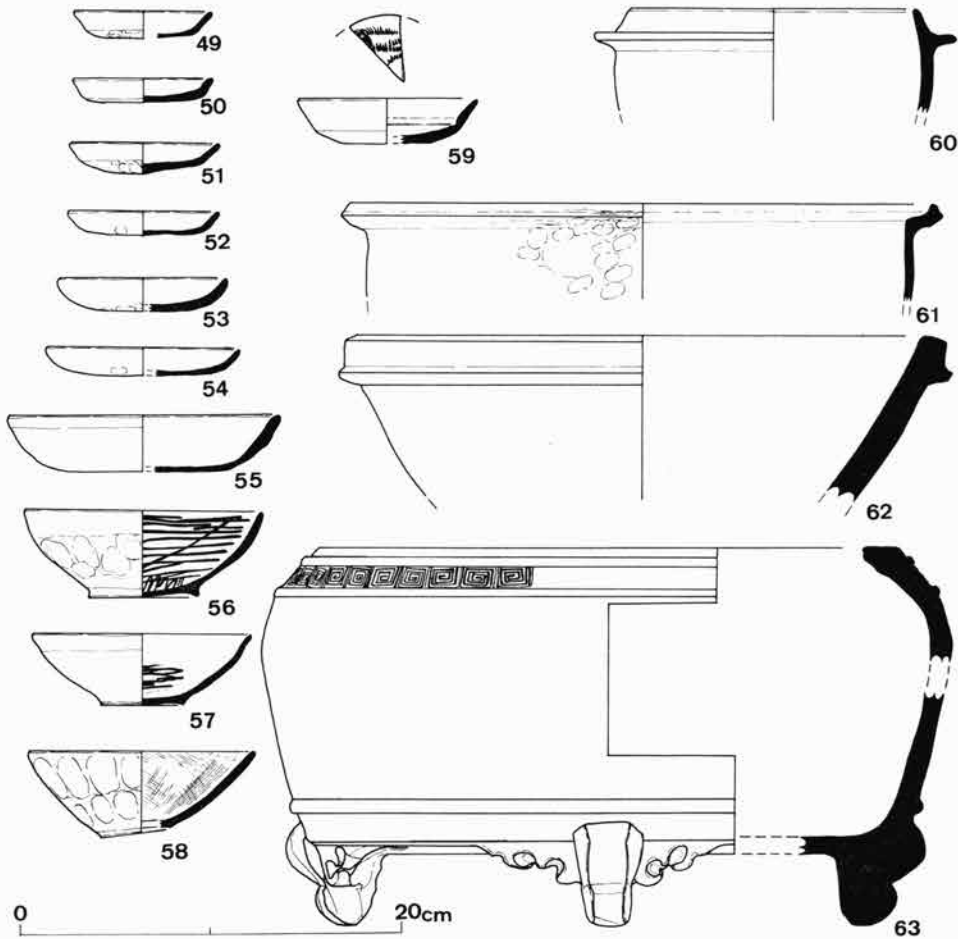
(15~17)は須恵器杯蓋で、(18~20)は須恵器杯身である。中村編年Ⅱ型式4段階に属するもの(15・18)から、口径が縮小化し(16・19)、さらに宝珠つまみの出現するⅢ型式1段階のもの(17・20)がある。他も、およそこの時期のものが混在する。(21)は埴で、体部は大きく張り、短く直立する口縁部を有す。(22~24)は須恵器高杯である。(22・23)は脚部片で、前者は短くハの字状に開いた後、端部付近で下方へ折れ曲がる形態をなし、透かしを3方向に穿つ。後者は大きくラッパ状に開くもので、3方向に透かしを穿つ。(24)は無蓋高杯で、短くハの字状に開く脚部を有すと考えられる。

奈良~平安時代 この時代の遺物は、1~4トレンチの包含層・各遺構いずれからも多く出土した。ここでは、SD10149出土資料の中から主なものを図示した。本時期の遺物も須恵器類が多く、杯身・杯蓋・甕・耳皿・風字硯などがある。土師器類は甕などわずかにすぎない。また、緑釉陶器(5点)・灰釉陶器(1点)などもみられた。時期的には、8世紀中頃から10世紀中頃ののものがある(第33図)。

(25~29)は須恵器杯蓋で、口径14cm前後のもの20cm前後のものがある。形態的には、形の整った宝珠形のつまみを有し傘形に開くもの(25)、扁平な宝珠つまみを有し口縁部付近で若干屈曲するもの(26・27)などがある。また、輪状のつまみを有したものもある(28)。(30~37)は、須恵器杯身である。(30・32)は無高台で、(32~37)は高台を有す。(36)は口径の割に器高が高く、(37)は口径20cmを測る大形品である。(38・40)は、須恵器甕口縁部片である。いずれも、外反気味に短くのびる口縁部を有す。(38)は耳皿、(41)は風字硯の小片である。(42・43)は緑釉陶器で、前者は皿、後者は椀の高台部片と考えられる。(44)は灰釉陶器皿。

(45)は土師器甕で、広く外反する口縁部を有し、体部外面を刷毛目調整する。(46・47)は製塩土器で、いわゆる砲弾形を呈する。内外面とも粗いなでが施され、口径10cm前後を測る。

このほか墨書土器が1点認められた。判読不能なため図示していないが、須恵器杯身片で底部外面に墨痕が認められた。



第34図 出土遺物実測図(3)

鎌倉～室町時代 ここでは、4トレンチの遺物包含層及び遺構埋土内出土遺物の中から主なものを図示した(第34図)。

(49～55)は土師器皿。(49～54)は小皿，(55)は中皿。小皿には口径が7.5～8.0cmのもの(49～52)，9.0cm前後のもの(53)，10.0cmのもの(54)の3者がある。

(56～58)は瓦器碗。いずれも断面三角形の高台を付すが，(55)から(57)へと形態がいびつとなり小型化する。特に(57)は内面に暗文を施さず，刷毛目調整で仕上げている。この手法は，昨年度の調査で初めて確認した当地方の瓦器碗の最終段階のものに認められるものである。(59)は同安窯系青磁皿。(60)は土師質の羽釜，(61)は土師質の鍋，(62)は石鍋，(63)は火舎。

(56)・(63)はSE10116から出土したもので，他は遺物包含層出土である。大半のものは13世紀後半を中心とする時期を示すが，一部それを前後する時期のものが認められる。特に

SE10116から出土した(56)・(63)は、前者が13世紀前半に、後者が15世紀頃に比定しうるものであるが、(56)は井戸の底部から、また(63)は井戸を崩してほうり込んだ石材中から出土した。恐らく、井戸が廃絶したのが(55)の示す時期であり、その後地上に痕跡が残っていた石組みが破壊されその石材が井戸の中に投げ込まれたのが(63)の示す時期なのであろう。

5. ま と め

今回の調査地は、先にも述べたように、千代川遺跡の中でも丹波国府推定地の西辺部上に相当している。また、試掘調査の成果からは弥生時代～中世の集落跡の存在も予想されていた地区であった。

調査の結果、やはり弥生時代後期～中世に及ぶ数多くの遺構・遺物を検出した。また、そこには、奈良～平安時代の掘立柱建物跡・溝などもあった。しかし、各時期の遺構・遺物はその性格を考えるとさまざまな問題点を有している。以下、それらを整理し、今回の調査成果のまとめとしたい。

① 数点ではあったが、縄文時代後期・弥生時代前期の土器片が出土したことは、遺構としては未確認であるものの、当遺跡がこれまで認識されていた時期よりさらに遡ることを示している。

② 弥生時代後期の集落跡は、調査区の西側にその中心部が広がっていると考えられた。また、土坑のうち幾つかは当時の墳墓とできるかも知れないと考えている。

③ 古墳時代の遺構としては、溝を1条検出したにとどまる。しかし、調査区の近傍には確実に当時の集落跡が存在すると考えて良いだろう。

④ 奈良～平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡・溝などを検出した。しかし、これら遺構の方向性・規格性などからは、国府の設置に伴う施設であるという確証を得ることはできなかった。ただ、遺物からみると風字硯(1点)・墨書土器(1点)・緑釉陶器(5点)・灰釉陶器(1点)の出土が目される。中でも、風字硯は第6次調査で出土した円面硯とともに本遺跡内で出土した硯としては2例目にあたる。また、墨書土器は本遺跡出土例としては17例目にあたる。いずれも、国府との関連を考える上で非常に重要な資料であろう。

⑤ 中世の遺構としては、4トレンチを中心に村落の一部を検出したと考えられるが、その全容を把握しうるには至らなかった。なおこの時期の遺構の示す方向は、奈良～平安時代の遺構には顕著に認められなかった、現在当地に残る条里制地割りとほぼ同一の方向を示すという特徴を有していた。^(注12)

(森下 衛)

(3) 湯井地区所在古墳状隆起の発掘調査

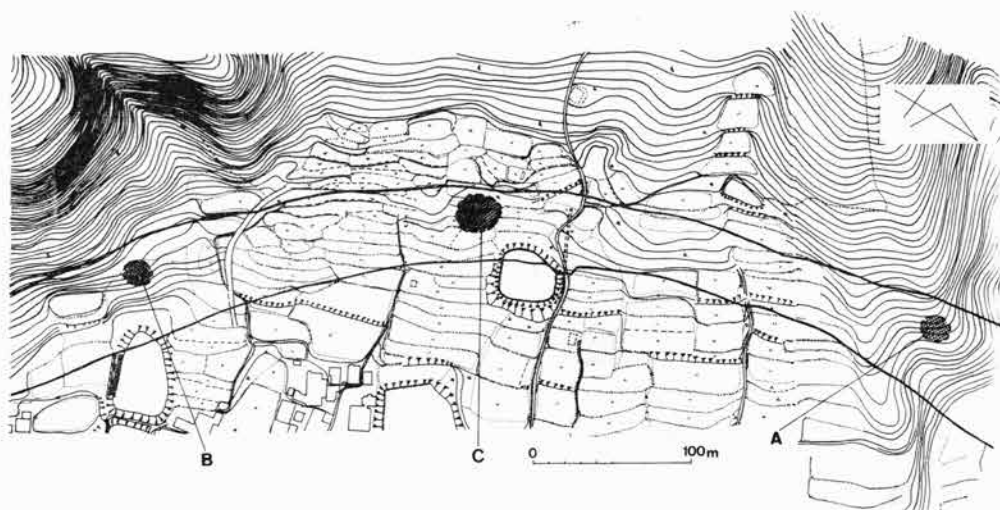
1. はじめに

現在、国道9号バイパスの建設工事が進められている亀岡市千代川町湯井地区で、その予定路線は行者山から平野部に向かう地形の変換点を通過する。

そこには、古墳の立地に適した場所が幾つも認められるうえ、近接して小金岐古墳群・北の庄古墳群がある。また、その東方には古墳時代の集落跡の存在が推測される千代川遺跡もある。しかし、当地区ではこれまで古墳の存在は確認されていなかった。工事着手前段階での分布調査では、古墳状に隆起している所は幾つか認められていたが、明確な根拠が得られないため当初の調査計画に入れていなかった。

ところが、工事が開始され樹木の伐採が進行するに従い、地形が古墳状を呈し、しかもその内部主体としての横穴式石室に利用されたかと思われる巨石の露出する部分が3か所確認されるに至った。建設省京都国道工事事務所からその旨の連絡を受けた当調査研究センターは、至急にそれが古墳であるかどうかの確認が必要であると判断した。

そこで、昭和60年8月30日から同年9月15日までの期間、確認された3か所の古墳状隆起をそれぞれA・B・C地点と仮称し、試掘調査を断続的に行った(第35図)。その結果、A・Bの2地点は古墳とは認められなかった。しかし、C地点では、南側からその中央部に向かって、U字状の土壇に石材が落ち込んだ状態の場所があり、それが横穴式石室の痕跡ではないかと考えられた。しかも、その周辺から、古墳時代後期に属する須恵器片が出土した。



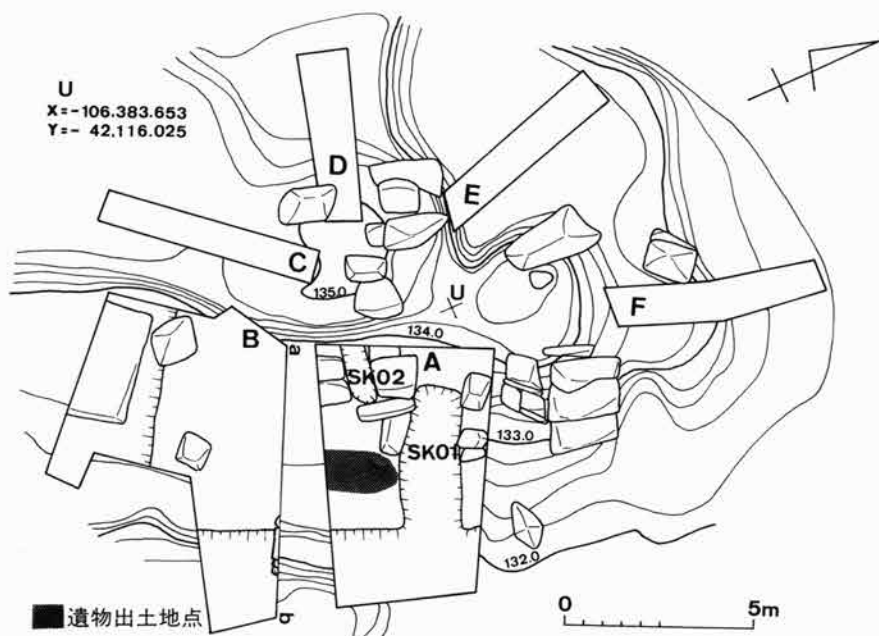
第35図 試掘調査地点位置図

以上の成果から、C地点については本格的な調査が必要であると判断し、昭和61年2月25日から同年3月7日まで発掘調査を実施した(第20図B)。

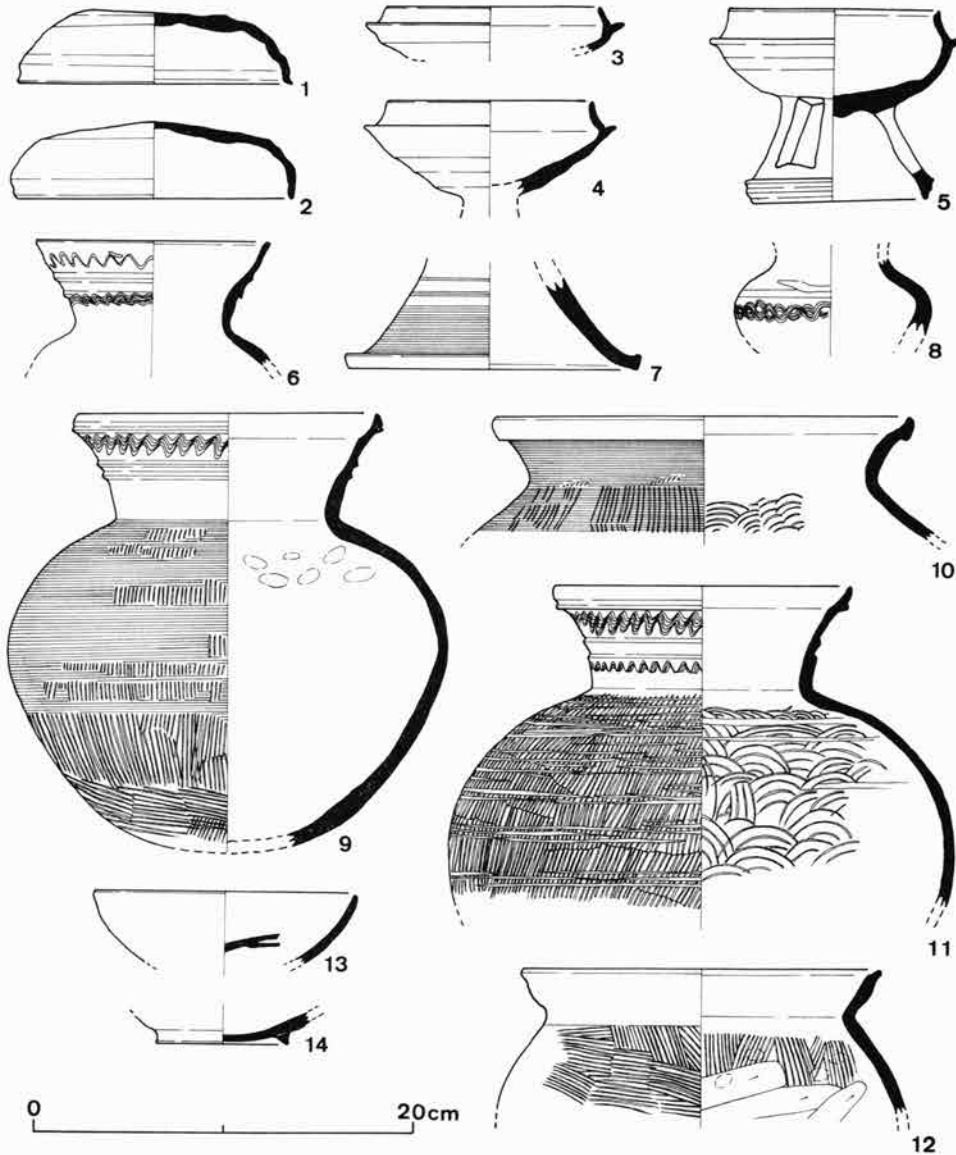
2. 調査概要

上記の経過から、調査はこれが古墳であるか否かの確認作業から始めた。まず、U字状の土坑で上方から落下したと考えられる石材を取り除き、側壁・床面などの横穴式石室の痕跡の検出に努めた。しかし、明確にその痕跡を認めることはできず、周囲に自然石が並ぶ幅約2m・深さ約3mの土坑となった(SK01)。また、その底部からは近・現代に属する瓦片や陶器片が出土した。さらに、SK01の西側にも自然石で囲まれた土坑(SK02)を検出し、同様の遺物が出土した。当初横穴式石室の痕跡と想定した部分は、積極的に断定できない結果となった。

ただ、これらの作業の過程で、SK02の南側から5世紀末～6世紀後半に位置づけられる須恵器片・土師器片がまとも出土した。これより、調査地が本来古墳として築造されたものであるが、後世の削平によって、その痕跡のほとんどが消滅している可能性が考えられた。そこで、古墳状隆起の周囲に5か所のトレンチ(第36図B～F)を入れた。しかし、ここでも中・近世の盛土・削平が予想以上に著しく、地山の成形や盛土など古墳築造に関する遺構は確認できなかった。



第36図 調査地平面図



第37図 出土遺物実測図

3. 出土遺物

今回の調査では、当初想定した石室あるいは古墳に関連する遺構は確認できなかった。しかし、SK02の南側(第36図)より、須恵器(1~11)・土師器(12)が出土した。また、SK02の覆土は、土師器・瓦器(13・14)の細片を数多く包含していた。(第37図)

杯蓋(1)は、口径14.4cm・器高3.9cmを削る。杯蓋(2)は、口径14.5cm・器高4.0cmを削る。いずれも、天井部は扁平で、立ちあがりはずかになりに内傾し、口縁端部は丸くおさま

る。天井部はヘラ削り、他はヨコナデを施す。杯身(3)は、口径10.8cmを測る。立ちあがりはやや内傾し、端部付近で上方に向く。高杯(4)は、口径10.6cmを測り、脚部は欠損する。立ちあがり内傾し、端部は丸くおさまる。杯身部の底部外面3分の1程度にヘラ削りを施す。高杯(5)は、口径11.0cm・器高10.1cmを測る。立ちあがり内傾し、端部内面はわずかに凹面をなし段をもつ。脚部は短く、ハの字状に外反し、端部外面は凹部を2か所設ける。また、長方形の透かしを3か所に穿つ。高杯(7)は、脚部のみ残存し、脚部底径14.6cmを測る。外面ほぼ全面にカキメを施す。甕(6)は、口縁部のみが残存し、口径12.2cmを測る。口縁部は、2条の鈍い凸線、その上下にそれぞれ1条・4条の波状文が巡る。甕(8)は、体部上半部のみ残存する。体部の張り出した部分に、交差する4条の波状文を施す。甕(9)は、口径15.8cm・体部最大径23.3cm・器高約23cmを測る。口縁部内面はわずかに凹面をなす。口縁部は、9条の波状文、その上下にそれぞれ1条・2条の凸線が巡る。外面は全面に平行タタキを施し、肩部から体部上半部にかけてその後カキメを施す。肩部内面に指圧痕がみられる。甕(10)は、口径21.8cmを測る。口縁部は短く、端部は下方にやや肥厚する。肩部外面は平行タタキの後、カキメを施す。肩部内面は円弧タタキを施す。甕(11)は、口径15.6cm・体部最大径26.9cmを測る。口縁端部はわずかに凹面をなす。口縁部は、上から1条の凸線・11条の波状文・2条の凸線・5条以上の波状文が巡る。体部外面は平行タタキの後、カキメを施す。体部内面は円弧タタキの後、ナデを施す。甕(12)は、口径18.8cmを測る。端部内面は段をなし、外反する口縁中央付近はやや肥厚する。体部外面・内面上方はハケ、内面下方はヘラ削りを施す。

4. ま と め

調査の結果、当該地は近世以後の地形変化が著しく、古墳としての痕跡を認めることができなかった。しかし、出土した須恵器・土師器は、丘陵の稜線上を利用して数多くの古墳が築かれる時期のものである。須恵器(5)(9)(11)は、中村編年のI型式5段階^(注13)、5世紀末頃と位置づけられ、亀岡市内で出土した須恵器で最古のものである。これらの遺物の存在は、横穴式石室を伴うのではなく、木棺直葬の埋葬形態をとる古墳があった可能性を示唆する。また、調査地の東方(丘陵裾部)は千代川遺跡の南半部に位置していることから、その時期の集落跡の存在も推察できる。よって、調査地を含めた一帯に、古墳が築造されていた可能性は非常に高いと言えよう。

また、大型の自然石は、調査地が近世以前には石切り場として利用されていたことを推察させるものであり、当初、横穴式石室と考えた土塚も、この石切り場に関連するものだったのであろう。

(西岸秀文)

注1 調査作業員

八木初次・八木感一・並河義次・八木千代江・八木よし子・原田敦子・山本美代子・野々村礼子・八木淑子・松本菊栄・俣野ふじを・俣野利江・山内きくの・八木まさ子・八木美重子・山内タカ子・松山晃子・松本はつえ

調査補助員

甲田陽亮・青井 敏・佐竹 孝・内藤正裕・西岡成郎・牧野淳司・横山憲郎・山室 繁・中坪央暁・加藤隆也・中西靖則・西田 覚・村山一弥・菅沼和行・山下健一郎

調査整理員

石原俊子・桂 智実・桂 洋子・田中智子・山本弥生・細川康晴

事務補助員

中西 宏・村上由利子

調査協力者

足利健亮・高橋誠一・金田章裕

注2 堤圭三郎ほか「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会) 1977

注3 水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注4 『陶邑』I~IV 大阪府教育委員会 19

注5 木下保明ほか『旭山古墳群発掘調査報告』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第5冊(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1981

注6 木下保明『『七世紀型古墳群』について』(『考古学論集』I 歴史堂書房) 1985

注7 木下 良「丹波国府」(『古代文化』16-2) 1966

注8 ①水谷寿克・村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

②水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注9 注3と同じ

第10 第2図に示したように、各グリッド名は大地区名と小地区名とを合わせて表記する。例えば、X05(大地区)・w23(小地区)はX05w23と、X06(大地区)・x02(小地区)はX06x02と表記している。

注11 千代川遺跡第1次調査として、本調査地の南側の地点で発掘調査が行われている(昭和55年度)。その結果、当地一帯は千々川の氾濫によって多くの砂礫が堆積しており、また遺構面も既に流失してしまっていることが確認されている。恐らく、これら砂礫もその一部と考えられ、千代川の氾濫で堆積したものと思われる。

安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1981) 京都府教育委員会) 1981

注12 このほか、中世の遺物包含層である灰褐色土上面から切り込んでいる素掘り溝などをトレンチの断面観察などによって確認している。これらを詳細に観察し、その資料を蓄積していけば、当該地一帯が居住区から現在の耕作地へと転化された過程や、現在認められる条里制遺構がいつの時期まで遡りうるのかという問題などを解決する手掛かりとなるだろう。

注13 中村 浩「和泉陶邑窯の研究」



3. 木津地区所在遺跡

昭和60年度発掘調査概要

1. はじめに

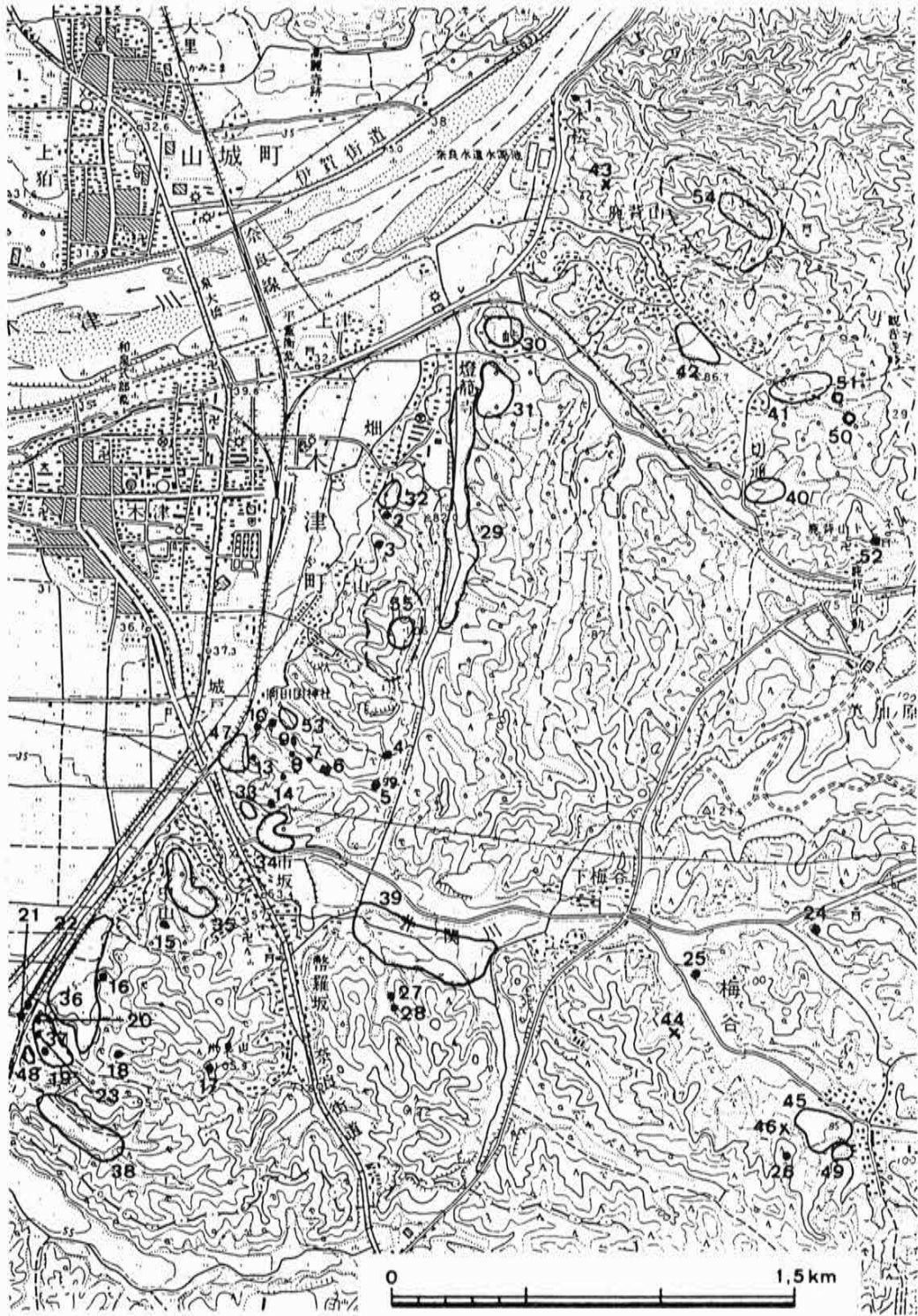
伊賀の山並を掻い潜って西流してきた木津川が北方に向きを変える屈曲部の南側に位置する相楽郡木津町は、水田と鹿背山・相楽山に囲まれた、京阪神地方の近郊農村地帯の一角を占めている。この木津町を含めた相楽郡及び綴喜郡一帯に横たわる丘陵地を利用して、関西学術研究都市が構築されることになり、その計画の一部が既に着手されている。近未来にあっては大きく変貌し、今日の環境から脱皮しつつある昨今の地域の様相である。

木津町をはじめとした京都府南部地方は、木津川の水運と肥沃な沖積平野を利用した経済的生産力を背景に、原始・古代から一早く生産活動を開始すると共に、その増大化に伴って、地理条件も加味されて、歴史的にも極めて重要な地を占めるに至った。その歴史的遺産として、前年度調査概要に記した通り、椿井大塚山古墳の他にも著名な諸遺跡が数多く散在している。また、考古学資料のみならず、『続日本紀』や『正倉院文書』などにも散見されることは周知の事実である。

この木津町の東方に低く横たわる、北端に標高203.9mの鹿背山を抱いた木津東部丘陵には、従前には市坂瓦窯跡など数か所の遺跡のみ知られていたが^(注1)、関西学術研究都市計画に依拠した分布調査で新たに確認された遺跡や既知の遺跡をも含めて総数50か所の遺跡が散在することが分明となり^(注2)、さらに緻密な調査によって増加する可能性も秘めている。

上記木津東部丘陵に於いても学術研究都市計画の関連事業が住宅・都市整備公団によって実施されることになり、住宅・都市整備公団の依頼により昭和59年度より遺物散布地の試掘を中心とした調査を継続実施することになった。昨年度では、上人ヶ平遺跡における奈良時代の掘立柱建物跡や東大寺・平城宮大膳職出土瓦と同範の軒瓦が検出するなどの諸成果と各調査地点において上げる^(注3)ことができた。

今年度は、木津町字梅谷地区の6か所及び同市坂地区の1か所の計7か所、すなわち、古墳3基・遺物散布地4か所を調査することになり、昨年度の調査で出土した諸遺物の整理報告をも併せて、昭和60年4月1日から着手し、現地調査は同年5月8日から昭和61年3月17日まで実施した。調査は、調査課小山雅人・戸原和人・松井忠春(アイウエオ順)の三名が担当し、多数の学生補助員・整理員がこれを補助した^(注4)。また関係諸機関並びに土地所有者などからも多大な協力・援助があった。併せ深謝する。(松井忠春)



第38図 調査位置図

2. 第 24 地 点(北中ノ谷古墳)

1. 調査の経過

当地点は、西方に伸びる丘陵の端部に位置する地形の高まりで、径約10m・高さ1mの古墳と想定された。雑木等を伐採した後、円丘頂部を中心に十字に幅0.5mのトレンチを設定し、掘削を行った。その後、北東部と南西部を面的に掘削し、一方テラス状地形を呈していた北西部にもトレンチを伸ばしたが、遺構は全く認められなかった。また、遺物も皆無であった。最後に、十字トレンチに沿って断ち割りを行ったが、その結果は第42図に示した通りである。調査は、昭和60年5月8日から7月14日まで行い、90㎡を発掘した。

2. まとめ

以上の結果から、第24地点は古墳ではなく、自然地形であることが判明した。

3. 第 25 地 点(中山古墳)

1. 調査の経過

当地点は、東西に伸びる痩せ尾根の頂部に位置する。頂部を中心に十字に幅0.5mのトレンチを設定し、掘削を行った。その後、南西部と北東部を面的に掘り上げたが、遺構は全く認められなかった。また遺物も皆無であった。最後に、十字トレンチに沿って断ち割りを行ったが、その結果を第42図に示す。調査は、昭和60年6月4日に開始し、8月8日に終了した。発掘面積は、116㎡である。

2. まとめ

以上の結果から、第25地点は、当初考えられたような古墳ではなく、自然地形であることが判明した。

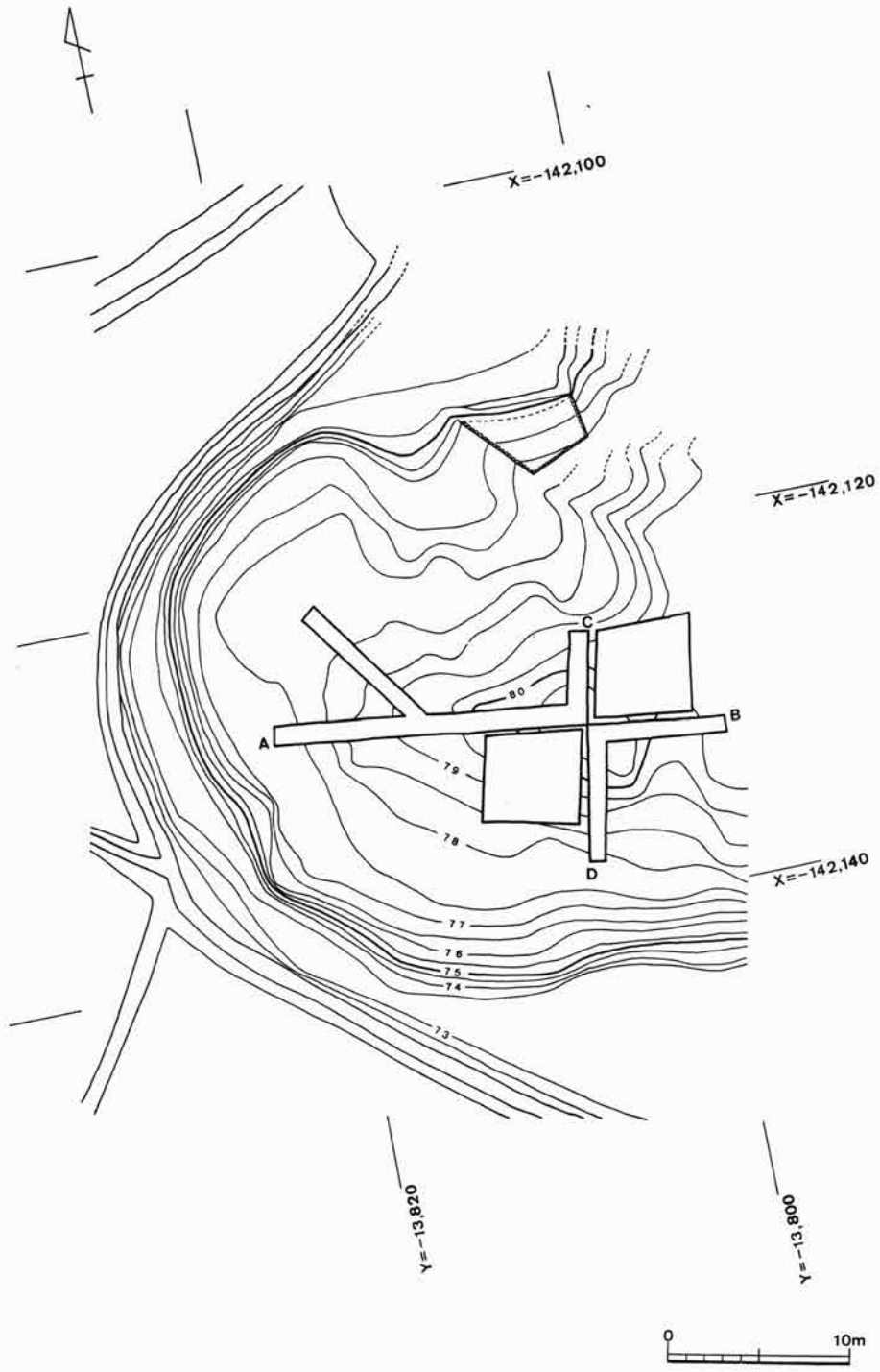
4. 第 26 地 点(中ノ平古墳)

1. 調査の経過

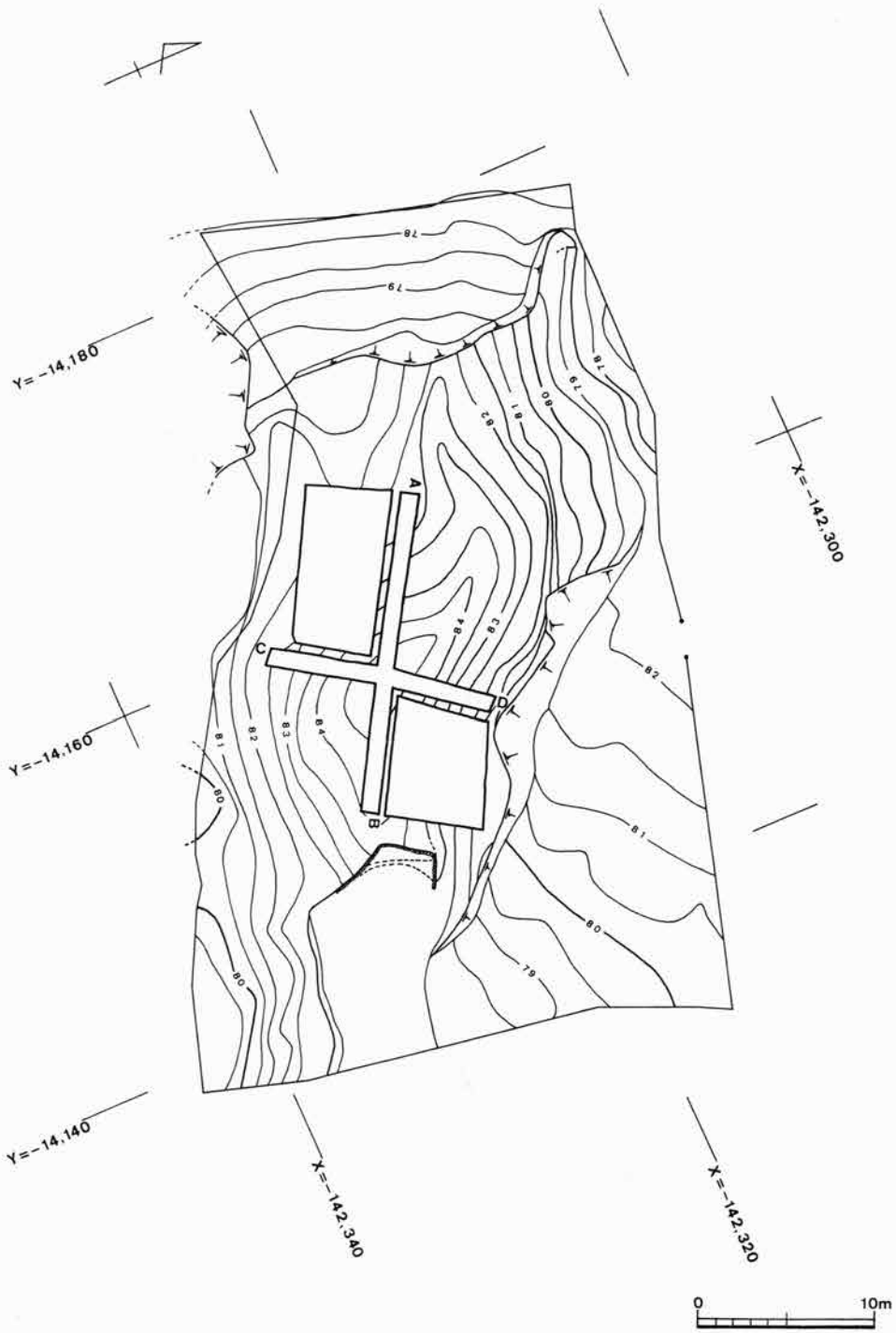
当地点は、南から伸びる丘陵端部に立地し、南北12m・東西4mの瓢箪形を呈する盛り上りである。「キ」の字形に幅0.5mのトレンチを設定し、掘削を行い、更に南北3か所で面的に掘り上げたが、遺構は全く認められなかった。また、遺物も全く出土しなかった。第43図に示したのは、最後に十字トレンチに沿って実施した断ち割りの断面図である。調査は昭和60年7月26日から10月9日まで実施し、発掘面積は220㎡である。

2. まとめ

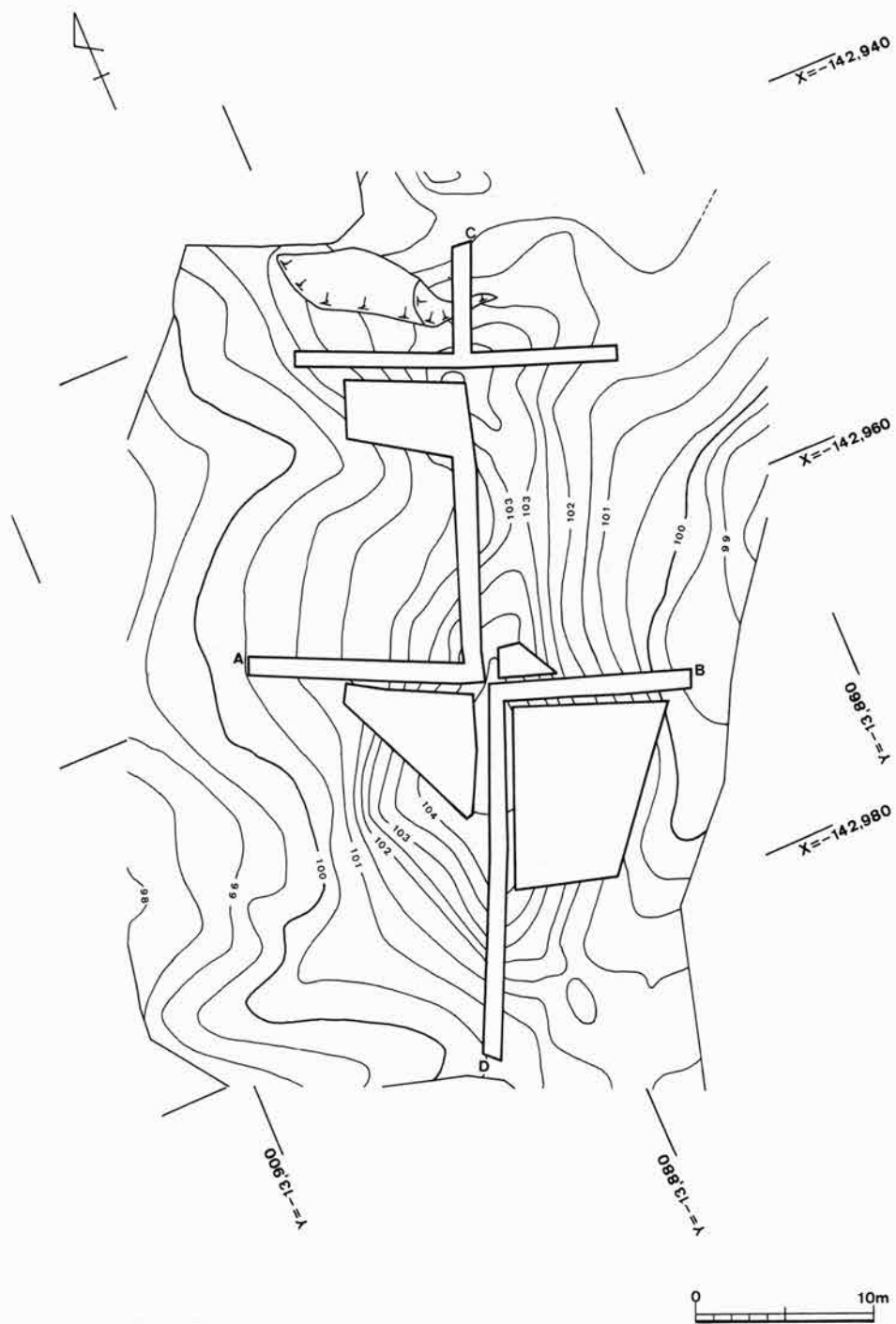
以上の結果から、第26地点は古墳ではなく、自然地形であることが判明したが、同時に、



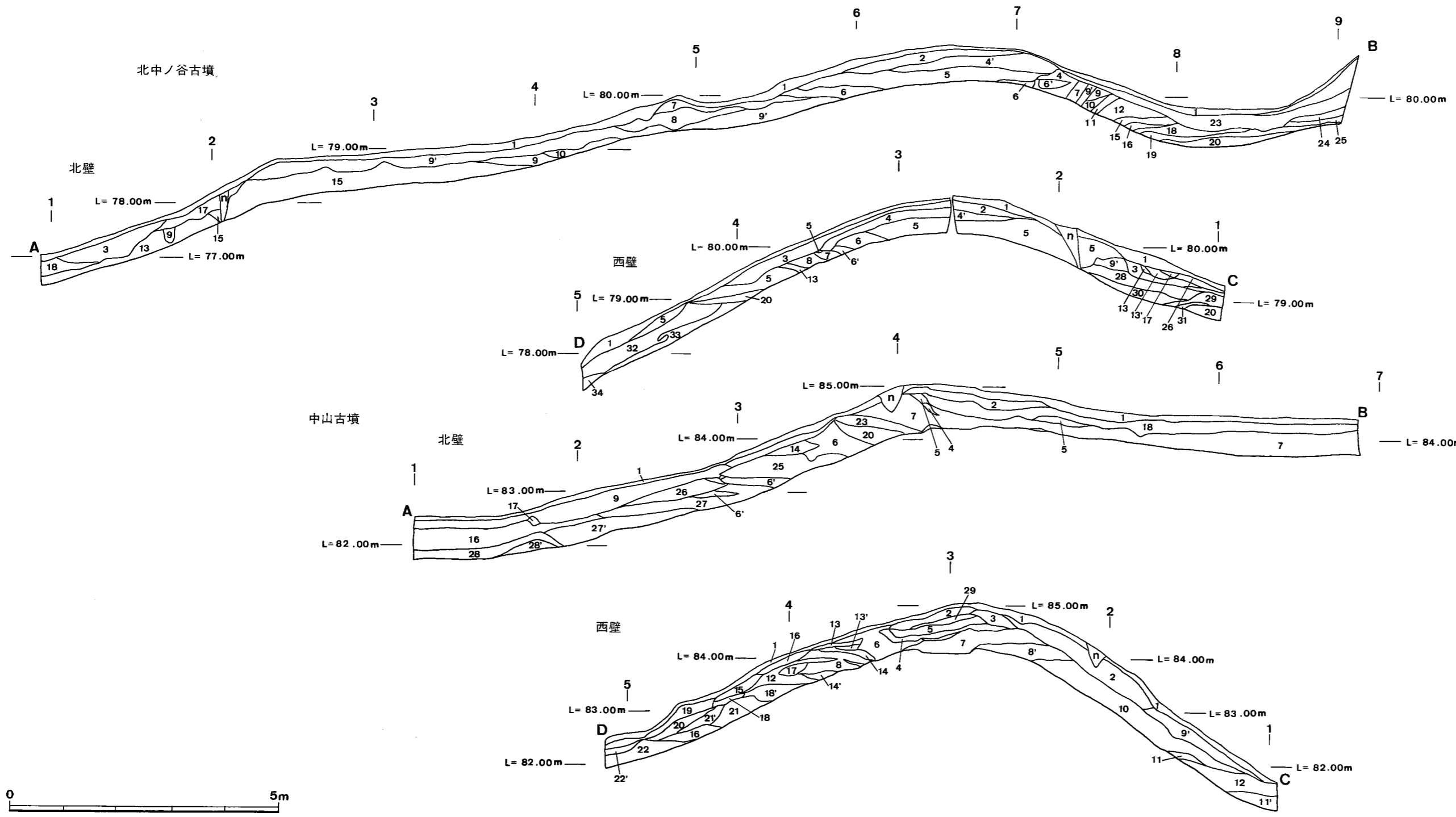
第39図 第24地点(北中ノ谷古墳)地形測量図



第40图 第25地点(中山古墳)地形測量图



第41図 第26地点(中ノ平古墳)地形測量図



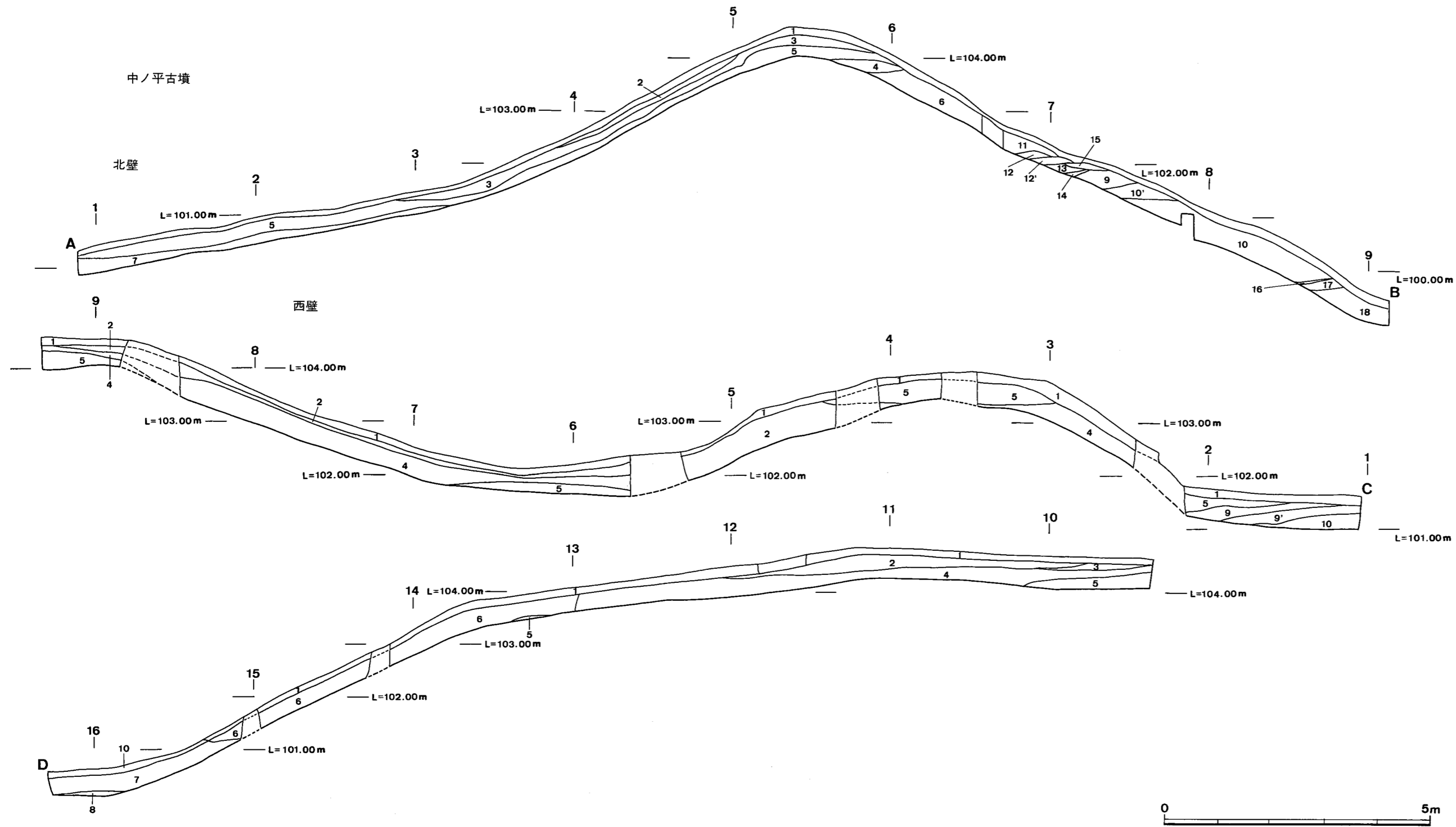
北中ノ谷古墳

- ① 表土
- ② 赤褐色砂質土層
- ③ 淡赤褐色砂質土層
- ④ 白色粘質土
- ④' // (やや褐色)
- ⑤ 暗灰色粘質土層
- ⑤' // (赤褐色ぶちまじり)
- ⑥ 暗灰色細砂土層(やや粘質)
- ⑥' // (赤味を含む)
- ⑦ 淡灰褐色砂質土層
- ⑧ 淡灰褐色粘質土層
- ⑨ 淡黄褐色細砂土層
- ⑨' // (やや粘質あり)
- ⑩ 淡白色砂質土層
- ⑪ 淡白色細砂土層
- ⑫ 淡白色砂層
- ⑬ 淡黄色細砂土層
- ⑬' // (黄白色にちかい)
- ⑭ 灰褐色砂質土層
- ⑮ 淡灰褐色粘質土層
- ⑯ 淡灰褐色粘土層
- ⑰ 黄灰色砂質土層
- ⑱ 暗灰褐色砂質土層
- ⑲ 茶褐色細砂土層
- ⑳ 暗灰色粘土層
- ㉑ 暗灰色粘質土層
- ㉒ 淡赤褐色砂質土層
- ㉓ 白色粘質土層
- ㉔ 暗灰色粘質土層
- ㉕ 灰色粘質土(褐色まじり)
- ㉖ 淡黄灰色砂質土層
- ㉗ 淡灰色砂層(2~4mmの小石を含む)
- ㉘ 灰褐色砂層(1~2mmの小石を含む)
- ㉙ 茶褐色砂層
- ㉚ 灰褐色砂質土(やや赤まじり)
- ㉛ 暗茶褐色細砂土層
- ㉜ 淡灰色粘質土層
- ㉝ 茶褐色粘質土層
- ㉞ 淡灰色粘土層
- ㉟ 木の根による攪乱

中山古墳

- ① 表土
- ② 淡赤褐色砂礫層(3~4cm礫多数含む)
- ③ 暗黒灰色砂質土層
- ④ 淡灰砂質土層
- ⑤ 淡赤褐色粘質土層
- ⑥ 淡木灰色砂質土層
- ⑥' // (やや粘質)
- ⑦ 淡青灰色粘質土層
- ⑧ 黄灰色粘質土層
- ⑧' // (やや灰色)
- ⑨ 淡褐色砂質土層
- ⑨' // (3~4cm礫多数含む)
- ⑩ 青灰色粘質土層(やや黄色)
- ⑪ 淡青灰色粘土層
- ⑪' // (やや赤味含む)
- ⑫ 赤褐色色砂質土層
- ⑬ 淡黄色砂質土層
- ⑬' // (やや赤い)
- ⑭ 黄灰色砂質土層
- ⑭' // (やや赤い)
- ⑮ 褐色砂質土層
- ⑯ 灰色粘土層
- ⑰ 灰色粘質土層
- ⑱ 淡黄赤褐色粘質土層
- ⑱' // (やや灰色)
- ⑲ 茶褐色砂礫土層
- ⑲ 黄灰色粘土層
- ⑳ 暗灰色粘質土層
- ㉑ // (やや黄色)
- ㉒ 淡赤褐色粘土層
- ㉓ // (やや灰色)
- ㉔ 木の根による攪乱

第42図 第24地点(北中ノ谷古墳)・第25地点(中山古墳)断面実測図



中の平古墳

- ① 表土、灰褐色砂質土層
- ② 赤褐色砂土層(サビ色)
- ③ 灰白褐色粘質土層
- ④ 灰白褐色粘土層
- ⑤ 赤(サビ)と白灰のシマ状粘性砂質土層
- ⑥ 灰褐色砂質土層
- ⑦ 灰褐色粘性砂質土層
- ⑧ 赤(サビ)砂質土層
- ⑨ 赤(サビ)黄色砂土層と灰色粘土層の互層
- ⑩ 灰白色砂土層
- ⑩' ⑩よりやや黄茶かかる
- ⑪ 青灰色粘性砂質土層
- ⑫ 黄茶色砂質土層
- ⑫' ⑫より茶が濃い砂質土層
- ⑬ 灰白色粘質土層と茶褐色粘質土層の互層
- ⑭ 灰白色粘土層
- ⑮ 青灰褐色砂質土層と灰白色砂質土層の互層
(鉄鉢様のものが1cmほどのはばではさまる)
- ⑯ 赤(サビ)色砂土層
- ⑰ 赤(サビ)色粘土層と灰色粘土層の互層
- ⑱ 灰白色砂土層

第43図 第26地点(中ノ平古墳)断面実測図

梅谷地区には現在のところ古墳は1基もないということになった訳である。

5. 第 44 地 点(奥ヶ平遺跡)

1. 調査の経過

昭和56年度の踏査の際、奈良時代の須恵器杯身片が表面採集された地点で、第25地点の井関川をはさむ対岸の丘陵端部に位置する。南北10m・東西4mのテラス状の地形を呈している。南北・東西に断面観察用の畔を残し、テラス部分を面的に発掘したが、砂質土と砂礫層から成る地山面には何ら遺構は認められなかった。また、遺物も近現代に属する数点以外には、全く出土しなかった。調査は、昭和60年7月11日から8月10日まで実施し、発掘面積は104㎡に及んだ。

2. まとめ

以上の結果から判断して、当地点は、何ら遺跡であることを示す確証は得られず、逆に、採集された須恵器杯に問題を残すことになった。一般に梅谷地区は、谷奥の中ノ島遺跡や梅谷瓦窯を除けば、遺物の散布は極めて希薄であるが、当地点では、遺物が採取された地点を発掘調査しても遺物すら出土しなかった訳である。

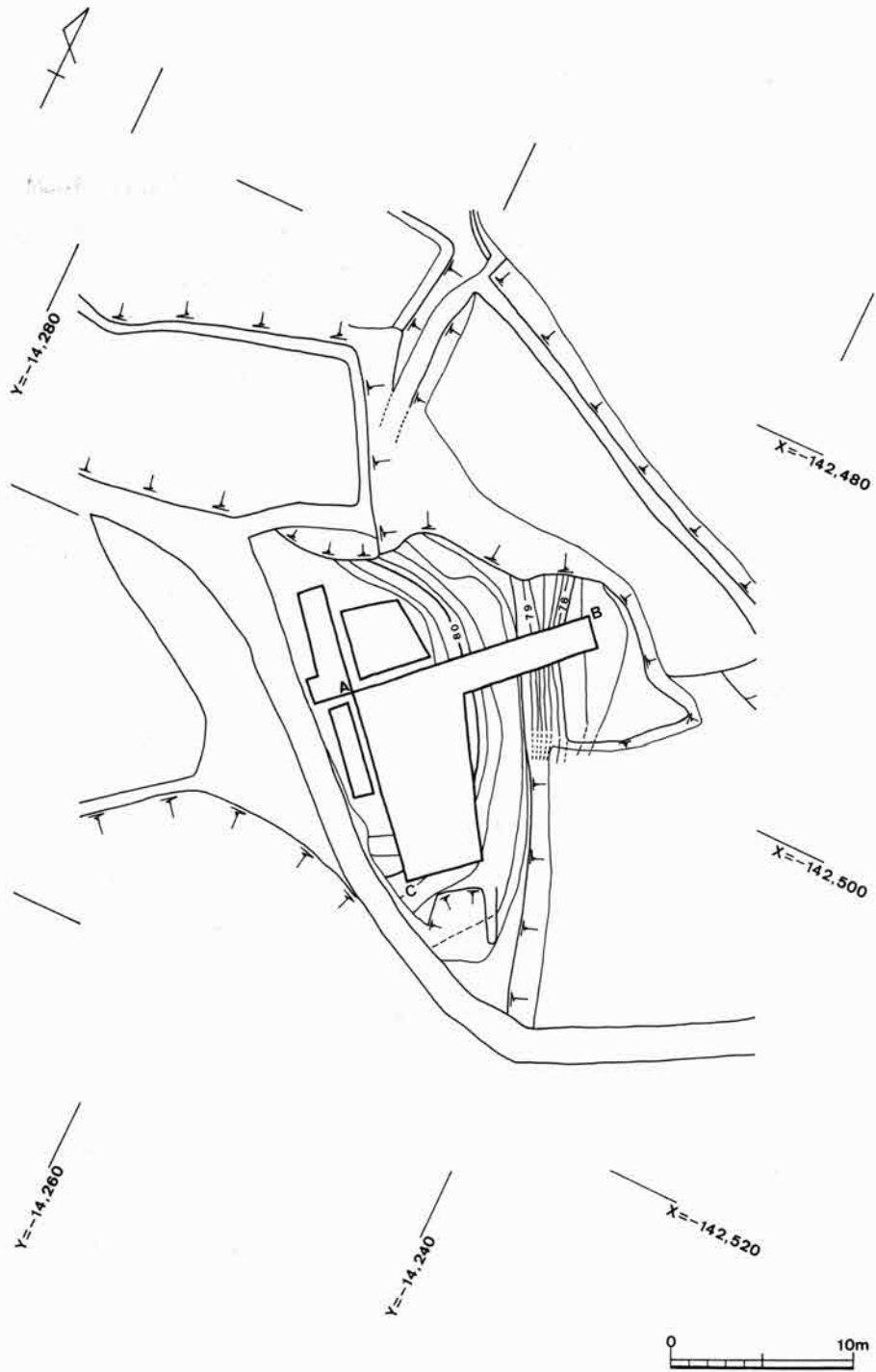
6. 第 46 地 点(中ノ平遺跡)

1. 調査の経過

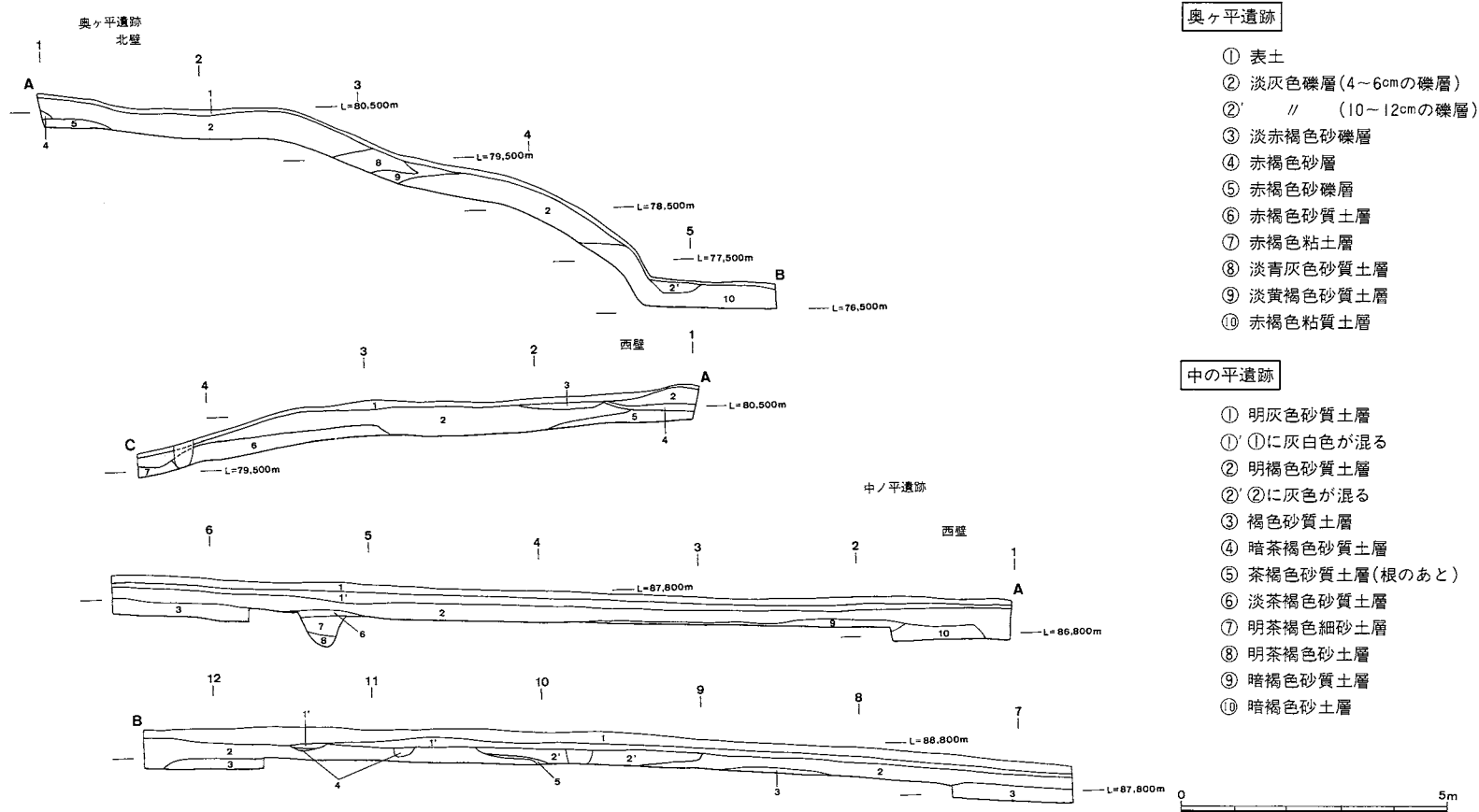
南から伸びる小丘陵の端部に位置する。同じ丘陵には第26地点が存在し、北東方向には中ノ島遺跡の水田が広がっている。当地点は、現在畑地になっている。昭和56年度の踏査では須恵器片が採取されており、また、調査期間中に、調査地の東で弥生時代の石鏃を1点採取した。幅1.5mのL字型トレンチを十字に組み合わせて設定し、掘削を行ったところ、南端部で数条の溝と、中央やや北で東西に走る溝状の掘込みを検出した。前者は茶畑等の耕作に関連するものと考えられ、また後者については、地元の人のお話で大正年間に、直ぐ近くの池の堤を築く際の土取の跡であることが判明した。出土遺物は近代以降の陶磁器数点である。調査は、昭和60年8月22日から9月7日まで実施し、発掘面積は151㎡である。

2. まとめ

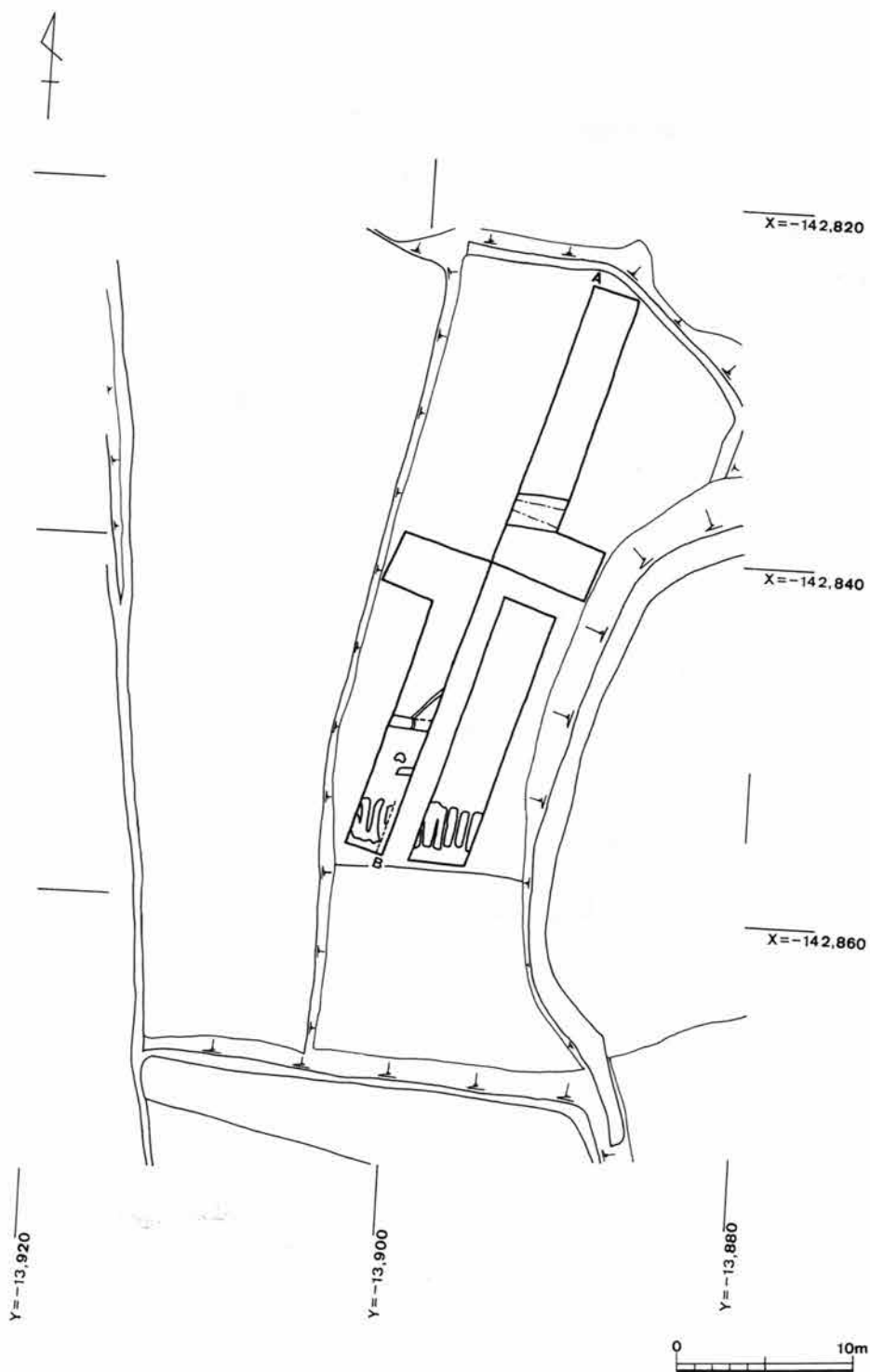
以上の結果から、第46地点には、近世以前の遺構はないと判断され、表面採取した石鏃や須恵器が示唆する時期の遺構も全く検出できなかった。須恵器片に関しては、第44地点と同様の問題を残す訳であるが、石鏃については、今後当地点の近くに弥生時代の遺跡が発見されない限り、弥生人の狩猟がこの辺りまで及んだという想定にとどまらざるを得ない。



第44図 第44地点(奥ヶ平遺跡)地形測量図



第45図 第44地点(奥ヶ平遺跡)・第46地点(中の平遺跡)断面実測図



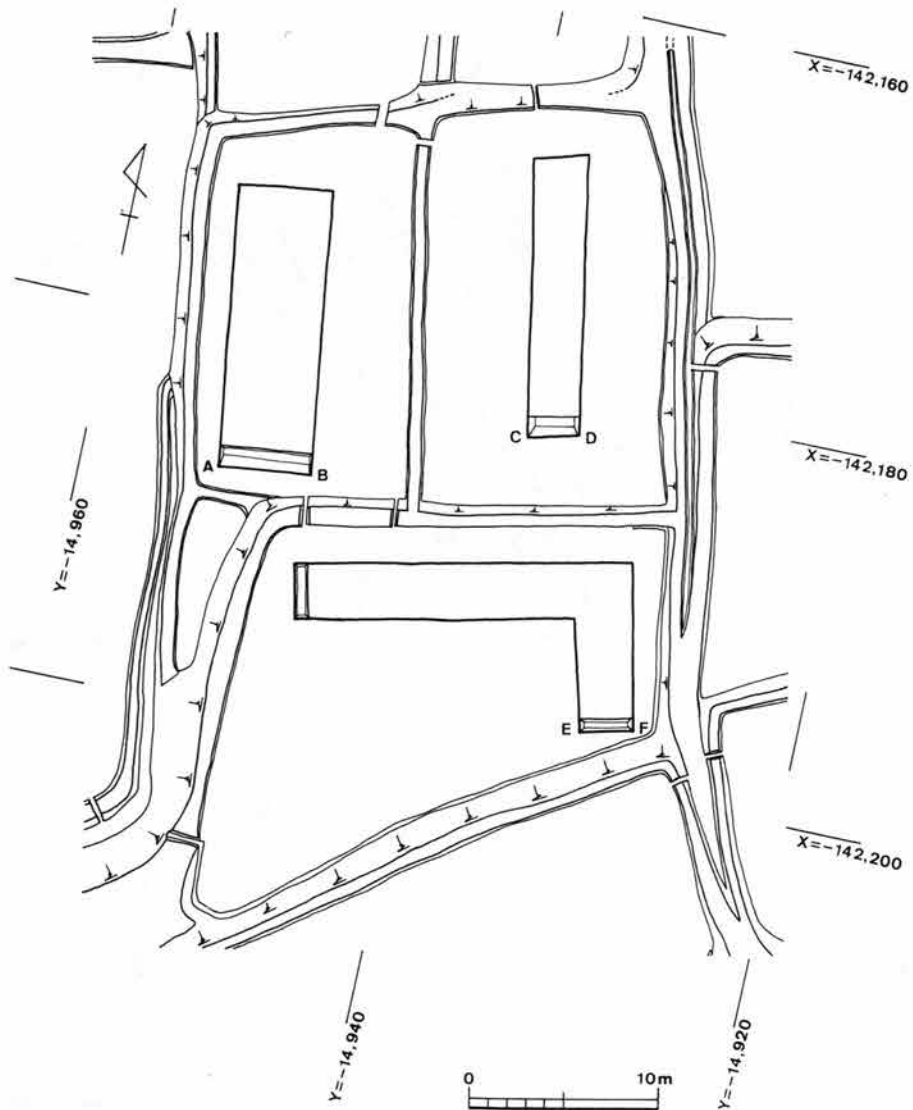
第46図 第46地点(中ノ平遺跡)地形測量図

以上の5地点には、調査の結果、顕著な遺構・遺物が見られず、当初与えていた「古墳」ないし「遺跡」という言葉を用いずに、地点名で報告した。

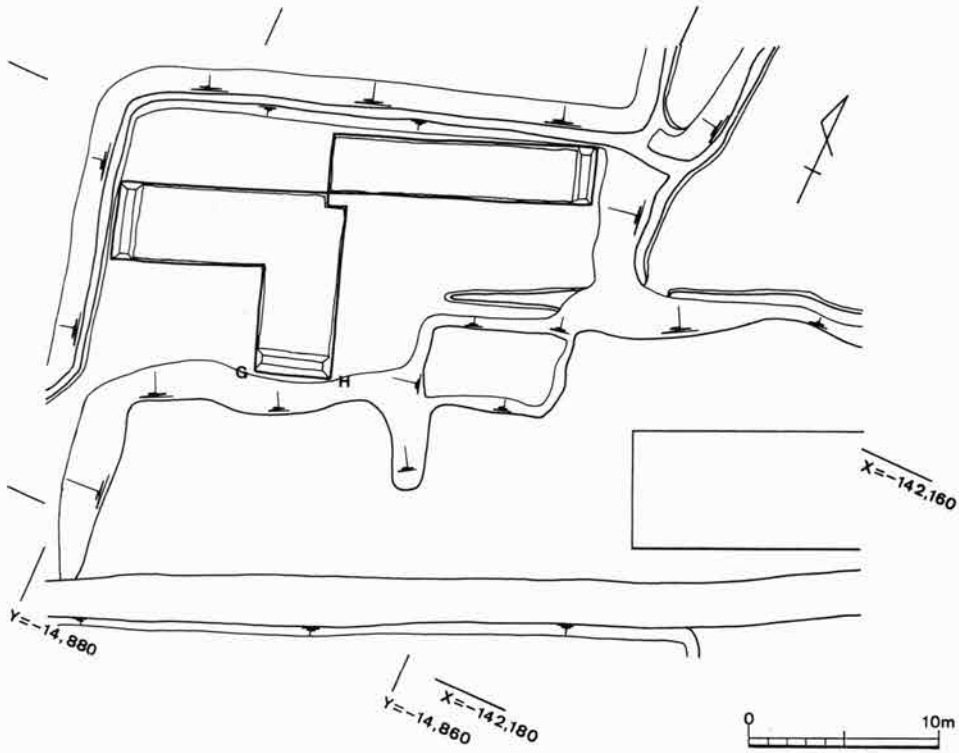
7. 菩提遺跡(第39地点)

1. 調査の経過

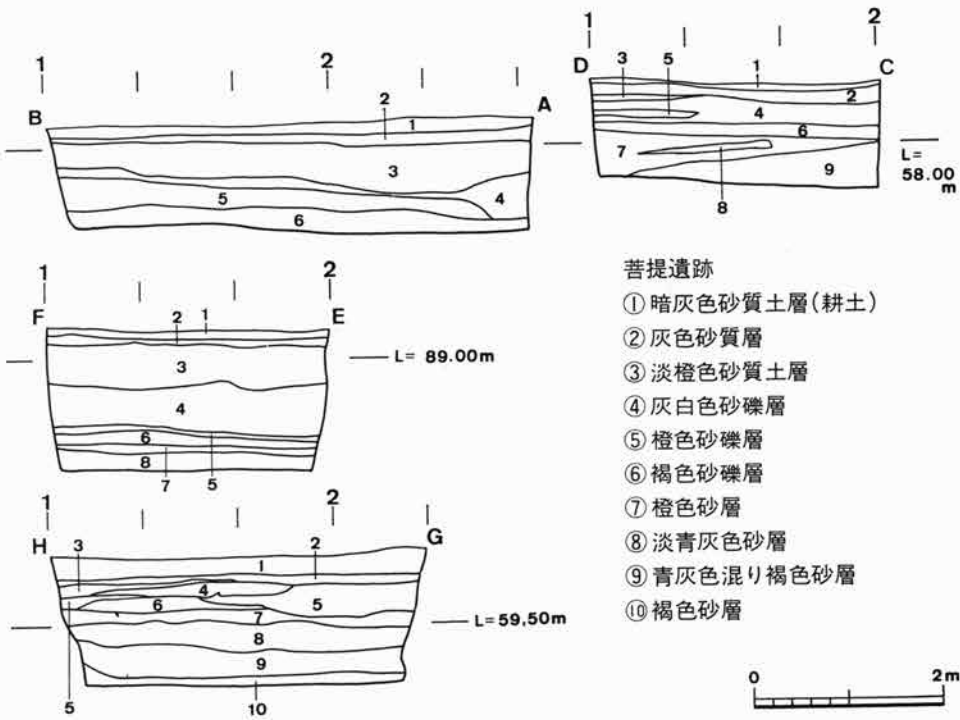
菩提遺跡は市坂地区に属し、井関川の南岸に東西600m・南北150mの範囲で広がる遺物散布地である。今年度は、その東端部にあたる小字菩提91・95btで試掘調査を行った。調



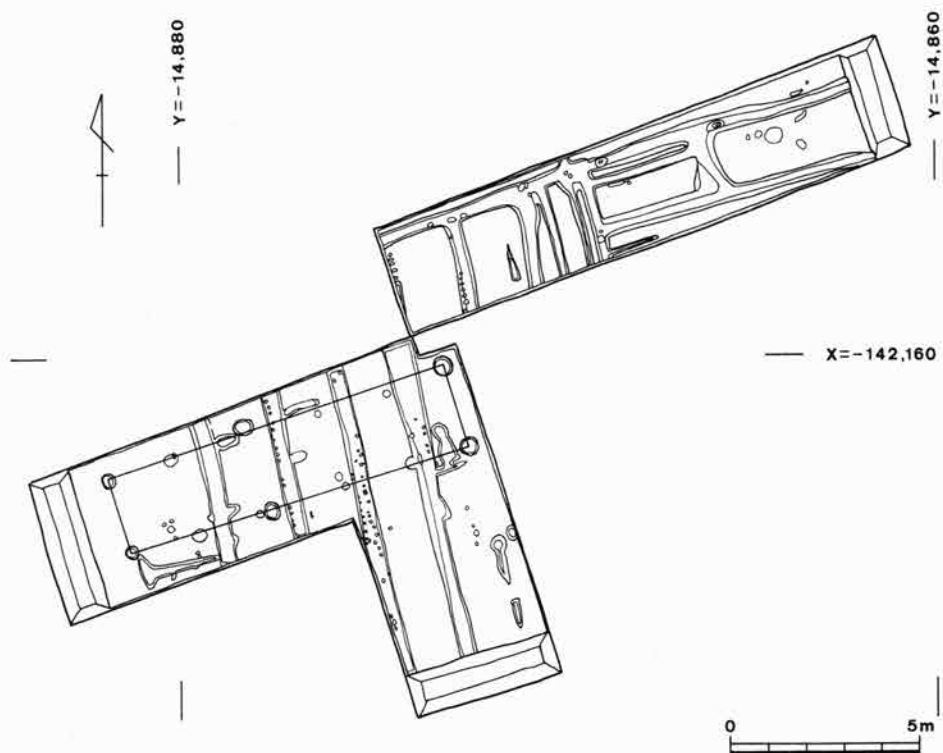
第47図 菩提遺跡 91bt 平面実測図



第48図 菩提遺跡 95bt 平面実測図



第49図 菩提遺跡 91・95bt 断面実測図



第50図 菩提遺跡 95bt 遺構実測図

査は昭和61年1月20日に開始し、3月17日に終了した。発掘面積は、170㎡である。

小字菩提91btでは3本のトレンチを設定し、掘削した(第47図)。第49図に示した。断面図の第6層褐色砂礫層あたりから湧水が激しくなったため、調査は地表下1.5~2mまでの掘削に止めた。地山を検出するには至らなかった。

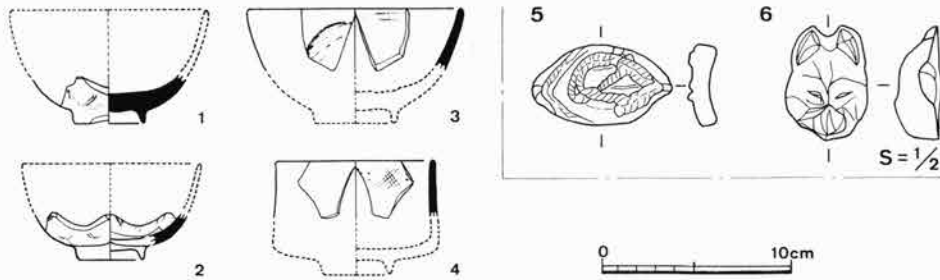
菩提95btにおいても同様で、地山まで到達するには至らなかったが、耕作土層を外した段階で、ピット列等の遺構を検出した。

2. 検出遺構(第50図)

95btで検出した遺構は、耕作に関連すると思われる10数条の細い溝とピット列である。後者は、直径20~30cmのピットが1~1.5mの間隔で並ぶもので、1×5間以上の掘立柱の小屋を想定できる。このピット群は、第1層(耕土)を外した段階で検出され、第2層の灰色砂質土層を切り込んでいる。

3. 出土遺物(第51図)

各トレンチで近世以降の少量の遺物が出土した。第51図に示したのは、その一部である。1~3は、伊万里系染付碗で、くらわんか手と称されるものである。4は同じく伊万里系の青磁染付碗である。5・6は、泥面子類で、6は狐面を表わす。5については完形であ



第51図 菩提遺跡出土遺物実測図

るが、何を象ったものか不明である。

4. まとめ

今回の調査においては、遺構は第2層をベースとし、出土遺物も耕作土及び遺構埋土からのみ出土した。従って、95btの掘立柱建物も、遺物の示唆する18世紀前半をさかのぼり得るものではないと考えられる。今回の調査では地山に達することは出来なかったが、地表下2mまで掘り下げた限りにおいて、第2層以下は無遺物層であった。次章で報告する中ノ島遺跡においては、奈良時代から江戸時代までの井関川による無遺物の堆積層が、相当丘陵際であるにも拘らず3mに達しており、1.5km下流の菩提遺跡では、地山は更に下位で検出されるかも知れない。

(小山雅人)

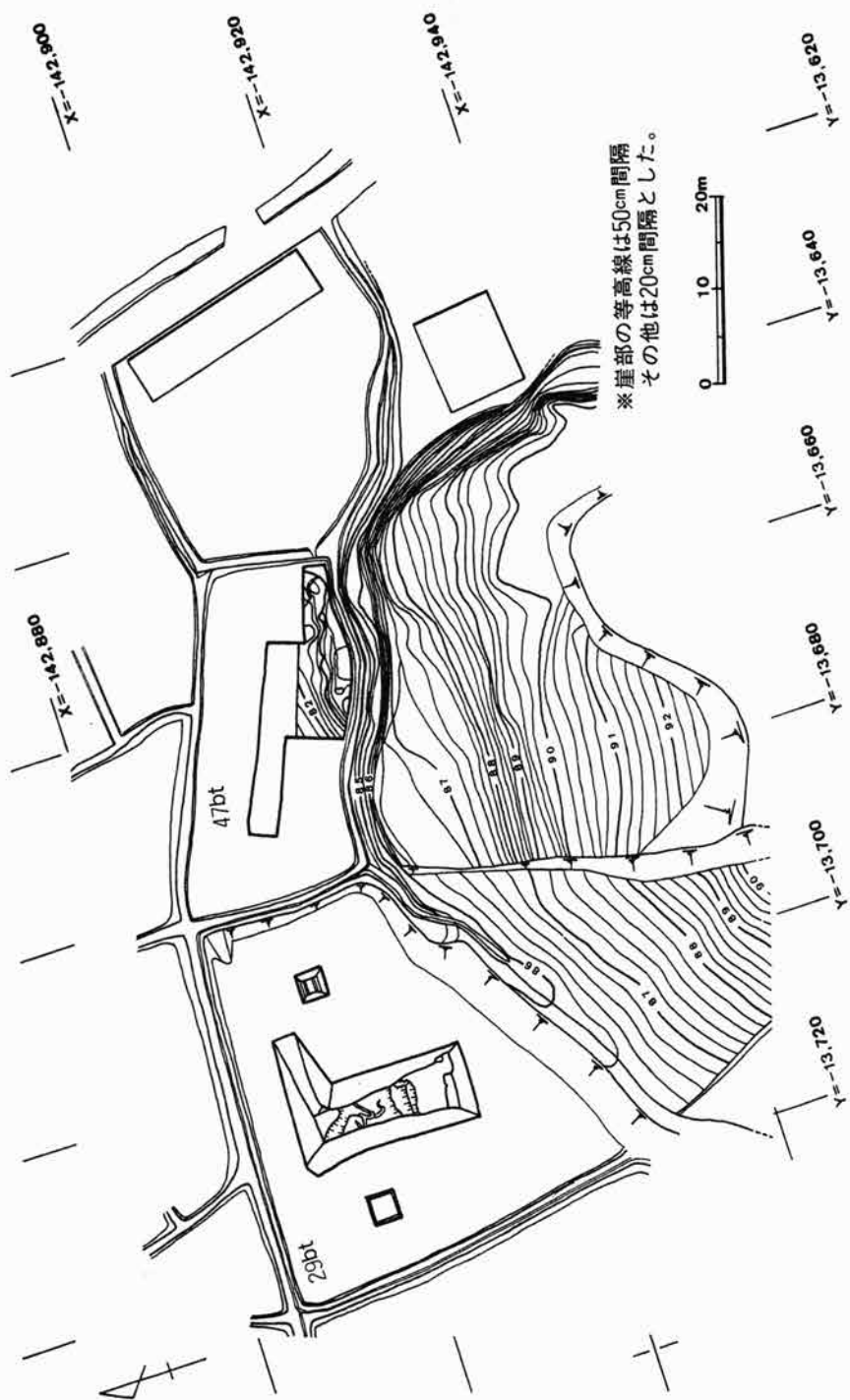
8. 中ノ島遺跡(第45地点)

1. はじめに

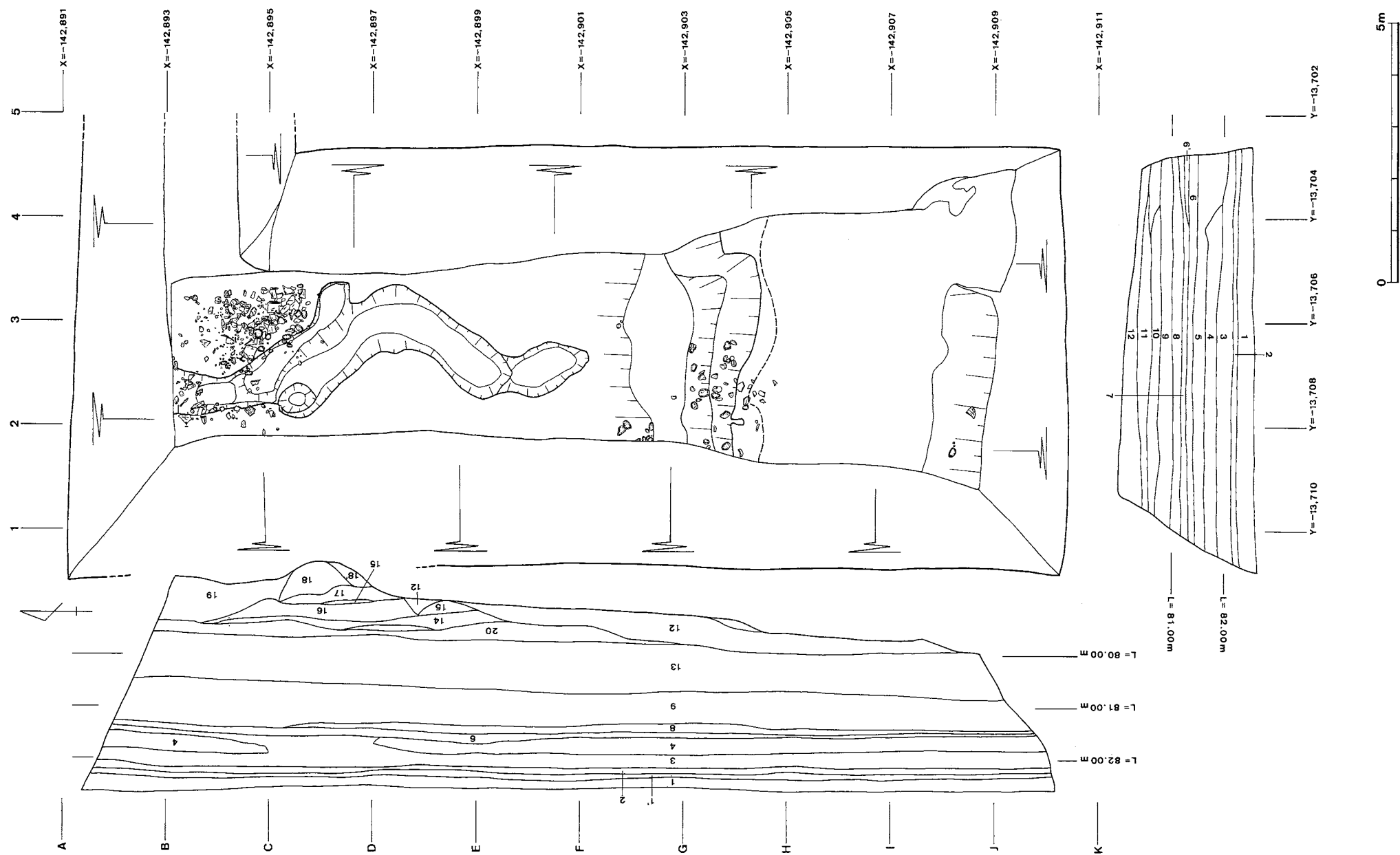
中ノ島遺跡は、京都府南部の相楽郡木津町南東寄りに所在し、奈良県境からわずか数百メートル北に位置する。南から北に向かって伸びる丘陵端部には奈良興福寺所用瓦を焼いた梅谷瓦窯が知られる。当瓦窯は、京都府遺跡地図に登録された周知の遺跡である。昭和56年の府教育委員会による遺跡の分布調査により興福寺式軒平瓦が初めて採取された。採取された軒平瓦は、瓦当の左側三分の一ほどの破片で、内区に均整唐草文、上外区および脇区に楕円形珠文、下外区に線裾歯文を配するいわゆる興福寺式軒平瓦である。そのほかにも数多くの布目をもつ平瓦、丸瓦が採取されている。中ノ島遺跡はその丘陵の北側裾部に位置し、現在水田となっている棚状の平坦地に、東西約200m・南北約200mの範囲で広がる遺物散布地である。当遺跡は、昭和56年の分布調査により瓦・土師器・須恵器などが採取され、遺物の散布地であることが確認されたものである。

2. 調査の概要

中ノ島遺跡は、東西約200m・南北約200mの範囲が想定される遺物散布地であるが、今



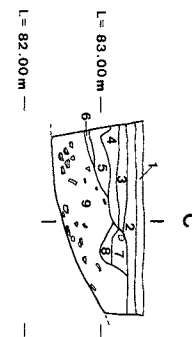
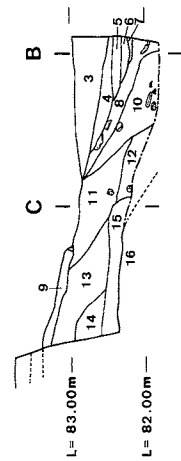
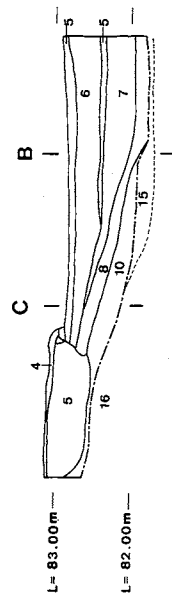
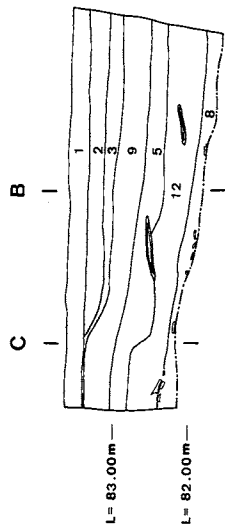
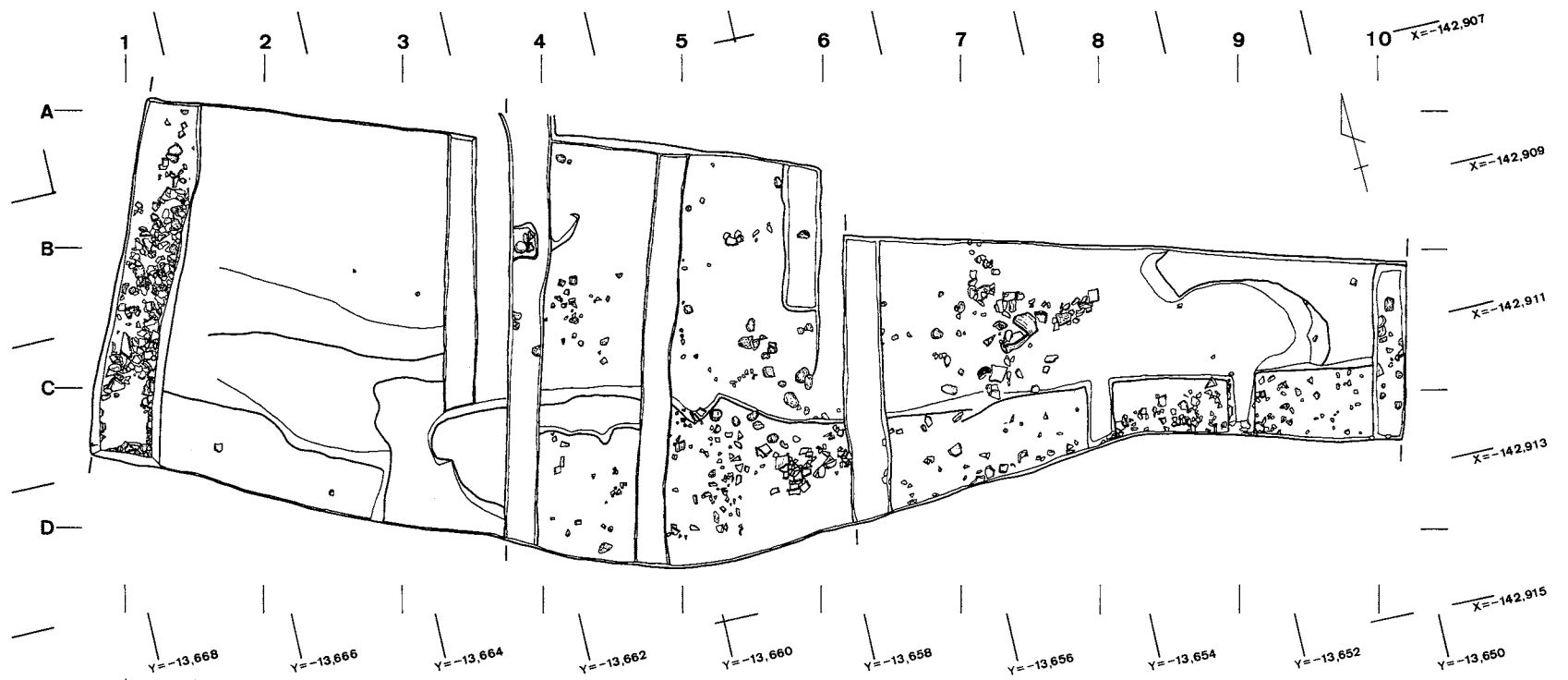
第52図 中ノ島遺跡調査位置図



中ノ島遺跡

- ① 耕作土
- ①' 耕作土(5~10mmの礫を含む)
- ② 茶褐色粘質土層(下面に鉄分の沈デン)
- ③ 暗灰褐色粘質性砂質土層(5~10mmの礫を含む)
- ④ 黄灰褐色粘土層(粘土層と黄褐色砂礫層の混合層)
- ⑤ 黄褐色砂礫層(50~70mmの礫を含む)
- ⑥ 暗褐色砂礫層(5~20mmの礫を含む)
- ⑥ 粗砂層
- ⑦ 灰褐色砂礫層(表面に20~40mmの礫を多量に含む)
- ⑧ 褐色砂礫層(100mmの礫を含む)
- ⑨ 褐色砂層(細砂層、5~10mmの礫を含む)
- ⑩ 褐色砂礫層(粗砂10~100mmの礫を含む)
- ⑪ // (細砂層50~100mmの礫を含む)
- ⑫ 灰褐色粗砂層(細砂と疎砂の互層、5~50mmの礫を含む)
- ⑬ 灰褐色砂礫層(粘土ブロックを含む)
- ⑭ 黄褐色砂礫層(粘土ブロックを含む、50~200mmの礫を含む)
- ⑮ 灰褐色砂礫層
- ⑯ // (50~70mmの礫を含む)
- ⑰ 黄褐色砂礫層(30~100mmの礫を含む)
- ⑱ 青灰色粘土層、黄褐色粘土層のブロック層
- ⑲ 黒褐色砂礫層(50~100mmの礫を含む)
- ⑳ 黄褐色粗砂礫まじり

第53図 中ノ島遺跡29bt平面・断面実測図



- ① 黒褐色粘質土層(耕作土)
- ② 暗褐色粘質土(床土)
- ③ 暗黄褐色砂質粘土層
- ④ 灰褐色粘性砂質土
- ⑤ 灰褐色粘質土(上面～赤褐色砂礫層を含む)

- ⑥ 灰褐色～赤褐色砂層
- ⑦ 黄灰色粘質土
- ⑧ 暗青灰色粘土層(瓦包含層)
- ⑨ 黒灰色粘土層(炭・瓦を含む(灰原))
- ⑩ 暗褐色砂質粘土・礫混り層
- ⑪ 褐色砂性粘土層・礫混り
- ⑫ 暗黄褐色砂性粘質土・礫混り
- ⑬ 暗黄灰色砂質礫混り層
- ⑭ 黄灰色・灰色砂質土層
- ⑮ 黄灰色・灰色砂礫層
- ⑯ 黄灰色・砂礫層(地山)

第54図 中ノ島遺跡47bt平面・断面実測図

年度の調査は、土地所有者の了解を得られた29・47btの水田に試掘トレンチを入れ、主に土層の堆積状況と遺物の散布状況の確認を中心に調査を実施することとした。当地点は、梅谷瓦窯に隣接している。

調査に用いた地区割りは、29btにおいては国土座標による正方位の割り付けを3mごとにおこなった。47btでは、トレンチが主軸から大きく傾くため任意に地区割りをおこない、遺物の取り上げと実測をおこなった。第53図では国土座標を並記した。掘削には、47btで耕作土と床土を、29btで砂礫層までをバックホーを使用して掘下げ、以下は人力とベルトコンベアーによった。調査は昭和60年11月11日に開始し、翌61年3月8日に終了した。発掘面積は300m²におよんだ。

47btでは、水田中央に3m×20mのトレンチを設定し、土層の確認を中心に調査をおこなったが、地表下2.0mまでは耕作土層と自然堆積の砂層のみであった。そのため、丘陵裾部への拡張をおこなった結果、瓦窯の灰原と考えられる黒灰色の粘土層を検出した。灰原上面は現地地表下0.4m～0.6mではほぼ平坦面をなし、水田耕作によって削平されていた。拡張区の東寄りでは、丘陵との地境より北に1.5m～2.0mで下層の水田造成による削平を受けていた。調査を進めるにしたがい、遺構面が北にむかって次第に深く落ち込むため、発掘の範囲を限定して調査を行った。

調査によって、南側の丘陵から落ち込む地形(地山)の上でも、初期に堆積した最下層の灰原を検出した。灰原からは軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・瓦罎・他の瓦類、須恵器杯A・B・杯A蓋・壺、土師器杯・皿・甕などがコンテナバットに80箱出土した。

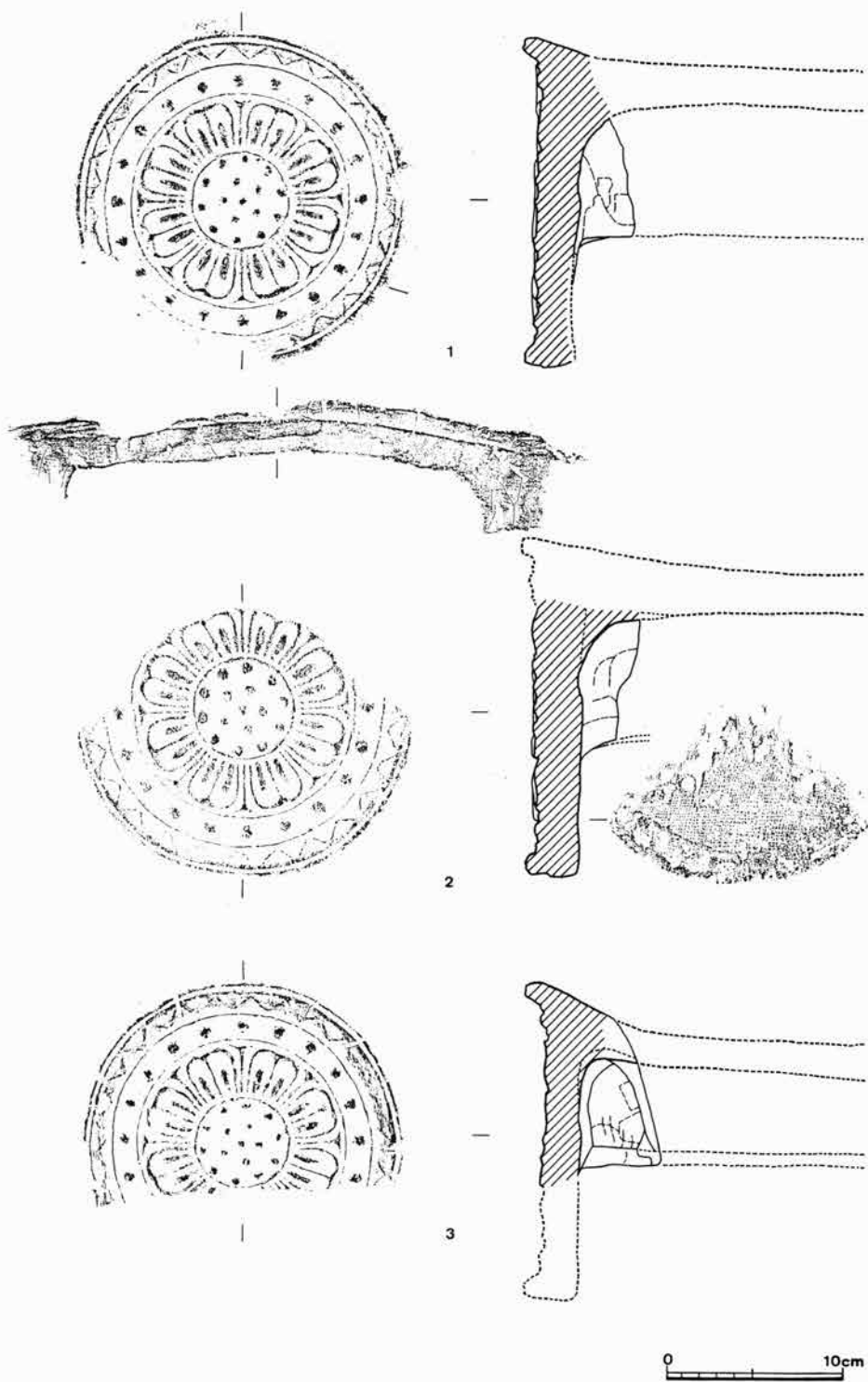
29btでは、3m×3mの試掘トレンチを3か所に設定し、地層の観察を行った。地表下1mまでは47bt同様、水田の造成によって形成された粘土層で、以下3mまで洪水による、上流からの多量の砂礫によって覆われていた。小面積での地層の確認が困難になったため、水田中央に8m×19mのトレンチを設け、面的な発掘調査をおこなった。

調査によって、南側で幅約4mの大阪層群(地山)を削り出したテラスと、北側で溝状の遺構を検出した。テラスの北岸は、礫と粘土で東西に護岸されていた。遺構上面には、灰原の土とともに軒平瓦・平瓦・丸瓦などがコンテナバットに30箱出土した。

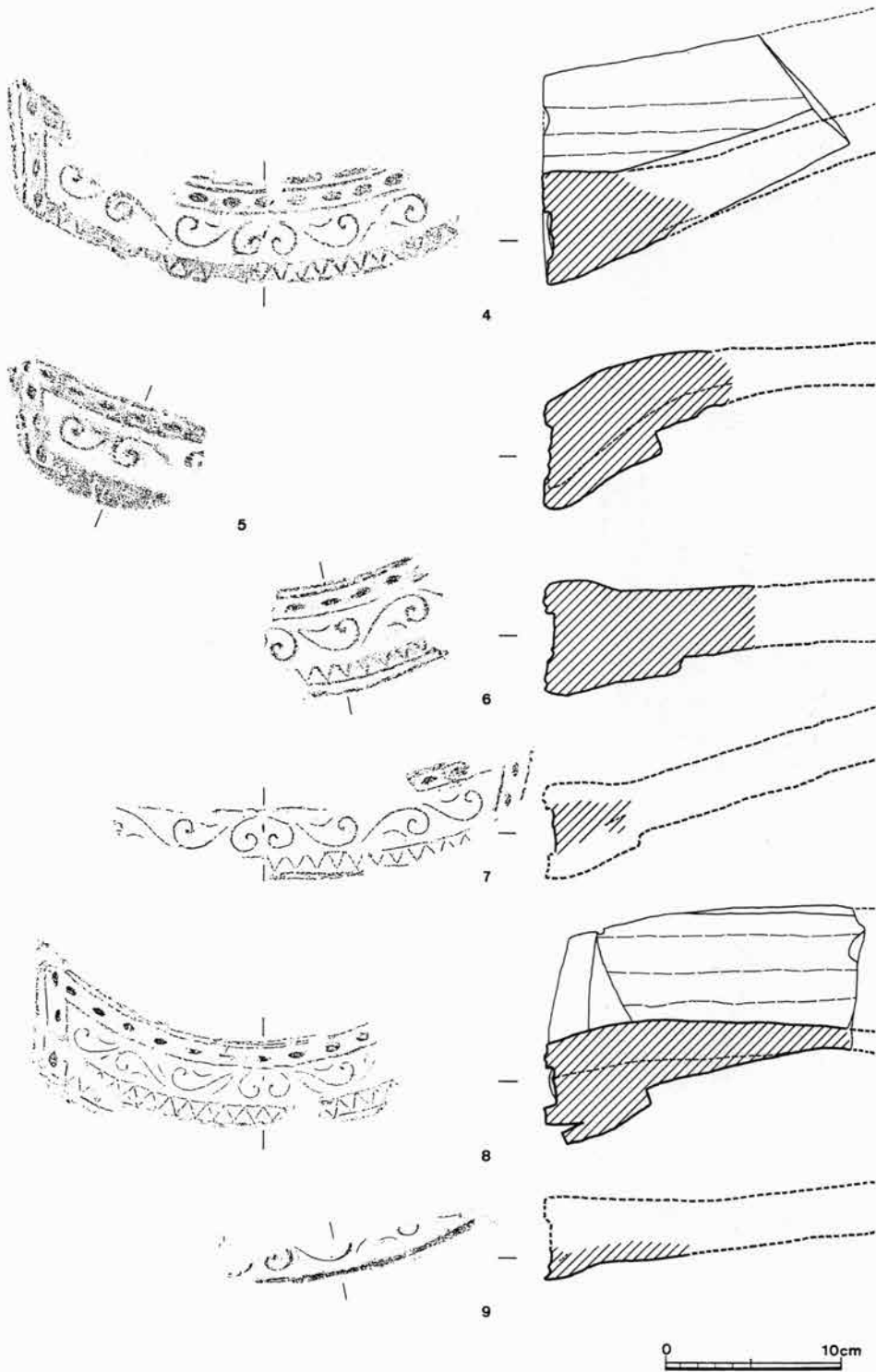
3. 層位・遺構(第52～54図・図版第29～30)

調査によって、47btでは灰原と瓦溜りを、29btではテラス状遺構と溝状遺構などを検出した。また、各地区とも江戸時代の水田面を確認した。

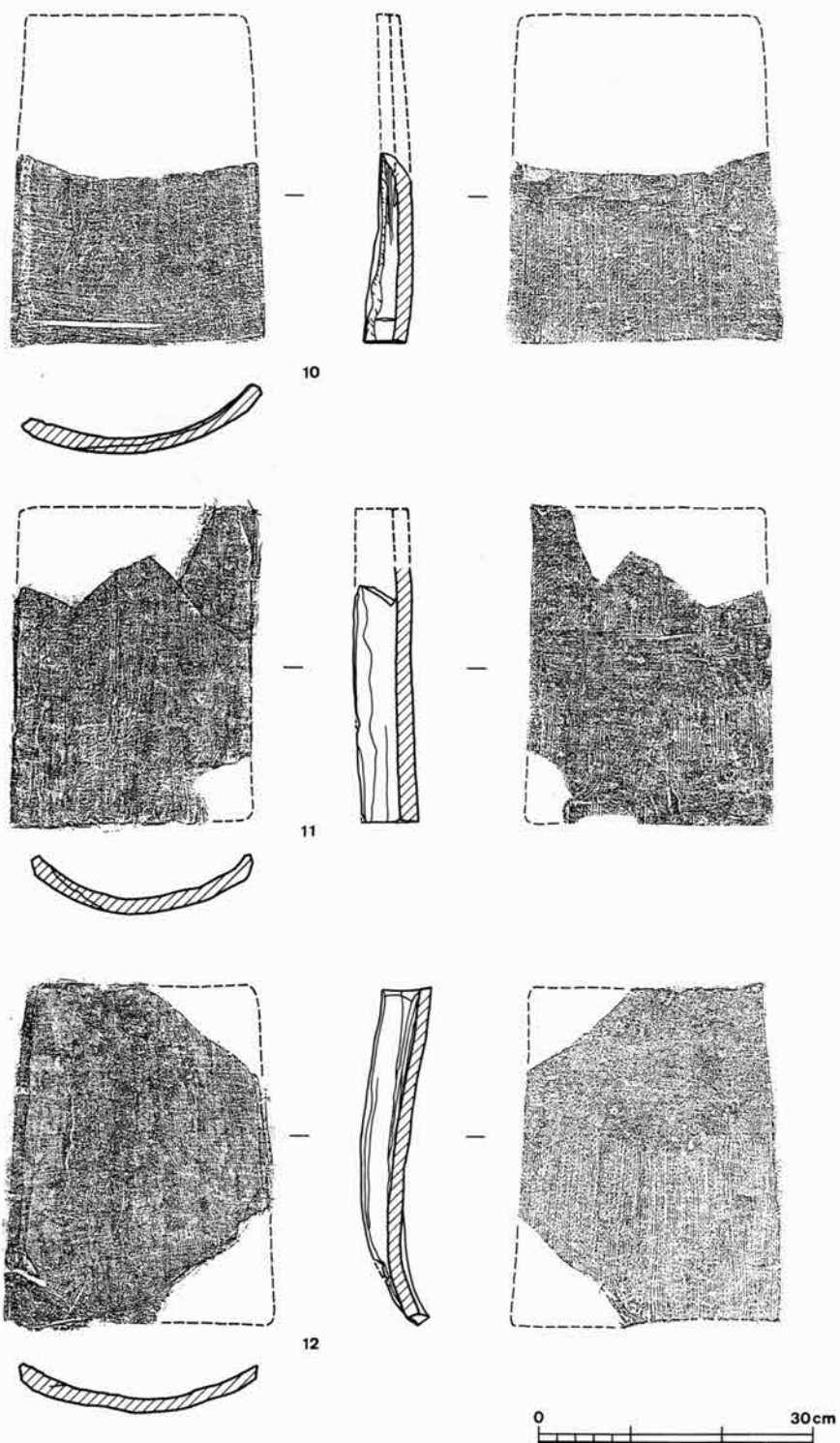
47btでは、耕作土を取り除くと、南よりで検出した第9層の床土内より布目瓦片が多数出土し、これが灰原であることを確認した。第3層から第8層までの各層でも多数の瓦が出土したが、これらの層は二次的な堆積であろうと判断した。しかし、トレンチ東壁を除



第55図 中ノ島遺跡出土遺物実測図(1) 軒丸瓦



第56図 中ノ島遺跡出土遺物実測図(2) 軒平瓦



第57図 中ノ島遺跡出土遺物実測図(3) 平瓦

く第8層の堆積状況は極めて安定しており、遺構面を形成しているのかもしれない状況であった。今後面的な発掘調査によって確認する必要があると考えられる。また、4ライン断面の第5層と、東壁断面の第7・8層が、溝状を呈するのか土壇状を呈するのかは今回の調査では不明である。16層以下は大阪層群(地山)である。

29btでは、第1層から第4層までが水田耕作に係わる粘土及び粘質土である。これは、江戸時代以降に梅谷地区での新田開発がおこなわれた際、人々によって運びこまれた土と考えられる。第5層から第20層までは砂及び礫の自然堆積層で、2m～3mの厚さで堆積している。これらの砂礫は、上流からの洪水によって押し流されたものであると考えられる。砂礫を取り除くと、南側で、幅約4mの大阪層群(地山)を削りだしたテラス状の平坦部と、トレンチ南壁で丘陵にむかって立ち上がる地形を確認した。テラスの北岸は、礫と粘土で東西に護岸されていた。トレンチの北半部では、北にむかって次第に深くなり溝状に落ち込む地形を検出した。テラス上面で軒平瓦・平瓦・丸瓦が、周辺では灰原の土とともに平瓦・丸瓦などが数多く出土した。

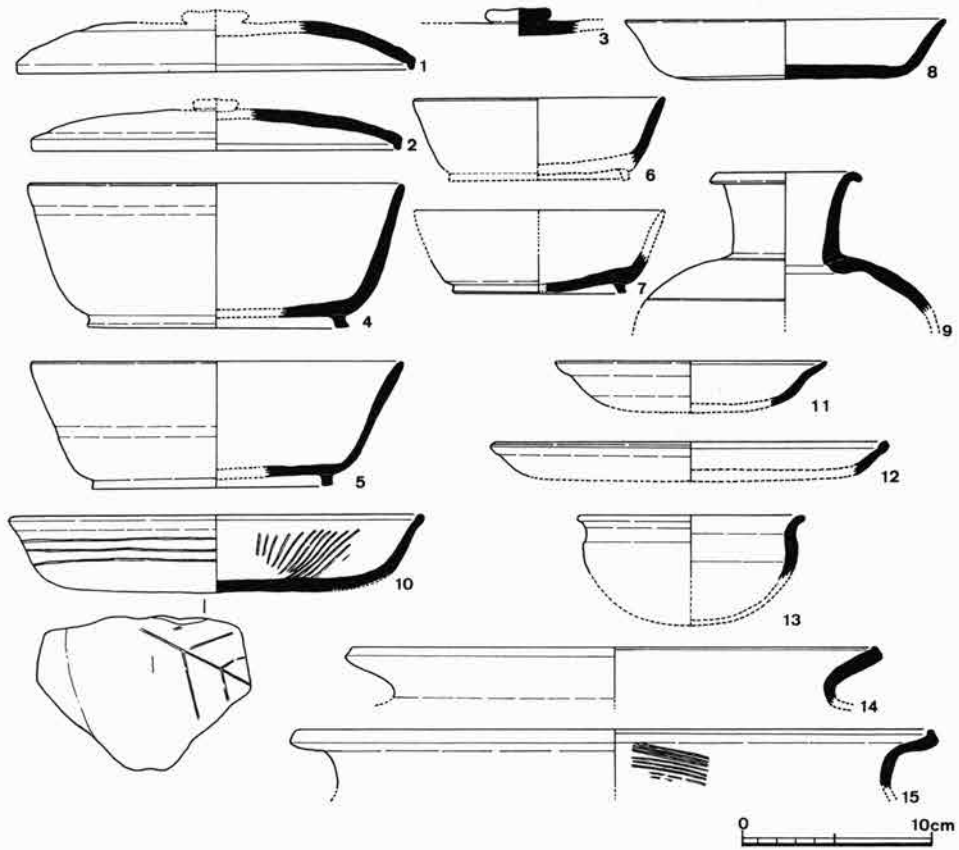
4. 出土遺物(第55～58図・図版第31～33)

今回の調査によって出土した遺物としては、奈良時代の瓦では軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・瓦塼・その他の瓦類があり、瓦に伴って窯壁・日干しレンガ・炭なども出土した。また、奈良時代の土器としては土師器杯・皿・甕、須恵器杯A・B、杯A蓋・壺などが出土した。そのほかの遺物としては、江戸時代の土師質土器、瓦質土器、陶磁器などや、古銭・キセルなどが出土した。

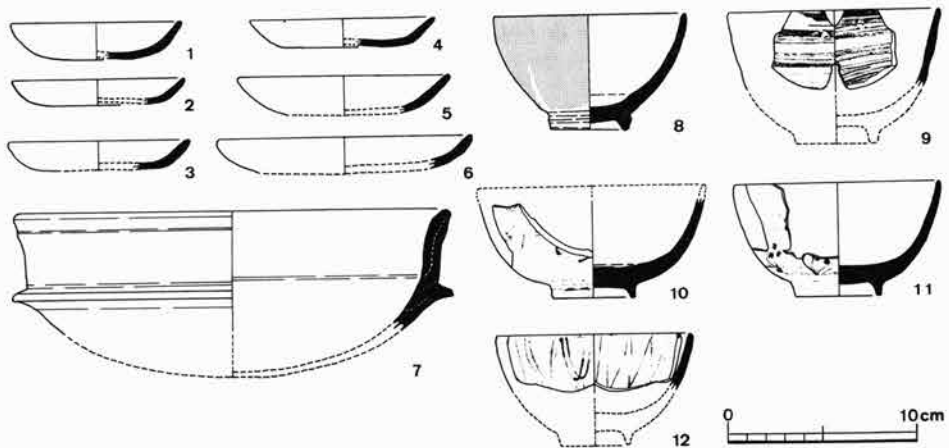
出土した遺物の内、特に注目されるものは、梅谷瓦窯で焼かれた瓦類である。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・瓦塼・その他の瓦などがあるが、このうち軒丸瓦・軒平瓦については、奈良興福寺境内における発掘調査の結果により、同寺創建時に使用した瓦である事が現在までに判明している。

軒丸瓦(第55図1～3)は、複弁8葉蓮華文軒丸瓦で、突出した中房に1+5+9の蓮子を置く。瓦当は大ぶりで、瓦当外周に瓦範の縁が1cm程度の深さで刻まれている(第55図1)。また、瓦当裏面には布目圧痕を留めるもの(第55図-2・図版第31-2・12)と、留めないもの(第55図-1・3, 図版第31-1・10・11, 図版第32-3)がある。これらの軒平瓦はすべて同範であり、奈良国立文化財研究所設定の6301A型式にあたる。

軒平瓦、第56図4～9は、均整唐草文軒平瓦で、上から下へ巻き込む中心葉で中心飾を囲み、3回反転の均整唐草文を左右に配する。上外区と脇区には杏仁状の楕円形珠文をおき、下外区には線鋸歯文をおく。第56図4～6は同範瓦と考えられるが、7は下外区の線鋸歯文が他の3例よりも細く表出しており、別の範による制作と考えられる。以上の軒平



第58図 中ノ島遺跡出土遺物実測図(4) 須恵器・土師器



第59図 中ノ島遺跡出土遺物実測図(5) 陶器・その他

瓦は奈良国立文化財研究所設定の6671A型式にあたる。

また、第56図8は、内区の均整唐草文に、6671A型式にはみられない外反部の子葉が認められること、6671A型式の上外区および脇区の楕円形珠文が、15+4であるのに対し、8は、13+3になることなどにより、6671A型式とは別の型式になるものと考えられる。

第56図9は、焼成時に瓦当の頸部で剥離しているため全容を窺うことはできないが、内区の均整唐草文に、6671A型式と同範と考えられる文様を配する。下外区に線鋸歯文を持たないことにより6671Ab型式と考えられる。しかし、平城京出土の同型式軒平瓦より下外区の幅が狭く、同範ではないと考えられる。平城京出土と同型式の軒平瓦6671Ab型式が出土したことにより、梅谷瓦窯で焼かれた製品の中には、平城京に供給されていたと考えられるものも含まれていることが判明した。

平瓦は、今調査中最も多量に出土した遺物である。焼成時の焼け歪みや破損によって全体を窺えるものは少ないが、そのうち何点かは観察可能なものも出土している。第57図10は、狭端部を欠くが、広端幅は27cmで厚さ1.5~2.0cmを測る。破断面に粘土板合せ目痕が認められ、凹面の右よりの布目圧痕に縦位の縫い目を残す。側面は、3回の縦ケズリで調整している。端面は広端部凹面をヨコナデ調整し、凸面は未調整である。胎土には $\phi 3\text{mm}$ の石粒を含み、焼成は堅緻で凹面の端部には自然釉が付着する。全体に青灰色を呈し須恵質である。

11は、全長35cm、両端幅25cm、厚さ1.6cmを測る。凸面は縦位の縄叩きを施した後、全面に横方向の擦り消しをしている。凹面には模骨痕をとどめ、型から取りはずしたのち縦位のナデ調整を施している。また、側面寄りでは粘土板合せ目痕が認められる。側面は、3回の縦ケズリで調整しているが、凹面側は未調整に近い。端面は狭端部側ではわずかにヨコナデ調整するが、広端部側では未調整である。

12は、全長38cm、広端幅推定30cm、狭端幅推定26cm、厚さ1.6cm~2.0cmを測る。凸面は縦位の縄叩きを施した後、狭端部近くの2/5程度を擦り消している。凹面には模骨痕をとどめ、粘土板合せ目痕が認められる。側面は、3回の縦ケズリで調整している。端面は両端部とも凹面をヨコナデ調整している。胎土には $\phi 7\text{mm}$ 石粒を含み、焼成は堅緻。凸面に大きく焼け歪み、青緑色の自然釉が付着する。全体に青灰色を呈し須恵質である。

出土した土器類、須恵器杯A・B、同蓋・壺・土師器杯・皿・甕(第58図)は、いずれも奈良時代前半のもので、興福寺の創建年代、梅谷瓦窯の操業年代を考える上で貴重な資料といえる。

須恵器杯蓋(第58図1・2・3)は、1が口径21.0cm、2が19.7cmを測る。端部に段を持たない形態である。

須恵器杯B(第58図4・5・6・7)は、口径が20cm、器高が7.6cmと6.5cmの大型のもの(4・5)と、口径が13.5cm、器高が4.5cm程度の小型のもの(6・7)とがある。

須恵器杯A(第58図8)は、口径が17.0cm、器高が3.2cmを測り、胎土に $\phi 1$ mmの石英粒を多量に含む。

須恵器壺(第58図9)は、倒卵形の体部に、外反しながら立ち上がり端部で垂下する口縁をもつ。

これらの須恵器は当遺跡の北方4kmに所在する巾ヶ谷須恵器窯の製品と形態・胎土がきわめてよく似ている。



第60図 梅谷瓦窯と興福寺

土師器杯A(第58図10)は、口径が22.0cm、器高が4.0cmを測る。底部に木の葉の圧痕をもち、杯部内面には放射状の暗文を施し、外面に粗いヘラ磨きを施す。

土師器皿(第58図11・12)は、口径4.5cm、器高21.2cmと、口径21.0cm、器高2.0cmをそれぞれ測る。土師器壺B(第58図13)は、口径12.0cmを測る。

土師器甕(第58図14・15)は、口径28.0cmと、34.0cmをそれぞれ測る。

第22図の土師質土器、瓦質土器、陶磁器は、47btトレンチ耕作土及び床土から出土した。1～6は土師質の皿で、口径9cm～13.5cmを測る。7は瓦質の焙烙で、口径23cmを測る。大和型の焙烙である。8は唐津系青緑釉碗で口径10.5cm、器高6cmを測る。9は唐津系刷毛目文碗で口径11cm、10～12は伊万里系染付碗で、11が口径11cm、器高6cmを、12は口径10.5cmをそれぞれ測る。

5. まとめ

奈良興福寺の創建によってはじめて中央の歴史の舞台に登場したこの梅谷地区は、木津東部丘陵の山間の地で、周辺には顕著な遺跡が皆無に近い地域である。しかし、この遺跡の所在する奈良山の地域は、豊富で良質の粘土を産出し、七世紀末頃から盛んに須恵器窯が営まれている。また、都が平城京に遷されると、都城や諸寺院の造営のため数多くの瓦窯が創業されることとなり、この梅谷地区でも、興福寺造営の地より直線距離にしてわずか3kmという地理的要因(第60図)もあって梅谷瓦窯が営まれることとなった。

当瓦窯は、発見されて後も久しく調査される事がなかったが、今回ようやくその一部が調査された。中ノ島遺跡で発見された灰原やテラス状遺構は、遺物の出土状況からもこの

遺跡に梅谷瓦窯関連遺構の存在を推測させるものである。今回の調査はきわめて部分的なものであるため、瓦窯や工房などの遺構を解明するには至らなかったが、現在までに次のことが明らかになった。

- (1) 梅谷瓦窯は、47btでの灰原の検出状況により、その範囲が現在考えられているよりも東に広がるということ。また、中ノ島遺跡と梅谷瓦窯はお互いに重なり合っており中ノ島遺跡はこの窯の工房などの性格を持っている遺跡であることが判明した。
- (2) この遺跡で出土した軒丸瓦・軒平瓦は、興福寺の調査により出土した創建時使用瓦と同範であることが判明した。
- (3) 今回出土した軒丸瓦は、いずれも同範であることが判明したが、瓦範の崩れは認められず、興福寺の調査により出土した瓦のなかにある瓦範の崩れものは今回の調査では認められなかった。
- (4) 今回出土した軒丸瓦は(第55図-1, 図版第31-1)を基準とすると、上下が正確に逆転した形で丸瓦の接合が行われている。このことから、この窯の工房で使用された瓦範は、上下の単位で認識できるものであったと考えられる。
- (5) 今回出土した軒平瓦は、3種類4範あり、このうち第56図-8, 図版第32-8は、現在までに型式決定されていない可能性がある。
- (6) 平城京出土と同型式の軒平瓦6671Ab型式が出土したことにより、梅谷瓦窯で焼かれた製品の中には、平城京に供給したと考えられるものも含まれていることが判明した。
- (7) 今回出土した平瓦は、観察可能なものによると、粘土板合せ目痕や、凹面の布目圧痕に縦位の布の綴じ合わせ痕が認められる。狭端部側横位のナデ調整や、広端部が未調整であることなどからして、梅谷瓦窯で制作された平瓦は、桶巻き技法による4枚作りであったと考えられる。
- (8) 出土した土師器・須恵器は、量も少なく器種構成やパーセンテージを読みとることは出来ないが、いずれも奈良時代前半期のもので、興福寺の創建年代、梅谷瓦窯の操業年代を考える上で貴重な資料といえる。
- (9) 梅谷地区における新田開発は、中岡惣兵衛らによる幕府への長年の嘆願活動の結果、保永16年(1678)御赦免が出されたことによりはじまる。この地区の水田耕作に係わる粘土及び粘質土は、新田開発のため、十七世紀末以降人々によって運びこまれた土である。出土した土師質土器、瓦質土器、陶磁器は、十七世紀末～十八世紀前半にかけてのもので、新田開発で入植した人々が初めてこの地区に持ち込んだものである。

出土した遺物は整理中であり、器種毎の個体数や手法別の割合を集計するには至っていない。ここでは現在までに明らかになった事について概要を述べるにとどまった。詳細に

については今後十分な検討をおこない再述したい。

(戸原和人)

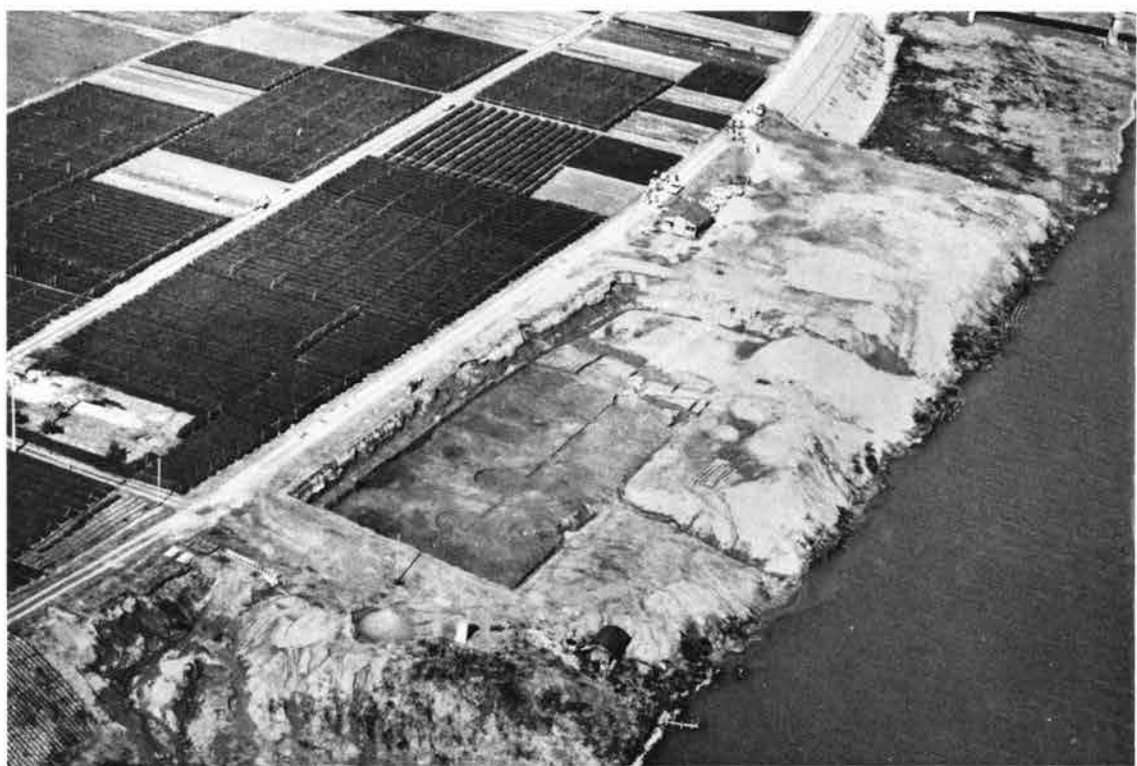
- 注1 京都府教育委員会編『京都府遺跡地図』(昭和47年10月発行)
- 注2 長谷川達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』)京都府教育委員会 1982
- 注3 黒坪一樹・小山雅人・戸原和人・松井忠春「木津地区所在遺跡 昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊-3, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注4 現地調査には、調査補助員として石原 順・岩前良幸・大倉伸也・小住寛二・川本 英・木下年史・木村和彦・滋井秀明・滋井雅章・武田一郎・田中達也・田中康夫・福井真史・前田寛・水野哲朗・三宅正樹・宮本純二・村田和宏・吉川啓太各氏の参加・協力を得た。遺物の洗浄・実測、図面のトレースなどの整理作業には上記のほか、中塚 等・奥野容子・白石由香・新谷三代・中野邦江・野村道江・林 恵子・平岡佳代子・藤中貴子・柳沢登紀子・柳沢洋子などの各氏の協力を得た。
- 注5 注2に同じ
- 注6 注2及び平良泰久「梅谷瓦窯」(『木津町史 資料編I』木津町) 1984
- 注7 注2に同じ
- 注8 『興福寺食堂発掘調査報告』(『奈良国立文化財研究学報』第7冊昭和34年) 興福寺『興福寺防災施設・発掘調査報告書』(昭和53年)
- 注9 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦形式一覧』(昭和53年3月発行)
奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦形式一覧<補遺編>』(昭和59年3月発行)
- 注10 注8に同じ
- 注11 瓦範の鑑定については、当センター主任調査員松井忠春が京都国立博物館考古室長森 郁夫氏及び興福寺国宝館蔵中五百樹氏より御教授いただいた。今後詳細な検討をおこない報告したい。
- 注12 注8により判断した。今後詳細な検討をおこない報告したい。
- 注13 奈良国立文化財研究所上原真人氏に実見していただき、一応の判断として御教授いただいた。今後詳細な検討をおこない報告したい。
- 注14 栗原 敦「梅谷新田」の開発について一資料紹介・中岡又右衛門『梅谷新田開発記』(『やましろ第16号』1983, 8)
栗原 敦「木津にみられる新田開発と南山城の新田開発」(『広報きつ』1982, 3月号)
中津川敬郎「梅谷村」(『京都府の地名』平凡社1981)
- この資料のなかで梅谷村の新田開発は、延宝3(1675)年2月に出された、「諸国新田になるべき場所これあれば訴え出るべし」という幕府の触れにもとずいて、木津郷千童子村の中岡又右衛門と惣兵衛による京都町奉行への嘆願書の提出に始まる。4年後の延宝7(1679)年までに、三代官へ157回、京都町奉行(東・西)へ187回、淀藩の検地奉行へ19回、江戸へ3回の嘆願を行いやっとゆるされて(幕府から開発許可=「新田御赦免」をとりつけた)、延宝8年(1680)から着手している。

圖

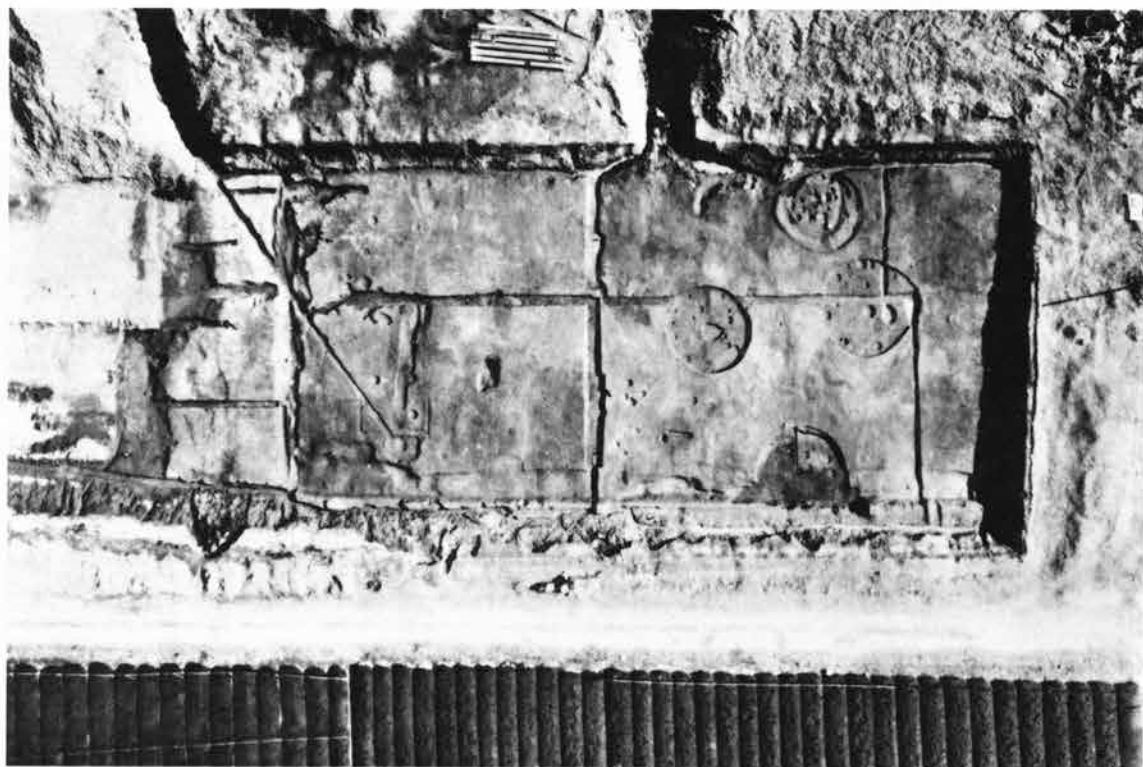
版



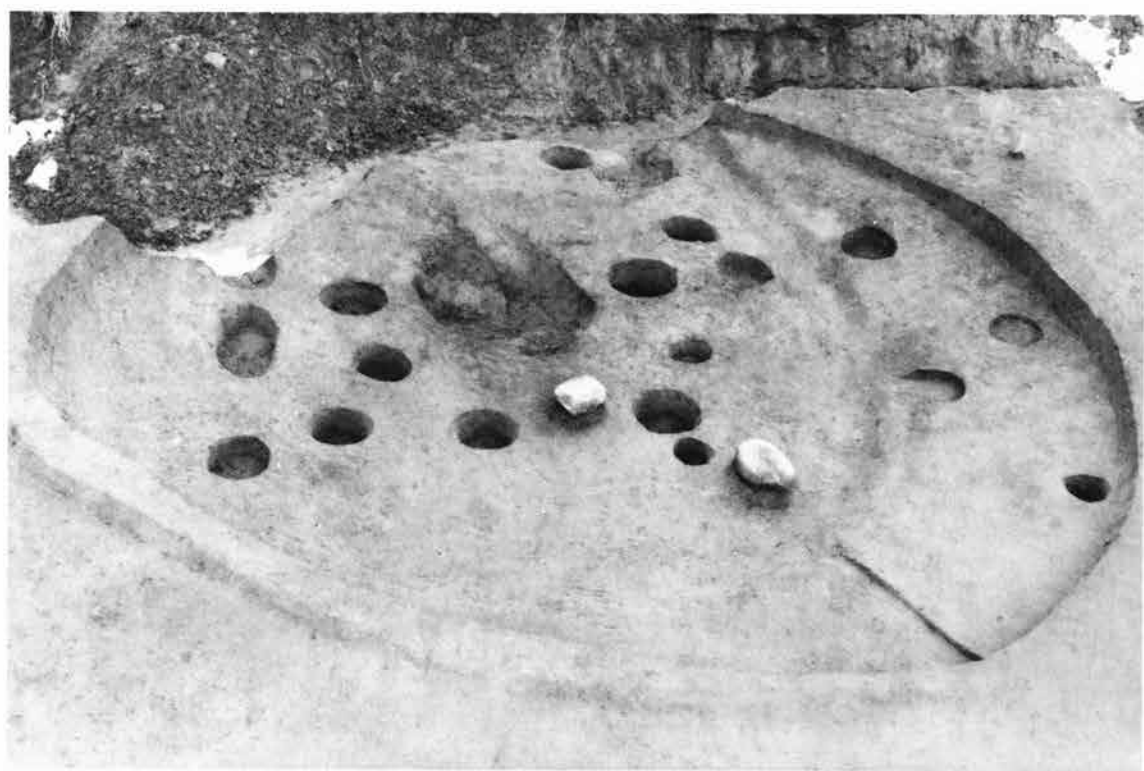
(1) 調査地遠景 (志高城跡から)



(2) 調査地全景 (上空から)



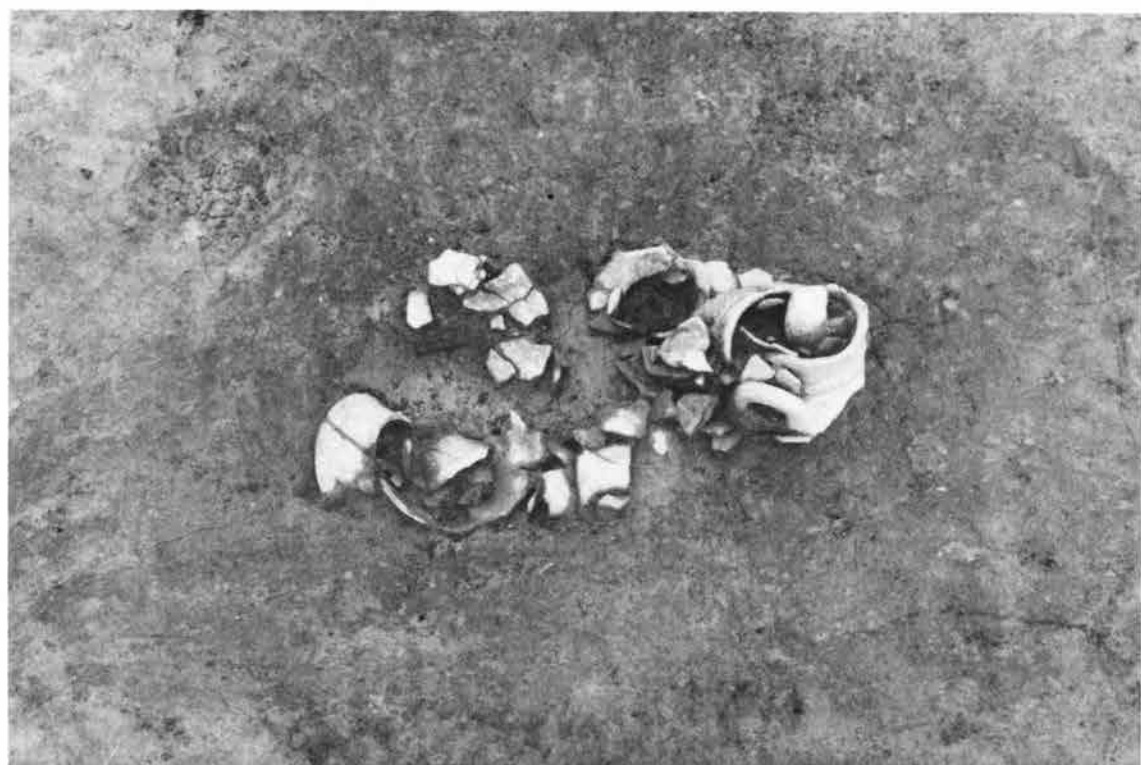
(1) 弥生時代遺構全景（上空から）



(2) SH85205検出状況（北から）



(1) SK85201遺物出土状況(南から)



(2) SK85206遺物出土状況(東から)



(1) SD85211内石剣出土状況



(2) 管玉出土状況



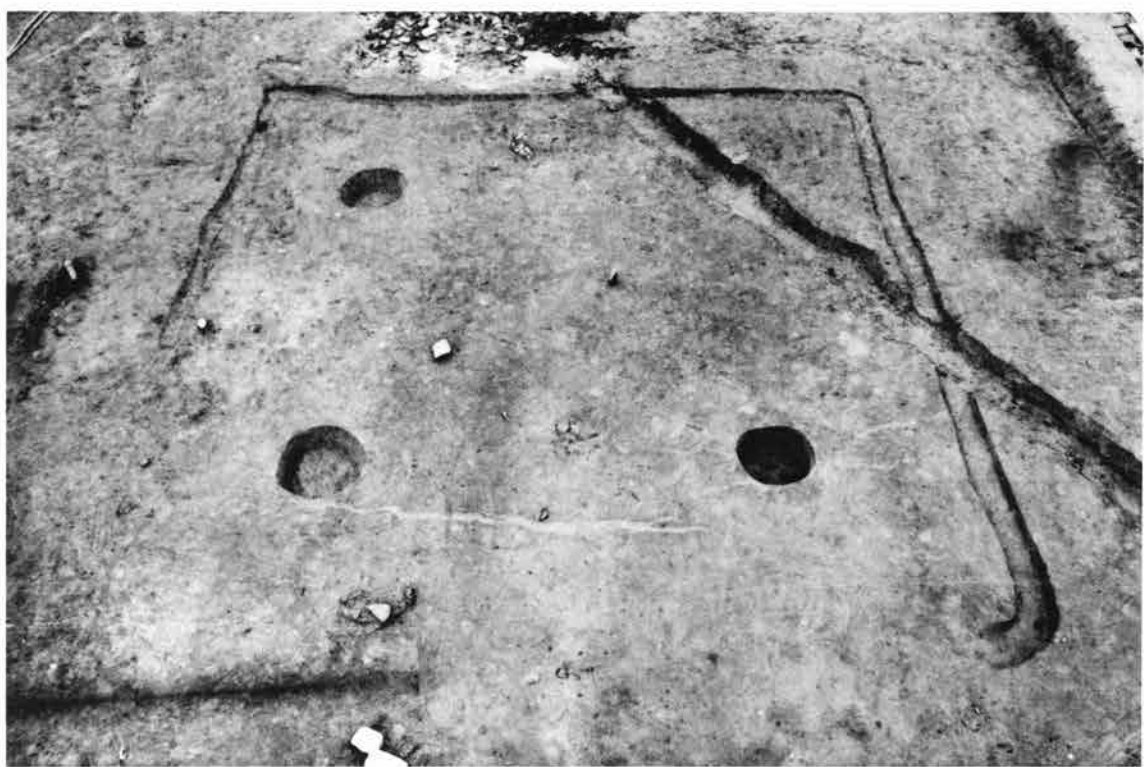
(1) 旧河道岸部（北から）



(2) 旧河道岸部遺物出土状況（北から）



(1) 古墳時代竪穴式住居跡群（東から）



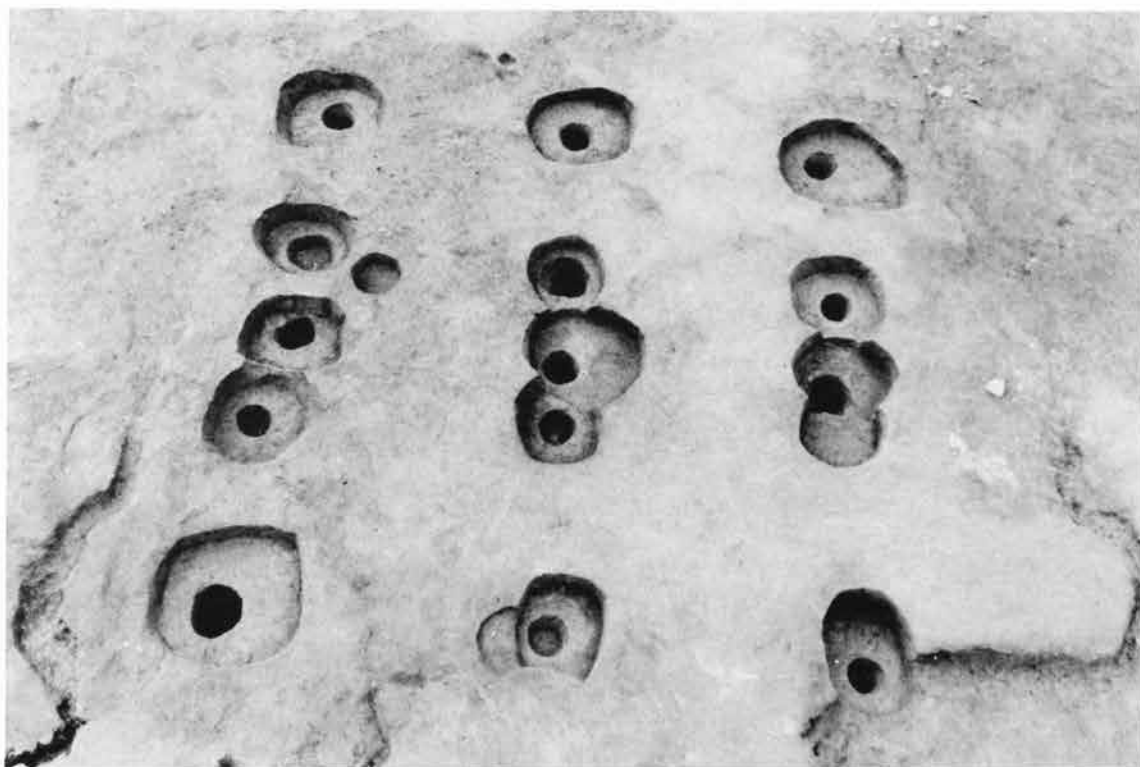
(2) SH85111検出状況（南から）



(1) 奈良時代掘立柱建物跡群 (東から)



(2) 同上 (南から)



(1) SB 85006検出状況 (東から)



(2) SB 85024検出状況 (東から)



(1) SX85001遺物出土状況



(2) SK85044検出状況(北から)



(1) 縄文土器 (表採資料)



(2) 石鎌 (縄文・表採資料)



出土遺物(1)

1~4 須恵器, 5 土師器, 6 紡錘車, 7 土製勾玉, 8 管玉, 9 銅鏡



1



2



3



4



5



6



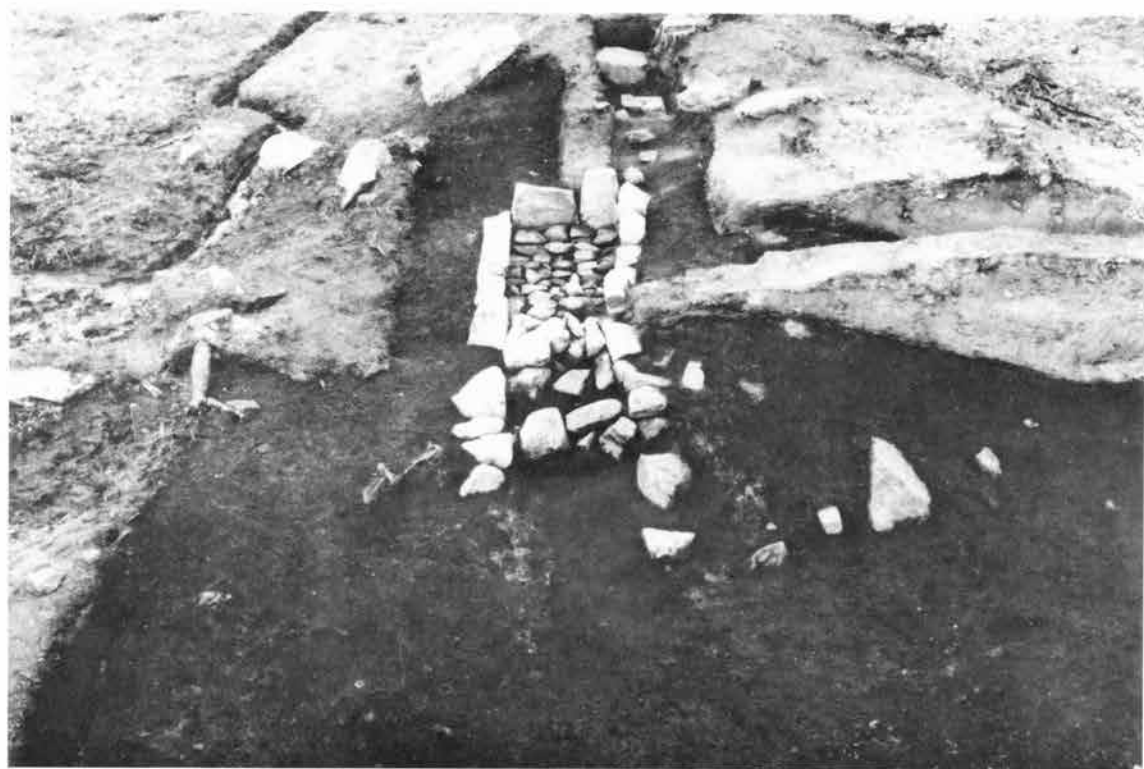
7

出土遺物(2)

1・2 石剣, 3 磨石, 4 砥石, 5~7 石斧



(1) 調査前全景 (西から)



(2) 4号墳全景 (南西から)



(1) 4号墳石室全景(南西から)



(2) 4号墳石室床面



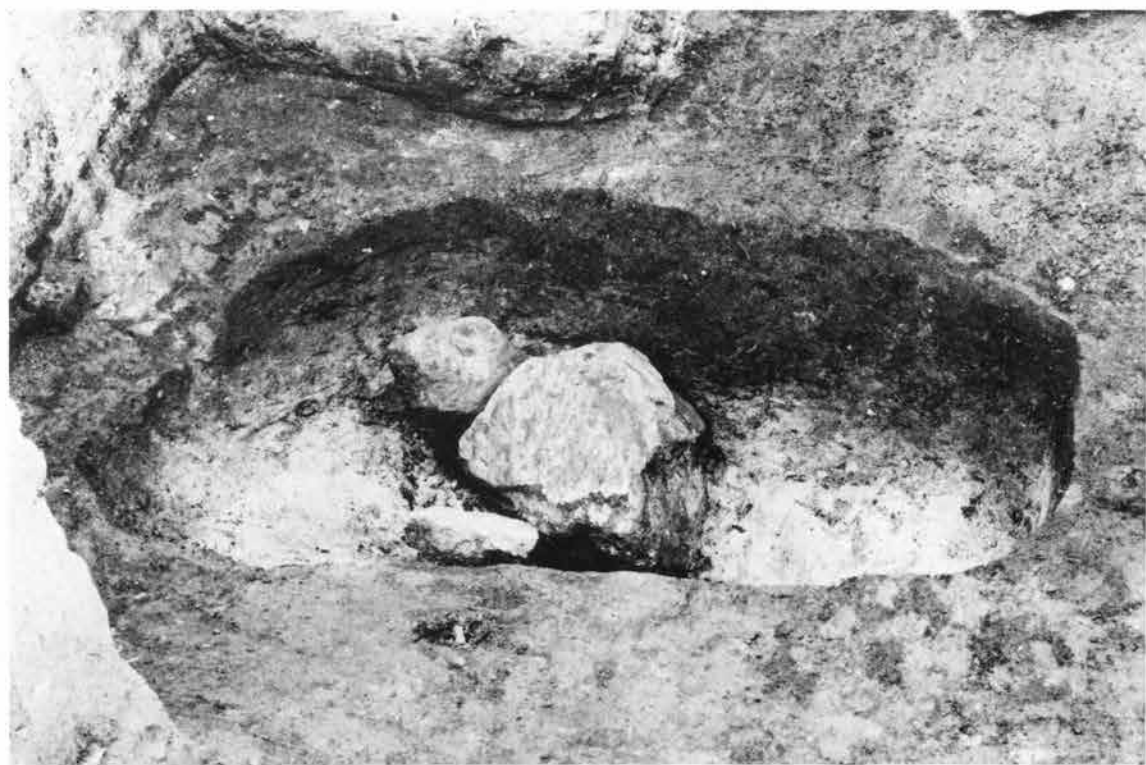
(1) SD01 (南東から)



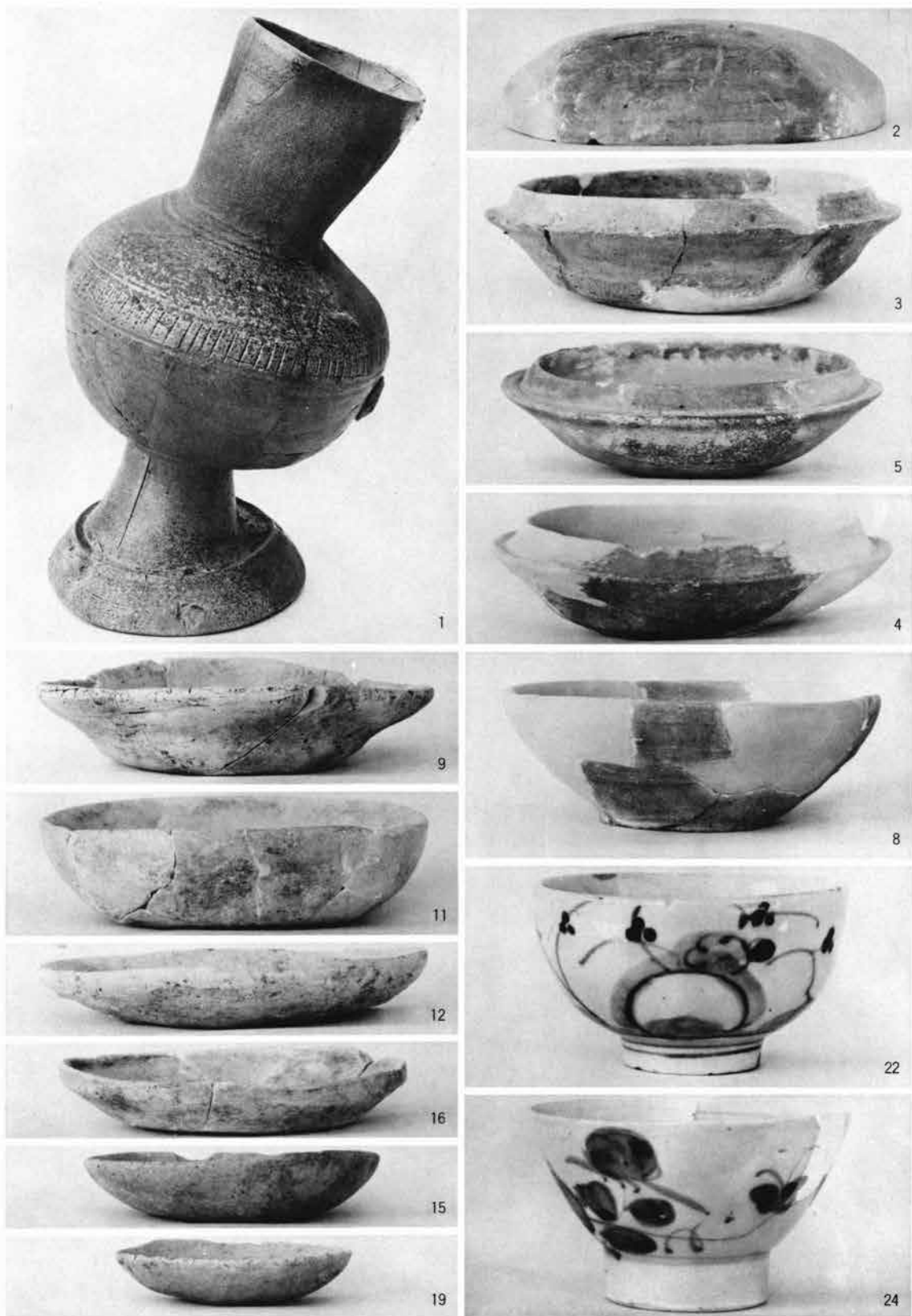
(2) SD02・SD05・SD04 (南東から)



(1) SD02断面



(2) SX01 (東から)





(1) 調査地全景 (南から)



(2) 同上 (北から)



(1) 1トレンチ全景（北から）



(2) 2トレンチ全景（南から）



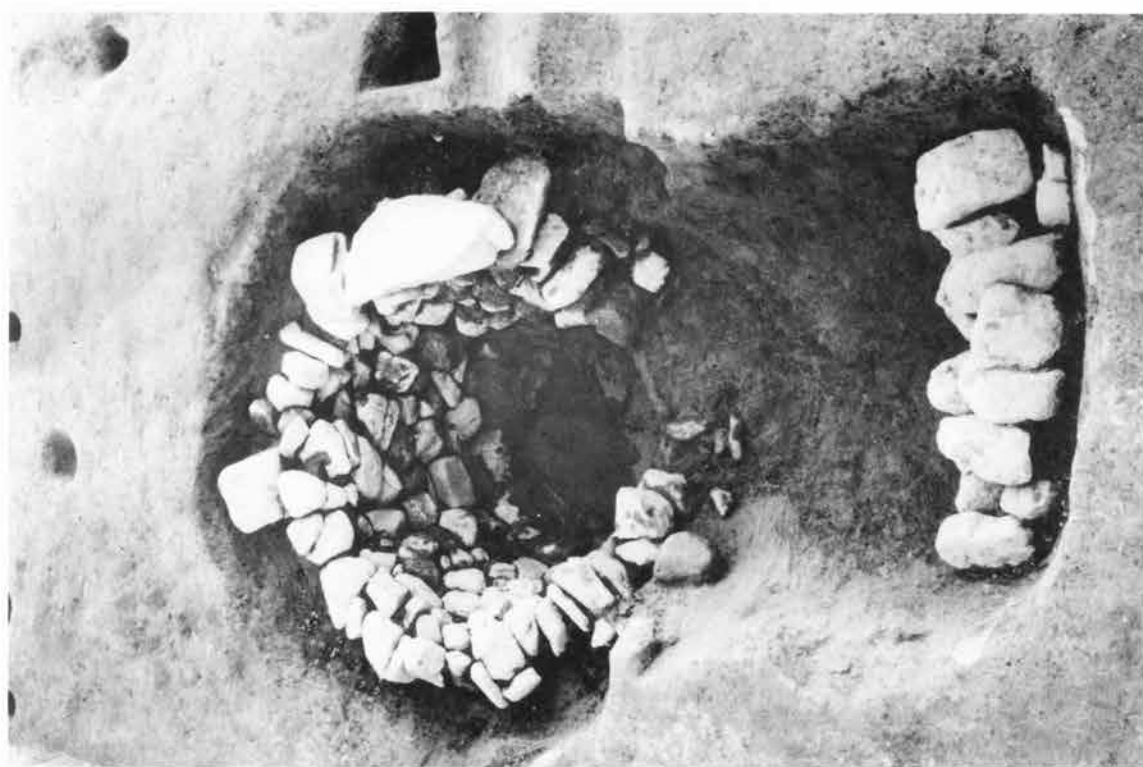
(1) 3トレンチ全景 (南から)



(2) 竪穴式住居跡(SH10099)全景 (南から)



(1) 4トレンチ全景(北から)



(2) 井戸跡全景(SE10116)(北から)



(1) 調査前全景 (北東から)



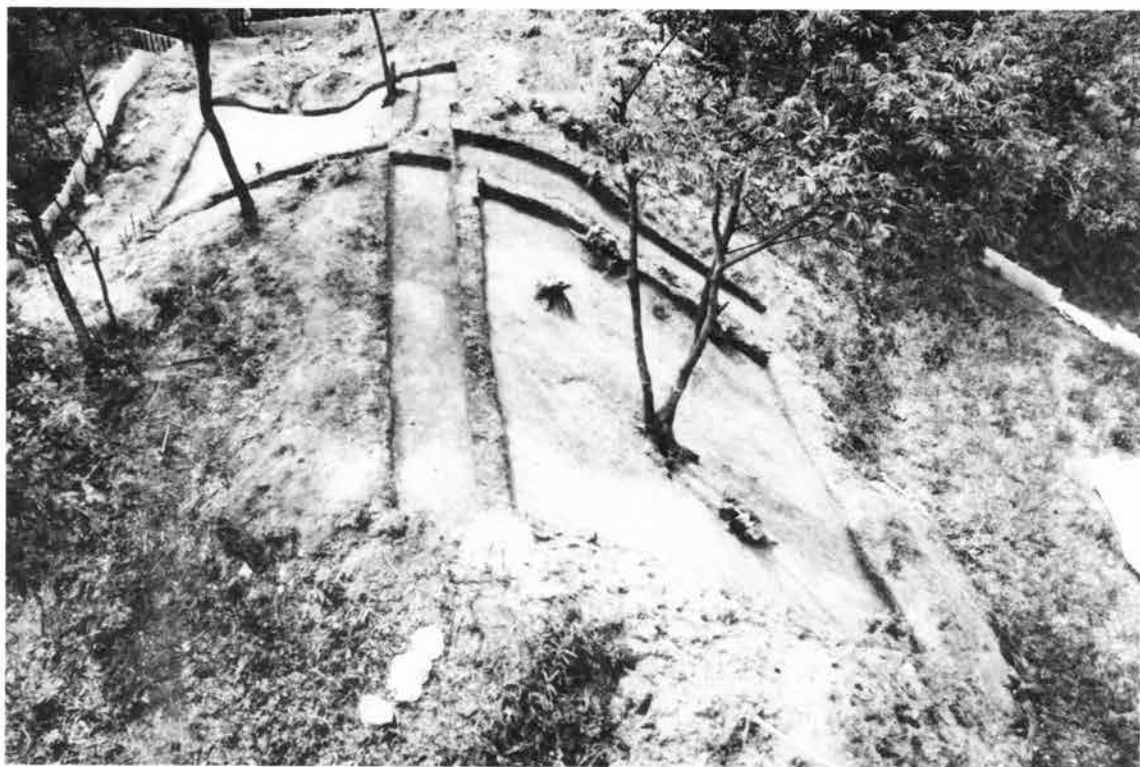
(2) トレンチ全景 (東から)



(1) 第24地点(北中ノ谷古墳)試掘トレンチ調査状況(北東から)



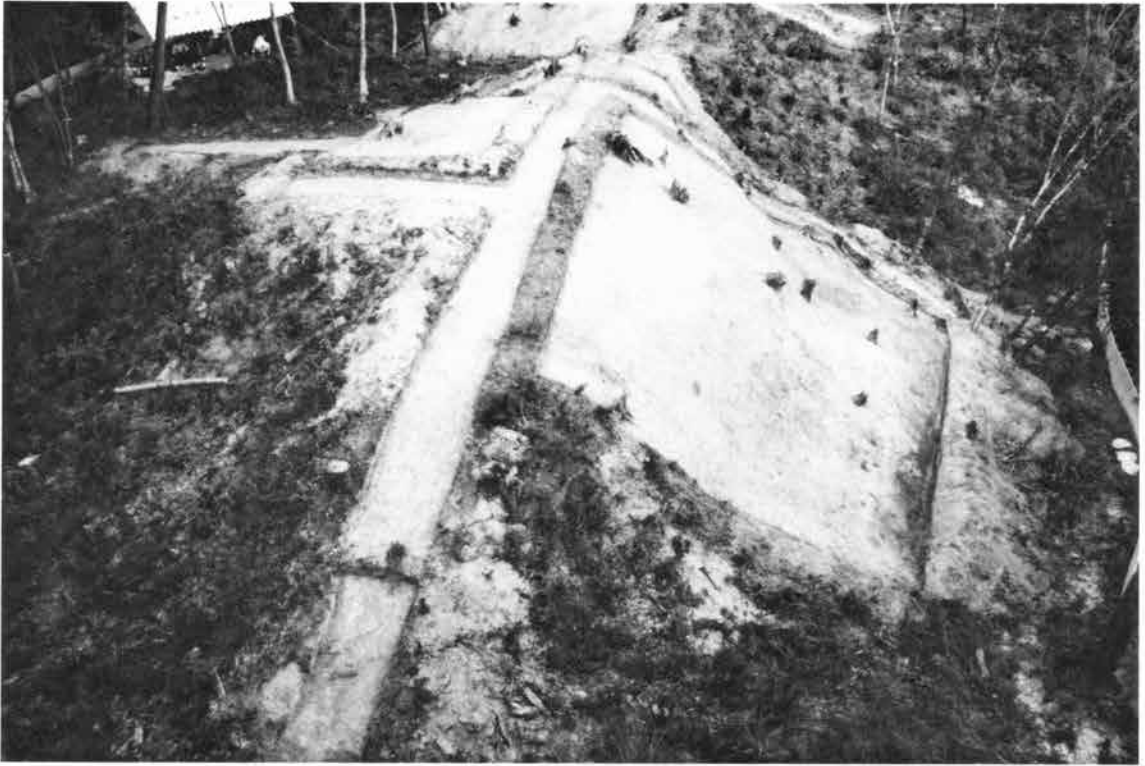
(2) 第24地点(北中ノ谷古墳)調査トレンチ全景(東から)



(1) 第25地点(中山古墳)調査トレンチ全景(東南から)



(2) 第25地点(中山古墳)地層断ち割り状況(東南から)



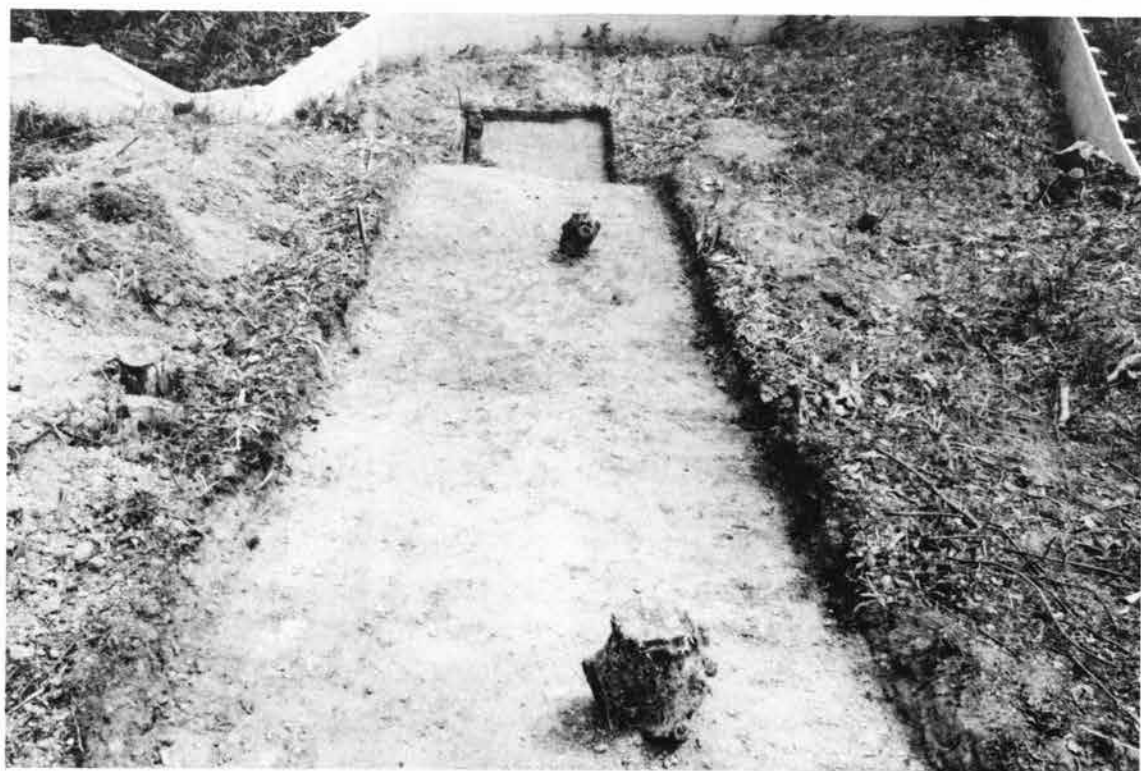
(1) 第26地点(中ノ平古墳)調査トレンチ全景(南から)



(2) 第26地点(中ノ平古墳)地層断ち割り状況(南から)



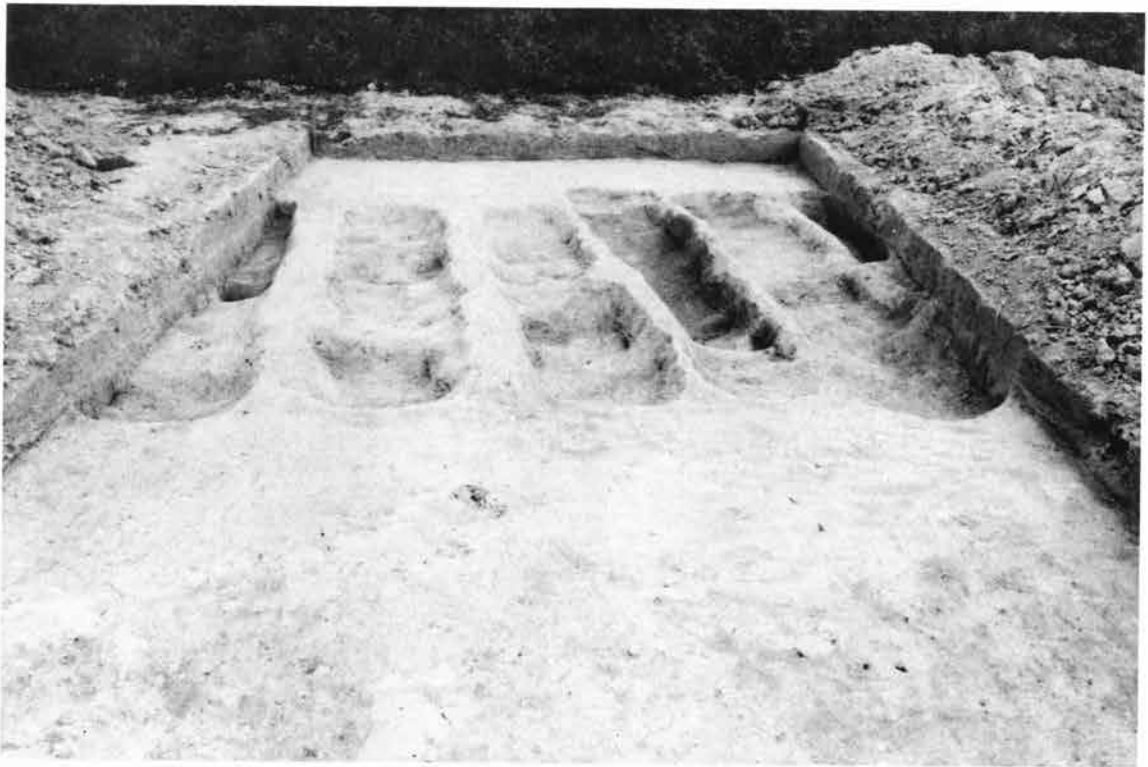
(1) 第44地点(奥ヶ平遺跡) 調査トレンチ全景 (北西から)



(2) 第44地点(奥ヶ平遺跡) 東行きトレンチ (南西から)



(1) 第46地点(中ノ平遺跡)調査トレンチ全景(南西から)



(2) 第46地点(中ノ平遺跡)遺構検出状況(北東から)



(1) 菩提遺跡91・92bt 全景 (南から)



(2) 菩提遺跡95bt 全景 (西から)



(1) 中ノ島遺跡29bt 全景 (南東から)



(2) 中ノ島遺跡29bt 遺物出土状況 (西から)



(1) 中ノ島遺跡47bt 灰原検出状況一1 (北西から)



(2) 中ノ島遺跡47bt 灰原検出状況一2 (南東から)



—

1



—

2



10

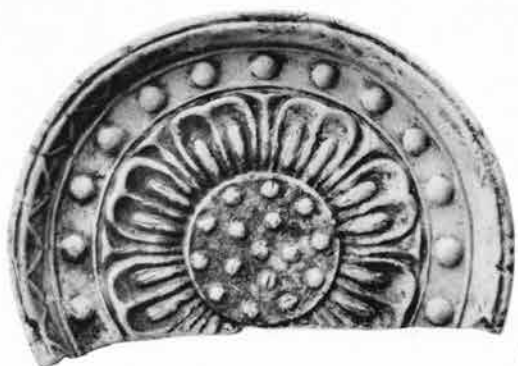


11



12





3



13



4



1



7



9



8



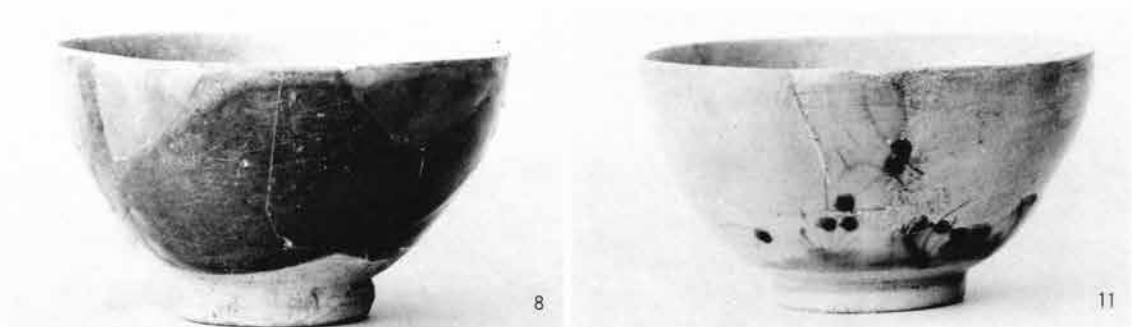
5



6



(1) 中ノ島遺跡47bt 灰原出土土器



(2) 中ノ島遺跡47bt 床土出土陶器

京都府遺跡調査概報 第21冊

昭和61年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)